
続・ミステリアス眼鏡

こたろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・ミステリアス眼鏡

【Nコード】

N8276M

【作者名】

こたろー

【あらすじ】

瓶底眼鏡をかけたダサイ会社の先輩、渋沢守と新入社員の前園香澄は、晴れてお付き合いが始まった。幸せいっぱい二人が、さなるステップに。二人が次に進むステージは「結婚」。結婚に辿り着く前にたくさんの困難(?)が待ち受ける……! (かも) 「ミステリアス眼鏡」の続編でございます。

01・久々のデートなのに！

「ふふふ……」

雨が降るこの季節、鬱陶しい天気が続いていたにも関わらず、私、前園香澄の胸は弾んでいた。うつすら漏れる笑いに周りはずっと引き気味なのは気付いていたけれど、そんなことはお構い無しに自分の世界にどっぷりと浸かっていた。

「ちょっと、その笑いどうにかならないの？ 気持ち悪いよ、香澄ちゃん」

「え？ ああ、樹くんと言われるなんて心外だなあ」

「どういうこと！？ それって俺が気持ち悪いってこと！？」

「まあまあ、小さいことは気にしない気にしない」

「なんかムカつくなあ」

ここは相変わらず仲の良い渋谷三兄妹の住処。今日も私は渋谷家に遊びに来ていた。

まもちゃんと付き合いだしてから一年ほど経った今でも、私達は相変わらずのらぶらぶっぷりで、まもちゃんの弟である樹くんはそれがちよつと面白くない。穏やかな渋谷家に私という色ボケ女が来たことで、どうも調子が狂うというのだ。樹くんの暴言をスルーする術も身に付け、私は我が家のように渋谷家のリビングで寛いでいたのだ。最近ではそんな私の態度に樹くんのほうが諦め気味だ。

まもちゃんは同じ会社の先輩で、部署内恒例の飲み会で初めて話をした。彼の見た目はハッキリ言って物凄くダサかった。髪は染めた事がないようで真っ黒だし、後ろの毛は跳ねているし、拳句の果てに表情がわからないような瓶底眼鏡をかけていた。一般男性より

も背は小さく華奢すぎる体で男性としての魅力は皆無。しかも私の名前すら覚えてくれてはいなかったのだ。でも、まもちゃんはとも面倒見が良く、話してみるととても感じの良い男性だったのだ。人は見た目で判断してはいけない、そう思わされた。そんな彼となんだかんだで色々あって、私達はこうして付き合うことになったのだ。人に表情を読まれないように、我が身を守るようにとかけていた瓶底眼鏡はすっかり取り外されて、眼鏡に隠された可愛らしい素顔を今では見せている。そんな可愛らしい彼が私の自慢の彼氏、渋沢守だ。

「香澄、おまたせ」

「終わったんですか？」

「うん、もう終わり。出かけようか」

「はい！」

今日は久々のまもちゃんとのデート。これから一緒に映画を観に行く約束をしていたので、早くから渋沢家で待っていた。まもちゃんのお仕事はまだ終わっていないかったため、少しだけリビングで待機していたのだが、なぜかいつも樹くんが側にいる。樹くんくらいの年頃の子が家でゴロゴロしているのも珍しいなあと時折思っていたけれど、まあいいか、位にしか思っていなかった。話し相手になっってくれる樹くんは、こうして待機することが多い私にとってはありがたい存在だ。樹くんとお喋りをしている間にも、まもちゃんの仕事が終わったので私達はそのまま渋沢家を出て行ったのだった。

今日のまもちゃんはやっぱり眼鏡を外している。というより、ここ最近は掛けなくなっていた。しかもなんとか頑張って寝癖を直しているようで、後ろの髪の毛の跳ねがあまり目立たなくなっている。そして出かけるときはいつも手を繋ぐ。指を絡めて繋ぐのでいつもよりテンションが上がってしまい、思わずにやけ顔になってしまう。そんな私を見てはくすすと嬉しそうに目を細めて笑うまもちゃんが、

頭を撫でてくれるのだ。もう、それだけで最高に幸せー！！

「最近、仕事はどう？ 慣れてきた？」

「残業もかなり減ったくらい慣れたよ。まもちゃんのお陰だよ！」

実はまもちゃんは先月いっばいで会社を辞めた。今や売れっ子になってしまったまもちゃんは漫画の仕事が忙しくて、会社の仕事どころではなくなってしまったのだ。漫画だけ描いてればいいってもでもないらしく、挿絵やポスター、カレンダー、コミックの扉絵など、仕事はどしどし入ってきた。アニメもだいぶ好評のようでDVD、ブルーレイの販売も売れ行き好調だ。ひと段落したアニメも、もうワンクール放送されることがすでに決定している。そんな忙しい中でも、まもちゃんはちゃんと私を気遣ってくれている。確かに外で会う時間はかなり減ったけれど、それでもこうして側にいることを許されている、それだけで私は幸せだ。

今日観に行く映画は、なんと内海先輩にチケットを頂いた恋愛物の映画だ。内海先輩曰く、彼女もいないのに恋愛映画一人で観に行くのはなんとなく辛いというのだ。そんな内海先輩のご厚意で頂いたチケットを無駄にしないためにも、まもちゃんに映画の話を持ちかけたのだった。ところが、まもちゃんは恋愛映画は苦手だという。でもちよつと甘えた口調で「観に行きたいです」と言ったら、あっさり首を縦に振った。そんな心優しいまもちゃんと一緒に甘々恋愛映画を観に行くと、映画館はすでに長蛇の列ができていた。並ぶのは面倒だけど私達もその列に混ざり、ゆっくりと前に進んでいった。並ぶのそのまま映画館の中に入り席に着くと、まもちゃんが席を立ち飲み物を買うに立つ。にっこり笑って「大人しく待っていなさい」と、立とうとした私を制して館内から出て行った。さりげない優しさが本当に嬉しい。まもちゃんのそんな素敵な性格にしばし一人でうっとりしていたが、待てど暮らせどまもちゃんはなかなか戻ってこない。

どうしたんだろう。まさか迷ってるのか……？

一抹の不安を抱えながら、そわそわと彼が戻ってくるのを待っていた。待っている間は手持ち無沙汰で、おろしたてのワンピースの裾をぎゅっと握ってみたり、髪の毛をくるくる指で巻いてみたりしていたが、彼は戻ってこない。迎えに行ってみようかな……そう思っ
て席を立つと、ちょうど入り口からまもちゃんがドリンクを二つ持って映画館に入ってきた。

「まもちゃ……」

彼の姿を見つけてすぐに席から立ち上がり声をかけようとしたその時、まもちゃんの後に続いて入ってきた綺麗な女性がまもちゃんと仲良さげに話をしていたのだ。にこにこと微笑み合う二人の姿が、私の胸の真ん中に穴を開けるほど突き刺さる。

どうして？　今日は久しぶりのデートなのに……。隣の女性は誰？

楽しそうに話している二人、しかもまもちゃんの肩を女性がふざけて叩いている。正直、私以外の人に触れられてもそんな風に笑っているまもちゃんを見るのは、とても辛かった。私の知らないまもちゃんのように、なんだか全然知らない人にすら見えてくる。まもちゃんが、遠い……。楽しいはずのデートが、この一瞬でダメになりそうな気がしていた。それでも久しぶりのこのデートを堪能したくて、私は彼に気付かないフリをした。ここで怒り出して出て行くのはとても簡単だったけれど、変にまもちゃんとの仲をこじらせたくはない。もしかしたら私が勝手に妬かなくてもいい相手に妬いてるだけかもしれない……。そう思った私は、まもちゃんの姿を見つけたと同時に立ち上がった体を、一度椅子に沈めることにしたのだ。ちらちらと視線だけまもちゃんの方に向けるが、彼はまだ隣の女性と楽しそうにお喋りを繰り返していた。

……。なんか、みじめ。

折角まもちゃんに可愛いと思ってもらえるように着てきたベビー

ピンクのおろしたてのワンピースは、いまだに褒めてもらえないし、しかも本当に久しぶりのデートなのに私以外の女性と楽しそうに喋っている。何のために私はここにいるのか、自分でもよくわからなくなっていた。もやもやと嫌な気持ちだけを抱えて、膝の上でギュッと握っていた拳を見つめる。やがて映画が始まり、それと同時に館内の照明が落とされたというのに……彼は戻ってこなかった。それどころか映画が始まったことで彼らは再び映画館の外に出て行ったのだ。ぽっかりと空いている席を見つめていると、悲しみよりも怒りが湧いてきて……ついに私はブチ切れてしまった。ガタンと席を立ち、出口から出て行く。まもちゃんとその女性も映画が始まったのにも関わらずお喋りは弾んでいたようで、館内のロビーへと続く廊下でまだ喋っている。その二人の楽しそうな姿を見て、私の中の怒りという名の火山がついに爆発を起こす。そしてそのまま、まもちゃんのもとへ向かい……大声で彼に向けて怒鳴っていた。

「まもちゃんの馬鹿！　せっかく久しぶりのデート楽しみにしてたのに！　もう帰る！」

「え！？　な、なんで……」

まもちゃんが何かを言いかけていたけれど、私の耳にはその言葉が届かない。

もういいよ！　勝手にその女性と楽しめばいいじゃない！

みつともないし大人気ないとは思ったけれど、それだけまもちゃんのことを大好きだということはわかってほしい。今はまもちゃんの隣で冷静でいられる自信がない。だから私は逃げ出したのだ。

01・久々のデートなのに！（後書き）

ようやく始める事ができました。

7月中に始めると言って、こんなギリギリになってしまいました…。
前回の「ミステリアス眼鏡」を読んでも、読んでもなかった方もどうぞ宜しくお願いします。彼らの変わらないテンションをお楽しみくださいませ。

02・混乱のケーバイキング

映画館を飛び出した私は、走っていた足をゆっくりと止めながらしばしの間電柱にもたれていた。そしてそのまま項垂れる。頭の中に浮かぶ言葉は『後悔』の二文字だった。

ああ……私の馬鹿。

そう、まもちゃんとあの女性の仲良さげな姿を見ただけで、私の頭の中は最悪の展開ばかりが浮かんていた。二人はもしかしたら、男女の仲で、それで私は……など、確認もせず妄想だけで話を進めてしまっていたのだ。だからこそあの場にはいられなかったし、あの状況でまもちゃんに笑顔を向けることもできないと思った私は、暴言だけをまもちゃんに浴びせて映画館を飛び出した。そして早くも後悔中。別にまもちゃんが私を裏切るようなことをしているなんて思っただけだったのに、いざああいう場面を見てしまったらなぜか私はカッとなってしまった。信じているのに、どうしてだろう？大きく一つ溜息を吐き、映画館を背に向けてトボトボと雑踏の中を歩いていったのだった。

そんな雑踏の中で後ろからポンツと軽快に肩を叩かれ、私はまもちゃんが追いかけてきてくれたのかも！と、淡い期待を抱きながら振り返る。しかしそこにいたのはまもちゃんではなく……

「香澄ちゃん、よね？」

「え、は……はい？」

背後から肩を叩いたのは、知らない人だった。

その人は長めの茶髪を肩に垂らして、なぜか女性のような言葉遣いの男性だった。サングラスをかけているので瞳はよく見えないけれど、白いワイシャツの袖からちらりと見える腕は、なんとも男性らしい筋ばった腕だ。その男性はニコリと微笑みながら私の肩に手

をかけて、ゆつくりと歩き出す。その手を振り払う間も無く力強く一緒に前に進んでいたのだ。

「女の子がそんな悲しそうな顔しちゃダメよ。ニコニコ笑顔でいなくっちゃ!」

「えっと、はい。じゃなくて!」

「私が誰だかわからなくて困ってるのよね?」

「そうですよ、誰ですか!」?

「ひゝみゝつゝ」

人差し指を口元で立てて、片目をぱちっと閉じる。第一印象は、チャライ。その一瞬で彼の印象は決定してしまった。

「さあ、その悲しい顔を笑顔に変えるために……ケーキでも食べに行きましょう!」

「ええ? そ、そんな私は」

「スイーツは心を豊かに、人を笑顔に変えてくれる素敵なものよ!」

「あの、なんで私が! というか誰なの!」?

人攫いのように彼の逞しい腕に引き摺られて、私はケーキバイキングに連行されてしまった。

ケーキバイキングは都内の高級ホテルの最上階レストランにあり、そこは人気があるようで人が溢れていた。すると隣で強引に腕を引っ張っていた彼の手が離れ、バイキングの関係者になにやら話をしている。そしてにつこりと私に微笑みかけ、まだ人が並んでいるというのに中にずんずんと腕を引かれて歩いていく。並ばないのだろうか? というか、本当に誰なの!? マイペースな男性に引かれて辿り着いたのは、奥まった場所にある一つのテーブル。そこには『予約席』の札があり、そこへ私達は腰を降ろしたのだった。

「さあ！ たっくさん食べましょうね！」

きらきらと光が零れるような笑顔を向けて楽しそうにケーキが並ぶテーブルへと足を向ける。そんな彼の背中を追いかけるように私もついていったが、彼への警戒心は解くことはない。誰だかわからないけれど私に危害を加えるような素振りもないし、いつのまにかスイーツに目を輝かせていて嬉しそうにケーキをお皿に盛っていた。まるで小さな子供のように無邪気に微笑む彼を見ていたら、いつしか私も笑顔を取り戻していた。そして並ぶスイーツに同じように目を輝かせてお皿にたくさん乗せてテーブルに戻ったのだった。

ぱくつと一口ケーキを口に入れた途端、私と彼は目を大きく見開いた。そして続く言葉は

「おいしい〜い！」

同じような口調で、同じ言葉を綴る。そしてあまりの美味しさに体をくねくねさせていた。目の前でスイーツを貪っている相手は全く知らない人だし男性だというのに、口調のせいか女友達と来ているような感覚に陥る。まるでずっと前から知っていたかのように彼の波長は私に合っている。私達はひとまず目の前で魅力的な姿をしているケーキたちをパクパクと食べることにしたのだった。

パクパクとケーキを食べていると、バッグの中で携帯がぶるぶると震えていた。映画を観る予定だったので携帯はマナーモードにしたままだった。携帯を開くとディスプレイに表示されている名前は、勿論まもちゃんだ。私はそのまま怒られる覚悟で電話に出ることにした。

「もしもし……」

『香澄！？ どこにいるの！？ 怪我とかしてない？ 誘拐とかされてない？ ま、まさか……誰かに乱暴とか！？』

まもちゃん……混乱しすぎて何口走ってるかわかってないだろうな。妄想も行き過ぎるとおかしくなる。まもちゃんの脳内で一体私はどんなトラブルに巻き込まれているというのか。なんだかおかしくて少しだけ笑ってしまった。

「まもちゃん落ち着いて。ごめんね、急に飛び出して酷いこと言っちゃって……。大丈夫だよ」

『そ、そっか……。ごめん。僕が香澄をほっといたから怒ってるんだよね?』

「もう怒ってないよ。私が何も訊かずに勝手に怒ってただけだから」
『ちゃんと説明したいんだけど、今どこにいろの?』

「今、知らない男性とケーキバイキングに来てるの」
『……!?!?』

向かい合わせで座っている男性がにっこりと微笑みながらケーキを食べている。そしてなぜかそれを受け入れている私。

そんな不思議な昼下がりであった。

03・父

まもちゃんは、混乱していた。

そして私は、冷静だった。

目の前の男性は、ケーキを堪能していた。

不思議な不思議なこの光景、これは一体どんなドラマなのか。

まもちゃんが息を切らして私達がいるケーキバイキング会場までやってきた。肩ではあはあと息をしているまもちゃんが、呆気にとられている。

「はーい、守！」

向かいに座っていた男性が軽やかにまもちゃんに手を振っている。それを見たまもちゃんが肩を小さく震わせた。どうやらまもちゃんはこの男性のことを知っているようだ。少し怒りのオーラが迸っているように見えるのは、気のせいだろうか……？　すると次の瞬間、まもちゃんがテーブルに両手をどんと突き、大きな音を立てた。そして会場内に大きな怒声が響き渡る。

「香澄をどうするつもりだったんだよ、父さん！」

まもちゃんったら、私のことそんなに心配してくれていたなんて……て、父さん！？　まもちゃんのお父さんなの！？　この人が！？　さっきまで混乱していたのはまもちゃんの方だったのに、いつのまにか私の方が混乱に陥っていた。まさかのお父様に私はすっかり動揺してしまったのだ。お父さんというにはあまりにも若い風貌の

男性が、私の様子を察してにつこりと微笑みながら頭を下げた。そして柔らかで女性らしい口調のまま私へ挨拶をし始める。

「ごめんなさいねえ、驚かせて。私は矢崎誠吾やまきまことと申します。正真正銘、守の父親よ」

「なんで香澄をこんなところに連れてきて……！」

「だってえ、守ったらちつとも会ってくれないから、私、香澄ちゃんのこと調べたんだもん。ちゃんと紹介してほしかったのに守がいつまでもダラダラと私に会ってくれないからあ」

「忙しいって言ったと思うけど！ それにしても調べたって何、プライバシーの侵害じゃないの？」

「変なこと言わないでよ。香澄ちゃんの本名と何処に勤めてるのかなあとか、そんなことくらいよ？ だって早く会いたかったんだもん」

「父さん……僕と会う時くらいその口調やめてもらえる？」

「はいはい、もう……細かいこと気にするなよな。これはもう癖のようなもんだから」

まもちゃんのお父さんの誠吾さんはサングラスを取り外すと、まもちゃんをととても穏やかな瞳でみつめている。その優しい瞳は私もよく知っている。そう、まもちゃんとそっくりなのだ。親子と言わなくてもわかるくらい同じ瞳を持った二人が、こうして向かい合うのは実に一年ぶりだという。まもちゃんは前に言っていた。自分の両親が離婚してからというものの母親が苦勞して自分を育ててくれたんだと。だからまもちゃんはお父さんに会いたくなかったのかな。親子のことまで口出すことはできないけれど、こんなにもまもちゃんを優しく見つめる瞳に気付いてあげて欲しいと、そう願っていた。優しい良いお父さんではなかったのかな……。

そんなことを思っていると、誠吾さんの視線はまもちゃんから私へと移り、そのままジッと見つめてくる。その視線に私のほうが耐

えられなくなっと思って思わず口を開いてしまった。

「あの、何か？」

「ん？ いや／＼やっぱり香澄ちゃんは可愛いなあって思っただけよ」
「そんなこと……」

「謙遜しなくてもいいのよ。香澄ちゃんが可愛くて、私、香澄ちゃんが欲しくなっちゃったなあ」

「は？」

思いがけない誠吾さんの言葉に思わず聞き返してしまった。それは何の冗談なのか、そしてその悪びれない態度はなんなのか。私がそういう前にまもちゃんが誠吾さんに詰め寄っていた。

「父さん、冗談やめてくれ！ 香澄は僕の……その、大事な彼女な
んだから……」

まもちゃん、好き。

絶対私の顔が赤くなっているに違いない。だって目の前にいるまもちゃんの頬もまっかつか。私達、付き合ってから一年くらい経つけれど、まだまだどこか初々しく感じるのはまもちゃんが究極の照れ屋さんだからだろうか。手は自然に繋げるようになったし、キスだって自然にできるようになった。でも……私達、実はあんまり肌を重ねてはいない。勿論、ぶっちゃけた言い方をすればシテるといえばシテるんだけど、回数はそんなに……。それでも二人は何も変わらない。隣にすることが自然だし、こうして向かい合って笑えるだけで少なくとも私は幸せなのだ。肌を合わせることだけが恋愛の醍醐味ではない。お互いがリラックスできるような、そんな二人でいたいと心からそう思っている。だからまもちゃんの隣は、とても居心地が良いのだ。

誠吾さんの冗談が本当に冗談なのかわからなくなってきた。なぜ

なら、誠吾さんは嬉しそうにぎゅうつと私を抱きしめて、私の頭上で頬ずりしているのだから。

「んゝ、やっぱり可愛いわ！ 守、香澄ちゃんちようだい？」

「息子の僕より彼女は年下だぞ！？ 何言ってるんだ！」

「愛に年は関係ないのよ？ ねえ、香澄ちゃん」

「年の差は関係ないです。けど、私はまもちゃんが好きなんで無理です」

誠吾さんは冗談で言ったのかもしれないけれど、私は自分の気持ちに正直でありたかった。だからちゃんとまもちゃんが好きだと真っ直ぐ誠吾さんを見つめて言った。正々堂々と、自分と向き合うためにも。

まもちゃん、私はいつだってまもちゃんが好きだよ。だから……いつも隣にいてね。そんな気持ちを込めて彼を見つめると、まもちゃんは嬉しそうに私に微笑んで、そのまま誠吾さんがいるというのに私を力強く抱きしめた。

「……………うー……香澄が好きすぎて困るなあ……………」

ぎゅうつと力を込めた腕にさらに力を込めるまもちゃん。

この言葉だけで、充分だ。まもちゃんが私を好きだって言ってくれることが嬉しいから。

私はその腕に擦り寄った。『大好き』とつぶやきながら。

04・言葉の宝物

ケーキバイキング会場内で抱き合う私達の姿は、周りから見たらかなりしらせる状態に違いない。それでもまもちゃんの腕の中は暖かくて、誰がどう思おうと安心できるのだ。しかし隣にいる誠吾さんはひとつ溜息を吐いて、再び席につきケーキを口に運んでいた。まるで今まで何もなかったかのように普通にケーキをむしゃむしゃと食べている。まもちゃんも衝動的に私を抱きしめたので、ふと我にかえると共に私を体から離れた。そして真っ赤に染まった顔で小さく「ごめん」と謝る。ああ、どうしてこんなに可愛いのだろう？ 私の可愛いまもちゃんは。

「と、とにかく！ 僕達は行くからね」

「ケーキ、もう食べないの？ 守も食べていけばいいじゃない」

「僕はいいよ。香澄は……食べたい？」

正直、このケーキバイキングは魅力的なスイーツが勢ぞろいしている。食べたい？ と訊かれれば食べたいと首を縦に振るだろう。でも、まもちゃんと二人きりでデートする時間はこの先どれくらいあるのかな……。忙しい仕事柄、家から出られることが少ないので二人きりで過ごせるなら、少しでもいいので二人で過ごしたい。ケーキとまもちゃんを天秤にかけるつもりはないけれど、それくらいこのケーキは魅力的だ。恐るべし、スイーツパワー！

そんな私の考えを見抜いたのか、まもちゃんはふっと笑って席に着いた。そして私も席に着くように促す。

「少しだけ、食べていこうか」

「……はい！」

その優しさが嬉しかった。そして目の前にいる誠吾さんの表情も
明るい。多分、久しぶりの息子との会話をもう少しだけ楽しみたい
と思っていたんじゃないかなあと心のどこかで私は思っていた。ず
っと会えなかった我が子が、目の前にいる。そんな状況に実の父親
なら喜ばないわけがない。ほんの少しでも親子の時間を二人に堪能
して欲しかった。

それにしても……まもちゃんの親子関係って凄いなあと思う。父
親は売れっ子メイクさん、母親は小説家、そしてまもちゃんは漫画
家だ。うちの父親は普通のサラリーマンだし、母親はスーパーでパ
ート務めをしているごくごく普通の家庭だ。えらい違いだなあと思
いつつも、なんだか両親が懐かしくて少しだけ会いたくなっていま
った。元気にしてるだろうか？ 田舎から東京へ出ることを最後ま
で反対していた父親、いつも私の気持ちを汲んでくれる母親。時々
電話をかけても父親と話す機会もなく、帰省もしていない。幼馴染
のたろちゃんの手作り結婚式の時だって次の日は仕事だった為、実
家には寄らずに真っ直ぐ帰ってきてしまったのだ。今日、帰ったら
電話してみようかな……。珍しく感傷的になってしまい、少しだけ
鼻声になってしまった。

気がつくと目の前にはケーキがどんどん積まれていて、誠吾さん
とまもちゃんが楽しそうに話をしている。いや、楽しそうなのは誠
吾さんでまもちゃんは少しだけ嫌な顔をしていたけれど。楽しそう
に話をしていただけで、ずっとケーキを食べる為に動かしていた誠
吾さんの右手がふと止まり、持っていたフォークをお皿に置いた。
カチャッと小さな音を鳴らしてから、誠吾さんの表情から笑顔が消
えた瞬間だった。

「……お母さんは元気？」

少し緊張しているのか、誠吾さんの声は震えていた。お母さん
というのはまもちゃんの母親のことだろう。それはすなわち誠吾さん

と別れた女性なわけで……。まもちゃんも同じようにフォークをお皿に置いて真っ直ぐ誠吾さんを見つめ返す。そしてゆっくりと口を開いた。

「元気だよ。会ってないけど。……でも、人生で一番幸せそうだ」

「そう。それならいいの。ありがとう、守」

「父さんはどうなの？ 幸せなの？」

「勿論幸せよ？ 仕事は順調だし、心配してくれる友達もいるし、こうして私を気遣ってくれる可愛い息子もいるしね」

「何馬鹿なことを……。それより、さっき奈美さんに会ったよ？ これから仕事だって？」

「奈美ちゃんったら、ケーキバイキングを断って映画に行っちゃうんだもの……。そう、仕事よ。今日は夜からなのよね」

「相変わらず売れっ子メイクさんなんだね」

「まあね。守が実験台になってくれたからお陰さまでここまで売れました」

ふざけて三つ指をテーブルの上で揃え、深々とまもちゃんに頭を下げる誠吾さんが面白かった。それにしても奈美ちゃんって誰だろう？ 首を傾げて考えていると、まもちゃんがいつものように私の考えを察して奈美ちゃんという人のことを教えてくれた。

「奈美さんは父さんのお弟子さんだよ。いつも一緒に現場を回っている一番弟子。さっき映画館で話していた人が奈美さん。……それで誤解は解けた？」

「そうだったんだ……。ごめんなさい。勝手に妄想膨らませてまもちゃんに無実の罪を着せるところだった」

「無実の罪を着せられなくてよかったよ。僕は香澄だけしか見えなからね」

どうしてこうあっさりと凄い台詞を私に向けるのだろう。本人は
気付いていないのかな。自分がどれだけ凄い台詞を言っているのか
……。

『香澄だけしか見えない』

今日、ここでまた、新しい宝物を貰ったような気がした。まもち
ゃんの気持ちに詰まった嬉しい言葉の宝物、これからどんどん増え
ていくといいな。

05・頑固者

ケーキバイキングで久々の親子対面を果たしたまもちゃんは、ケーキバイキングをなんだかんだと言いつつ満喫し、私と一緒にその場から出て行った。久々の息子との会話で誠吾さんも満足したのだろうか、満面の笑みを浮かべながら手を振り私達を見送る。ほのぼのとしたその光景を見たら、なんだか私まで満足感でいっぱいだ。突然連れてこられたケーキバイキング、そして初対面の男性、なぜだか知らないけどオネエ言葉の男性はまもちゃんのお父さん、そしてなぜか私を知っていてまもちゃんが来るまで自分の正体を明かさなかった男性、この短時間でなんだか物凄く濃い時間を過ごしたような気がする。だからだろうか、私はちよつとだけ疲れていた。会場を出てからまもちゃんの横に並んで歩いていると、まもちゃんが急に足を止めて私のほうに振り向いた。

「あのさ、今日はもう帰って……その、香澄の家でのんびりしない？」

おずおずと遠慮がちに私に問い掛けるまもちゃんは、まるでおねだりする小さな子供のようだ。二人きりで過ごす大事な時間を私の家で過ごすことに私は勿論大賛成だ。即座に首を縦に振ると、安心したようにまもちゃんが笑う。二人で過ごす時間に何処かに出かけなくて……と氣遣って外に連れ出してくれるまもちゃんの気持ちには嬉しいけど、こうして時折家でゆっくり過ごすほうが実は私も好きだったりする。だからまもちゃんからの申し出はとても嬉しかった。ゆっくりと色々な会話を楽しんで、ちよつとだけいちゃいちゃしてもいいかな？ 毎日のように渋谷家に顔を出しているとはいえ、樹くんや翠ちゃんの前でべたべたするわけにもいかない。渋谷家ではまもちゃんの家事を少しでも負担しようと思って、掃除や洗濯、

食事の用意などできる範囲でお手伝いをしている私。漫画のお手伝いはできないけど、それくらいなら私でも役に立てるかなと思ってまもちゃんにお願いしたのだ。だから別に私は渋沢家でのんびりしているわけではないということを、ここで言っておこう。

「帰り際に何かDVDでも借りていこうか？」

「うん、そうだね。結局映画観れなかったし」

「今度はちゃんと映画観ようね。ごめん、なんか誤解させちゃって」

「まもちゃんは悪くないよ！ 悪いのは勝手に勘違いした私だから……本当にごめんなさい」

二人で何度も頭を下げて謝っていると、すれ違う通行人がぐすくすと笑っている。深々と頭を下げては繰り返し謝っている私達は周りから見たら変な二人だろう。「ごめんごめん」と何度も謝る姿は周りから見れば滑稽以外何者でもないかもしれない。でも私達はそんなことも気にせず、お互いの気が済むまでいつまでも謝っていたのだった。そしてようやくDVDを借りにレンタルショップへと足を踏み入れた。話題の新作をチョイスせずに少し安くなった過去の作品を三作品借りた私達は、映画を観ながらつまめるおやつと少しのお酒をコンビニで買って、楽しく手を繋いで歩いていた。こんな楽しい気分は久しぶりで、まもちゃんと二人きりで過ごせる時間とても貴重なものだ。ワンルームの狭い私の部屋までの道のりをルンルン気分で歩く私達。しかしそのるるん気分は長く続かなかった。

マンションの手前まで歩いてきた私の目に映ったもの、それはまさかの人物。

「お、お父さん!？」

こちらを睨みつけるように見つめていたのは、紛れもなく私の実

の父だ。その表情は鬼のように真っ赤に染まり、ずんずんと今にも恐ろしい足音が聞こえてきそうなほどの重い一步を踏み出した。そして父が真っ先にしたこと、それは私とまもちゃんが指を絡ませきつちりと繋がれた手を真ん中から真っ二つに割ること。繋がれた手が離れ、私の腕は有無を言わず父に掴まれた。ぎりつと強い力で握られた手首に痛みが走り、私の表情が歪む。でも父はそんなことはお構い無しに力を緩めることもなく、まもちゃんをギロリと睨み付けた。

「……香澄、お前は東京に何しに出てきたんだ！？　こんな男との交際を許した覚えはないぞ！」

そう、私の父は昔気質の頑固な父で、人の意見を全くと言っていいほど聞かない。融通の利かない父だ。少しでも私の学生生活に乱れが見えろとすぐに父が鎮座している茶の間に呼ばれ、目の前で正座をしてお説教を延々と聞かされる。そんな父が鬱陶しくて私は就職先を東京に決めたのだ。これは父には内緒で決めた。当然頭ごなしに反対されたけれど、せっかく決まった職を働きもせずに辞退するなんて嫌だ！　そう父に大声で言葉を放ち私は東京へ出てきた。母とは時折電話やメールをしているが、父とはあれから話していない。一体、突然東京に出てきたのはどうしてだろう？　嫌な胸騒ぎがして仕方がない。父に手首を掴まれたまま、引き摺るようにマンション内に入っていく私をまもちゃんが追いかける。それを見た父がさらにギロリと睨んでひと言。

「香澄はやらない！　お前のような軟弱な男なぞ……認めないからな！」

そう言ってエレベーターに私をどんっと押し入れる。あまりの強さにエレベーターの壁に体を強く打ち付けてしまった。

「香澄！！」

まもちゃんが私の名前を呼んでいる声が聞こえた。だからまもちゃんの方を向いて精一杯腕を伸ばしたのに……無情にもエレベーターの扉は閉まり、大好きなまもちゃんの顔が見えなくなってしまった。私を背に隠すように立ちはだかる父を見上げるが、父はいつもと同じように無表情を貫く。一体……私が何をしたというのか、そしてまもちゃんのどこが悪いというのか。あまりにも一方的な父の決め付けに私は腹が立つやら情けないやらで、どうしてこんな頑固な男が私の父なのだろうかと思っていた。

やがてエレベーターが私の部屋の階に止まり、扉が開く。父がエレベーターから降りた隙に私は『閉』のボタンを押した。父が気付くより一瞬早く、エレベーターの扉が閉まる。そして私は迷わず一階に降りて、まもちゃんの家に向かって走った。

「……なによっ！ 冗談じゃないわ！」

自分勝手な父に、いったいいつまで縛られればいいの！？

こうして私は、怒りを発散させるように猛ダッシュで、住宅街を駆け抜けたのだった。

06・優しさ、あふれる

怒りに任せて住宅街を駆け抜ける私の視界に、見慣れた後姿が見えた。迷わずその背中目掛けて駆け寄り、後ろからぎゅっとその背を抱きしめる。走ってきたからか、ちよつと勢いがつきすぎて、まもちゃんの体が前方にぐらりと揺れた。

「うわっ!？」

「まもちゃん!」

まもちゃんが倒れないように私はぎゅっとまもちゃんの腰に手を回した。どうにか倒れずに済んだまもちゃんと私。まもちゃんは、ぜいぜいと息を切らして荒くなった呼吸の私を見て、ふっと微笑んだ。そして優しく頭に手を乗せてゆっくりと撫でてくれる。その優しい手は、私にはどうしても必要なのに……どうしたら父はわかってくれるのだろうか。私は何をどう言ったらいいのかわからなくて、そのまままもちゃんにぎゅっと抱きついた。

「……香澄? お父さんはいいの?」

いつもと変わらない口調で優しく問い掛けるまもちゃん。そのまも私の背中に手を回し、柔らかく抱きしめてくれる。大好きなまもちゃんの香りに包まれて、どうにか私も冷静さを取り戻す事ができたのだ。先程までの怒り狂った感情はもうない。でも、このまままもちゃんから離れたくない。何を言っても父は私の言葉など聞いてはくれない。だったら……どうすればいい? まもちゃんは世界で一番大切なんだってわかってもらうにはどうしたらいいのだろう。人の話を聞かない、自分の意見は絶対だという父の頑固さは、私も母も少々呆れ気味だった。でも母はそんな父の扱いには慣れている。

私は一向にこの頑固さに慣れることができなかった。それならいっそ、父とは縁を切ってしまう方がいい！ そんな考えに達した私に、まもちゃんの優しい声が頭上から降り注ぐ。

「いつかちゃんとわかってくれる日が来るよ。香澄が大事で大事で仕方ないんだよ、お父さんは。でも、ついあんな態度をとってしまいうんじゃないかな」

「……あんな頑固なお父さん、いらない」

「香澄、そんなこと言わないで。たった一人のお父さんじゃないか」「まもちゃんは……自分のお父さんが好き？」

「……嫌いだった時もあった。けど、今は……嫌いじゃない」「そうなの？」

「うん。感謝してる部分もあるよ。あんな胡散臭い父だけど、やっぱり元気だと嬉しいんだ」

まもちゃんの肩口からそっとおでこを離し、まもちゃんの顔を見上げた。するとそこには穏やかな笑顔を浮かべているまもちゃんがいる。私のおでこにそっとう唇を当て、優しいキスをするとう再びぎゅっと抱きしめられた。

「僕は、香澄と……ずっと一緒にいたいんだ。そしてちゃんと幸せにしたい。だから、お父さんには絶対認めてもらうように頑張るよ」
「まもちゃん、ありがとう。ずっとずっと一緒にいようね！」

「うん。……じゃあ、帰ろう。お父さん、待ってるよ」

幸せな気分浸っていた。それがこのひと言でガラガラと崩れていく。結局はお父さんのところに戻りなさいと、まもちゃんはそう言っているのだ。だけど私はまもちゃんと一緒にいたいからこそここで走ってきたのに……一緒にいてはいけないのだろうか。笑顔だった私の顔が曇ったのをまもちゃんは見逃さない。そのまま私の手を取り、きゅっときつく繋いだ。あったかいまもちゃんの掌に包まれ

ているのに、走ってここまで来た道をまもちちゃんと戻っていく。なんだか……少し寂しかった。

「香澄のお父さん、きつと戻ってきて欲しいって思ってるよ。香澄ともっと話したいのに不器用でうまく話せないんじゃないかなあ……」

「まもちちゃんは、私と一緒にいたくないの？」

「そりゃ一緒にいたいよ？　でもね、ちゃんと僕を認めてもらわないと……香澄を幸せにできないから」

「お父さんが認めなくても、私はまもちちゃんが好きだよ？　それじゃダメなの？」

「ご両親に認めてもらって……そしたら」

そこでまもちちゃんの言葉が止まる。口をきゅつと一文字に結んでも少しだけ口端を持ち上げて微笑んでいた。言葉の続きは、待っていたけれどやってこない。そのまま笑顔を浮かべて、ぐいぐいと腕を引く。一体その言葉の続きはどんな言葉なのだろうか？　聞いてもはぐらかされてしまうので、ついに私の方が根負けしてしまった。でも、まもちちゃんが私に何か良いことを言ってくれようとしていたことだけはわかっていた。そうじゃなかったらこんな笑顔は浮かんでこないだろうから。陽だまりの笑顔は、いつだって私に降り注いでいる。ほんの少し、私は欲張りになっていたのかもしれない。父と向き合うことを嫌がり、まもちちゃんの影に隠れようとしていたことを、まもちちゃんは見抜いていたんだろう。私に出来ること、それはまず、父と向き合って話すこと。そして、まもちちゃんを認めてもらうこと、だ。頑固な父を説き伏せるには時間がかかるかもしれない。でも、私は頑張るしかないんだ。険しい道のりかもしれないけど……頑張ろう。まもちちゃんに手を引かれながら、私の中で決意が固まったのだった。

しばらく歩いていると、マンションが見えてきた。そして入り口でそわそわと腕を組みながら行ったり来たりしている父の姿を見つ

けた。私とまもちゃんはその父の姿を見て、お互い顔を見合わせてからくすつと小さく笑い合ったのだった。そして、まもちゃんが私の肩をぽんつと軽く叩いた。

「ほら、お父さんのところに帰りな。僕はここで」

「……うん、まもちゃんありがとう」

「またメールするね。しばらくまた……家に籠もることが多くなるかもしれないけど、なるべく早く終わらせるからね」

「無理しないでいいよ。……でも待ってるね、連絡。それじゃ、おやすみなさい」

「ん。おやすみ」

少しだけマンションが見えない位置まで移動して、父にバレないようにこっそりキスをした。触れるだけの可愛いキスでもドキドキと鼓動が高まる。彼の体温を唇から感じて、それと同時に彼の優しさも強く感じる。そんなキスを交して、私はマンションへと走っていったのだった。

07・父 vs 娘

マンションの入り口でウロウロしている父の元へ駆けていく私の姿を見つけた父は、心配そうな表情から怒りの表情へと変わっていき。その表情を見て、私は一瞬だけどこへ戻ったことを後悔していた。けれど、父の口から零れた言葉は怒りではなく、安堵の溜息と共に私の身を案じたものだった。

「……馬鹿娘。心配かけるな」

乱暴だけど父の声は少し震えていた。その声を聞いた私は、心の底から申し訳ない気持ちになり、小さく頭を下げひと言「ごめんなさい」と言い、マンションへと入っていったのだった。

自分の部屋に戻り、父が床にどかっと腰をおろす。きっと疲れていたのだろう。肩に力が入っていたのか、ゆるゆると肩を回しながら溜息を吐いた。父が一人暮らしの私の部屋に入るのは初めてのことで、きよろきよろと部屋を見回した後、少しでも居心地が悪そうに小さく肩を竦めた。

「狭い部屋だな。家に戻ればもっと広いのに」

「いいの。私は東京に出てきたことを後悔してないから。それに一人暮らしをして、自分で稼いだお金で生活する大変さもよくわかったし。自立するには一人暮らしって大事だよ」

「……いつのまに、そんなに大人になったんだろうな」

少しだけ遠い目で窓の外を見つめる父、哀愁漂う姿が大きいと思っていた父が小さく見える瞬間だった。そう、私は大人になった。いつまでも父に懷いて遊ぼうとせがむ子供ではない。でも、父にとっては私はいつまでも小さな子供のままなのだろう。年月が過ぎる

のはとても早い。若かった父も、もうすっかり白髪頭のおじさんで、顔にはもう深い皺も刻まれている。大きく見えた父も、私が大きくなったせいか小さく見えるくらいだ。たそがれている父に日本茶を淹れて差し出すと、何も言わずに湯飲みを手に取り、ずずずと静かな音を立ててお茶を飲んでいた。

「香澄……あの男は……」

「あの人は、私を大切にしてくれる人だよ」

「……お前を泣かせたりしないか？」

「しないよ。とつてもとつても大切にされてる」

「……そうか。で、結婚するのか？」

『結婚』という言葉が出たとき、お茶をぶつと噴出してしまった。唐突にその言葉を出されて動揺してしまったのだ。でも、でも……まもちゃんはきっと、私をお嫁さんにしてくれる、そんな気がしていた。

「まだ具体的に決めてないけど」

「そいつは何の仕事をしてるんだ？」

内心、「来た!」と思った。親が娘の結婚相手に望むのはきつと、普通に暮らせるだけの稼ぎがある職業だと知っているから。まもちゃんの職業は、ハッキリいって不安定といえれば不安定に違いない。今は人気ある作品で、普通のサラリーマンなんかよりよっぽど稼いでいるけど、その後はどうなるかなんてわからない。でも、人気がなくなったとしてもまもちゃんと別れたいだなんてこれっぽっちも考えたことはない。ずっと死ぬまで一緒にいたい、そう今でも思っている。私は父にまもちゃんの職業を言うことに躊躇いを感じていたが、それでも認めてもらうために素直に話すことにした。

「……漫画家さんのの」

その職業を聞いた瞬間、父がテーブルを強く叩いた。あまりの力強さに私の体がびくつと震える。見上げれば父の恐ろしい表情が目に入ってきた。

「漫画家なんて……！ そんな不安定な職業のやつにお前を嫁に出せるなんて思うなよ！」

「でも、まもちゃんの作品は人気があって、ちゃんと稼いでるんだよ！？」

「人氣が全ての不安定な職業のヤツだぞ！？ 誰が認めるか！」

「まもちゃんは今の仕事に誇りを持ってるの！ 漫画家になるのが夢で、それを叶えたんだよ！？ とても立派だと思わないの！？」

「……夢を叶えたのは立派だが、お前をまかせられるかと言ったらそれはまた別の話だ」

「そんな！」

「……香澄、お前には父さんがちゃんと立派な男を紹介してやる。すでに話は整ってる」

父がにやりと笑う姿はどこか不気味で、私は怪訝な表情をした。何を企んでいるのか、それは次に発した父の言葉で明らかになった。

「見合いの席を設ける。だから来週末の連休に戻ってきなさい」

「見合いって……え！？ お見合い！？ 私の！？」

「そうだ。他に誰がいるんだ」

「嫌だからね！ 誰がお見合いなんて……！ 私にはまもちゃんがいるんだから」

「見合いをすっぱかそうなんて思うなよ。相手はなんと、たろちゃんの友人なんだから」

「たろちゃん！？」

たろちゃんとは私の幼馴染のお兄ちゃんで、とても優しくて頼れる、一時恋心を抱いた相手だ。今では昔から付き合っていた彼女とめでたくゴールインして、彼らの和やかな結婚披露パーティーにまもちゃんと行って来たのだ。たろちゃんは私とまもちゃんが付き合い合っていることを知っているのに、父に自分の友人を私の見合い相手として紹介したのだろうか。あんなに私達のことを知った時、たろちゃんは喜んでくれたというのに……信じられない。何かの間違いではないだろうか。だってたろちゃんが友達を私の見合い相手に紹介するなんて考えられない！ それよりもそのお見合い！ それをまず断らないといけない。

「お父さん、それでも私……お見合いなんて嫌だよ」

「一度会ってみればいい。断るならそれからでもいいじゃないか」

「お父さん！ だから私にはまもちゃんがいるって言うてるのに！」

「父さんは認めない、そう言ってるんだ！ いいからつべこべ言わずに会ってみろ！」

頑として譲らない父の頑固さに腹が立つ。頑固もここまでくると、いくら父といえどガツンと壊したくなってくる。……だったらそのお見合い、ぶち壊してやろうじゃないの！

その晩は、父の大きすぎるいびきにも父の態度にも腹が立って眠れなかった。

08・屋上にて

なによなによなによ！

怒りに任せて履いているハイヒールの踵を乱暴に鳴らしながら歩いていた。今日は月曜日。いつもより少し家を早めに出て、父を一人部屋に残して出てきたのだ。父は今日珍しく有休を取ったと言いつても私の会社の上司にひとことご挨拶を……などと言いつつ出したのだ。私はもう子供ではないし、職場の上司にわざわざ挨拶だけしに来るなんて、そんな社員の親を見た事がない。そんな父をなんとか宥めて、ようやく出勤したのだ。

それにしても、お見合い。いったいどうしたら良いのだろう。お見合いなんてしたい人がすばいのに、しかも私はまもちゃんがいるのに、父はどうしても私にお見合いをして欲しいと言う。一人娘に結婚を勧めるには、少々早くないだろうか？ 私はまだ二十代前半だし、結婚適齢期だってもっと上だ。最近の女性は婚期が遅くなっていることを知らないのだろうか。まあ、もう何を言っても父は聞く耳持たないだろう。きっと来週は私のお見合いが決行されるに決まっている。無駄に抵抗するくらいなら、素直なフリをしてお見合いの席をぶち壊してやろうか。うん、そうしよう。相手の人には悪いけど、父に一泡吹かせてやろう！

この時の私は、もう父に何とか面目を潰してもらおうとしか考えていなかったのだ。

「おはようございます」

会社に着き、自分のデスクへと向かう。社員は相変わらずの面子だけど、今年はちゃんと後輩が入ってきたのだ。私もいよいよ社会人の『先輩』として後輩に色々指導する立場になった。ほんの少しの興奮とプレッシャーがなんだかとても心地良い。部署内は皆仲良

くて、月に一回開かれる部長主催の飲み会も変わらずに行われているのだ。勿論、私もすっかり顔を出すことにしている。最初はまもちゃんに遠慮して欠席していたのだけど、まもちゃんは笑顔で「楽しんできたら？　僕のことは気にしないで」なんて言うもんだから、つい飲み会に顔を出してしまう……。会社の飲み会というものは堅苦しくて嫌いな人が多い中、私がいる部署の飲み会は和気藹々で先輩も後輩も関係ない！　とても楽しい飲み会なのだ。だから出席率はほぼ百パーセント。こんな仲の良い部署はほぼないといってもいいだろう。こんなに社員同士が仲良いのも、きっと人望厚い部長のお陰だと思う。

部長は今年四十六歳になったばかりの愛妻家。仕事ができる男であることは、会社の幹部たちのお墨付き。勿論、部長という役職の権力を振りかざして、部下をどうこうするというものもない。社員の目線で物事を見て、部長の目線で社員に指示を送る。そんな部長だから社員もみんな憧れる。そのみんなの憧れの部長は前原といい、なんとまもちゃんのお父さんの後輩だ。昔からまもちゃんのお父さんとは仲良くしていて、小さい頃のまもちゃんをよく知っているらしい。何を隠そう、前原部長が私とまもちゃんを結び付けてくれたといっても過言ではない。……結婚式は呼ばないと、なんてっ！

勝手に脳内で浮かれていると、これまた浮かれた男がやってきた。その男は社内でも出世確実！　しかもイケメン！　と言われ女子社員にモテまくりの男、内海亮平だ。まもちゃんと知り合う前は私も彼に夢中だった女の一人だ。けれど、まあ、色々あって彼よりもまもちゃんにときめいてしまったのだ。おかげで今はまもちゃんと付き合えてとっても幸せだ。……まもちゃんの名前を出すと、どうも惚気てしまうのが悪い癖だなあ。すっかり脳内から消えていたけれど、内海先輩がうきうきの笑顔で部署内に入ってきたとき、私の中に嫌な予感がしていた。そしてその予感の的中することになるのである。

『今日、お昼一緒に食べよう。屋上で待つ。』

社内メールでこんな内容が送られてくることはザラにある。彼は何というか、私をこうしてちょこちょこお昼へと誘うのだ。それはなぜかって？ それは必ずと言っていいほど、内海先輩が話したいことがあるときだ。自分の嬉しいこと、悲しいこと、悩んでいること……とにかく自分の胸の内に溜めておけないのか、こうしてお昼に呼び出されて延々と聞かされる。ハッキリ言ってちよつと地獄だ。楽しい話ならともかく、悩みとか困る。仮にも内海さんは先輩だ。後輩の私になぜ頼るのか。それも内海先輩がまもちゃんと高校時代の友達だったのと、私とまもちゃんが付き合っていることを知っている数少ない人だ。そしてもう一つ厄介なのが……多分、今日はそれのことを話すんじゃないかなあと、内心ドキドキしている。しかし、そのメール内容を振り切って、私はとりあえず午前の仕事をちやきちゃきと終わらせたのだ。

お昼休みに入り、私は外のお弁当屋さんで買ってきたお弁当を手に、屋上へとやってきた。屋上にはすでに昼休みを堪能している社員達があり、その中から内海先輩を探し出すのはとても簡単な作業だった。なぜだか彼は屋上にくると物思いにふけてしまうのか、一人でたそがれていることが多い。だからこの屋上でとても浮いて見える。それに気付かない本人。いつか教えてあげたほうがいいのかな。

「内海先輩！」

たそがれている背中に声をかけるとクルリとこちらを振り向き、笑顔を浮かべる。今日は満面の笑みを浮かべている。と、いうことは、今日は嬉しい事があったのだろう。私は先輩の横に腰をおろしお弁当を開け始めた。お弁当を開き、横に置いたペットボトルのお茶に手を伸ばす。そしてそのお茶を一口飲んだところで、ランランに瞳を輝かせる内海先輩の表情が視界に入った。どうやら「茶

なんて飲むくらいなら、俺の話を聞いてくれ！」と言いたいのだろう。

さあ、内海先輩のお話を聞かせてください……手短かに。

09・あったかいね

「……どうぞ、先輩。お話あるんですよね？」

「そうなんだよ！ 聞いてくれよ！」

きらきらと瞳を輝かせて前のめりになる内海先輩。ちょっと……顔が近いのが気になるので、少しだけ背を仰け反らせて話を聞き始めた。

「実はさ！ 今度また、彼女に会えるんだよね……！ もう、俺楽しみで楽しみで！」

「へー、そうなんですか……て、ええ！？」

「何そんなに吃驚してるの？ 香澄ちゃん」

「い、いえ！ そんな吃驚なんてしてませんよ！」

「……その割りに、声が上擦ってるけど」

「あう……」

吃驚……するに決まってるじゃない！ 内海先輩が久しぶりに会える『彼女』って、それって、まもちゃんのことだもの！ まもちゃんの作品のファンである内海先輩が、以前開かれた握手会にやってきたときのこと……まもちゃんは自分の顔を隠して漫画を描いていたので、当然握手会開催に戸惑いを感じていた。誰にもバレるわけにはいかないまもちゃんは、悩んだ挙句私が提案した『女装』をして握手会に臨んだのだ。担当さんは、もうこれっきりと約束してくれていたはずだけど、一体何がどうなってるんだろう？

「内海先輩、その……彼女に会えるのはいつなんですか？」

「それがさ！ 緊急決定したらいいんだけど、今度発売されるコミックを買った人限定二百名様のみ、握手会の参加が認められるんだ

！ コミックは再来週の金曜日に発売で、場所は前と同じ秋葉原で！
俺、有休とって行こうと思ってるんだ！」

「再来週の金曜日……！？」

これは初耳だ。というか、まもちゃんは知っているのだろうか。
まさか本人に了解を取らずに出版社側が勝手に決めたということはないと思うけど……今日、早速確認してみなくては！ 思いがけず危険な情報を手に入れた私は、早く会社が終わればいいと強く願っていた。

仕事が終わったら、速攻まもちゃんに会いに行こう！

これだけを強く思っ、午後はいつも以上にバリバリ働いた私であつた。

仕事を終わらせ定時と同時に弾丸のように会社を出た私は、まっすぐまもちゃんの家に向かつていた。父は私が仕事中に家に帰ったらしく、仕事の途中でメールが届いた。これで家にまっすぐ帰る理由もなくなった。でも父が帰ったとしても、見合いの話はなくならないだろう。まもちゃんに相談してみようか……そんなことを考えながら電車に乗り、最寄り駅で降りた。相変わらず帰宅ラッシュの電車は混雑していて少し気持ち悪くなったけれど、一刻も早くまもちゃんに会わなくちゃ。頭がくらくらするけれど、私は彼の元へと走っていったのだった。

「まもちゃん！」

「うわあっ！」

インターホンも鳴らさずにまもちゃんの家の玄関に飛び込んだ私は、ちょうど帰宅した樹くんの背中に思い切りぶつかってしまった。樹くんの背中に鼻をぶつけ、鋭い痛みが走る。鼻を両手で押さえ、しゃがみこんでその痛みを堪えていた。

「大丈夫か？ てか、急に飛び込んできたら危ないだろ！？」

「ごめ……急いでて」

「たださえ低い鼻がさらに低くなったんじゃないの？」

「酷っ！ 低くないわよ！」

「なんだ元気じゃねーか」

ニカツと笑って私の頭をぽんぽんと撫でる樹くんを見て、痛かった鼻のことを少しだけ忘れていた。いつもこう、樹くんは気遣い屋さんなどところがある。年があまり変わらないからか、樹くんと話すのは楽しい。楽しいから、思いつめていたことや今みたいに痛いことなどすぐに忘れることができる。

「で？ 急ぎって？」

「あ！ そうだ……まもちゃ……あれ？」

「どうした」

「や、なんかクラクラしてきた……」

「お、おい！」

夢中で走ってきたからか、さっきの混雑していた電車に乗った時にクラクラしていた頭が、さらにクラクラする。その場に立っているのがやっとの私は、ほんの少し足をよろめかせ、玄関にしゃがみこんだ。

なんだろう、クラクラしすぎて前がよく見えない……。

貧血など無縁だった私が、初めて起こした貧血かもしれない。くらくらしで気持ち悪い。すると、急にしゃがみこんでいたはずの私の体が、ふわっと宙に浮いた。

「……大人しくしてろよ。ソファで少し横になれ」

「い、樹くん！ 自分で歩けるから……！」

「いいから、大人しくしてろ」

「……ハイ」

樹くんの迫力に負けて、私は大人しく樹くんにお姫様抱っこされながら、リビングに運ばれた。そして大きなソファーにゆっくりと下ろされて、頭にクッションを入れられる。そのまま樹くんの掌が私の額に置かれると、少し安心したように小さく溜息をついた。どうやら熱はないと安心したらしく、さっきまでの真剣な表情が途端に緩んでいた。

「ん。熱はないな……」

「ごめん、重かったでしょ？」

「あーホント重かったわ。ダイエットしたら？」

「相変わらず口が悪いんだから……」

お互い顔を見合わせると、どちらともなく笑いが零れる。なんだか樹くんとは良い関係が出来ているようだ。樹くんと妹の翠ちゃんは、小さい頃にお母さんを亡くして以来、お父さんに育てられてきた。けれど忙しいお父さんはなかなか家族との時間がもてなくて、樹くんが翠ちゃんの面倒を見てきたのだ。だから樹くんは人に甘えるのがとても苦手だったと、まもちゃんから聞いたことがある。やがてまもちゃんのお母さんと樹くんたちのお父さんが結婚した時、まもちゃんを含めた三人での生活が始まった。樹くんは当然、まもちゃんとうとう接していかわからなくて、いつまでたっても馴染めなかったらしい。けれど、それでもまもちゃんの面倒見のよさや、思いやりの強さを自分なりに感じたのだろう。徐々にまもちゃんを兄として認め、いつしかお兄ちゃん大好きっ子になってしまった。初めて頼れる存在に出会い、初めて甘えてもいい人物に出会えたのだ。だから樹くんは私がまもちゃんと付き合いだしてから、どこかでお兄ちゃんを取られてしまったような気がしていたのだろう。幼い頃に甘えることを許されなかっただけに、こうして大きくなって

もまだお兄ちゃんが大好き。これは仕方ないかもしれない。それでも、樹くんが私を少しずつ認めてくれるようになって、楽しくおしゃべりできるようになったことが私はとても嬉しかった。渋谷三兄妹に仲間入りできた気がして。

ソファアに横になり、近くで樹くんが見守るように座っている。そんな時、二階から乱暴な足音が近づいてきた。

「……やっぱり！ 香澄、どうしたの！？」

「まもちゃん。いや、ちよつと貧血で」

「なんで！？ 貧血って……ちゃんと食べてるの！？ もう、今日は僕が作るから……貧血にいいもの作って、それから……」

「ま、まもちゃん！ 落ち着いて！」

「冷蔵庫に何かあったかな。そうだ！ 確か……」

慌てふためくまもちゃんを見ていたら、同じようにぽかーんと口を開けて樹くんもまもちゃんを見ている。想像以上の慌しさに、私と樹くんは思い切り笑った。私達を見て、今度はまもちゃんがぽかんとする。なんだかあったかいこんな時間が、ずっと続けばいいのに……。でもそれも長く続かない。これから起こる出来事は、こんなあったかい日常を全てぶち壊していくのだった。

10・握手会

結局、今晚はまもちゃんのお手製『THE 貧血対策』の料理が、食卓に所狭しと並べられた。あれもこれもと差し出される料理を、私は端から手をつけていき、最後の方は喉の途中まで料理が詰まっている間隔に陥るほどおなががいっぱいになっていた。あれこれ差し出すまもちゃんは、どこか田舎のおばちゃんのような感じがして、食事をしながら少し笑ってしまう。笑いを堪えるのに、どれだけ大変な思いをしたか……。食事の終わりに出されたほうじ茶からは、香ばしい香りが立ち上り、胃を穏やかに落ち着かせてくれる。一緒にごはんを食べていた樹くんもどうやら食べ過ぎたようで、いち早くソファーにゴロリと横になっている。妹の翠ちゃんは、今日は沢家にはいない。この三日間、大学のサークル合宿があるといって家を空けているようだ。だからまもちゃんのアシスタントは樹くん、ただ一人。私もお手伝いすると言ったけれど、まもちゃんはそれを丁寧に断った。私の不器用さを知っていれば確かに断るほうが正解かもしれないけど……。

「あ」

ほうじ茶が入った湯飲みを食卓に置き、突然思い出したように声を上げた私。そんな私を首を傾げながら見ているまもちゃん。貧血騒ぎがあつてからずっと忘れていたけれど、今日、私がまもちゃんに会いに来たのは、昼休憩の時に聞いた内海先輩の話をしようと思つたからだつた。私は先輩の顔を見て、慌ててその内容を話し出したのだつた。

「今日ね、内海先輩とお昼ご飯を一緒に食べたんだけど、まもちゃん……また握手会やるって本当!？」

「……内海とお昼って、二人きりで食べたの？」

「まもちゃん！ 問題はそこじゃないよ！」

「ふうん……仲良くしてるんだ」

「だーかーらー！ 握手会するって本当なの！？」

「握手会って誰の？」

「もう！ だから、まもちゃんのだよ！」

「僕の握手会ねえ……て、ええっ!？」

まもちゃんの顔が一瞬で青ざめてしまう。だらだらと汗を掻き、食卓をふきんで拭いていた手も止まってしまった。そう。握手会を行うということは、まもちゃんは再び女装しなくてはならないってことだ。しかも、もう人前には出ないという口約を担当さんとしたにも関わらず、本人の了承なく握手会というイベントを組んでしまった会社側。一体どういうことなのだろうか。

「……ちよつと担当さんに電話してみる」

まもちゃんの表情が陰しさを増す。それもその筈、約束を破られたのだから。なぜ急に握手会なんてイベントが持ち上がったのだろうか？ しかもまもちゃん、作者本人に了解を得ずにイベントを決行するつもりなのだろうか。世間に告知がいつているということは、まもちゃんは絶対にその握手会に出なくてはならないのは確かだろう。まもちゃんの性格だ、読者様を裏切ることだけはしたくない、そう思っているだろう。だからこそ一度女装して表に出てしまっただけに、今更実は男でした！ と男の姿のままファンの方の前に出ることを自分が許さないのだろう。女装することをあんなに嫌がっていたのに、再びしなくてはならないなんて……まもちゃん可哀想。そう、確かにそう思っていたのに、私って酷い彼女だ。だってまもちゃんの女装姿、また見られることにどこか興奮している自分がいるのに気付いてしまったから。愛らしい顔が化粧と女性の服でさら

に愛らしくなる。くりつとした二重に乗せられた長い睫毛が、マスクによってさらに長くなり、瞳を縁取るアイラインがさらに女性らしさをアップさせる。そしてまもちゃんは可愛い女の子へと変身するのだ！ そんな可愛いまもちゃんを作り上げたあの時、確かに何か手ごたえのようなものを感じていた。そう、私がメイクしたことでまもちゃんが可愛くなることが嬉しかったのだ。もしかしたら、まもちゃんのお父さんもこんな気持ちを抱えながら、メイクのお仕事をしているのかもしれない。自分の技術で人を綺麗にするって、とても素敵なことだ。私も……こんな気持ちになれるお仕事ができればいいのに。私は少しだけ湯飲みに残っていた冷めたほうじ茶を飲み干して、まもちゃんがリビングから出て行った廊下を見つめて彼が戻ってくるのを待っていた。

「……ふう」

重い溜息を吐きながらリビングに戻ってきたまもちゃん。その表情は暗く、何も言わずとも握手会は予定通り行われるということにはわかってしまう。

「ダメだ。また……女装しなきゃいけない」

「まもちゃん、またお洋服私の使いなよ」

「……香澄、なんか楽しんでない？」

「え？ き、気のせいだよ！」

ごめんね、まもちゃん。実はちょっと楽しみだよ。まもちゃんの女装姿を、今度こそ写真に撮ってみせる……！ あんなに可愛いのに写真は一枚もないのだ。一枚くらいは手元に欲しい……。まもちゃんにバレないように、こっそり撮ろうと決意したのだった。

11・僕のこと、好き？

まもちゃんの女装姿を再び見られるのかと思ったら、不謹慎かもしれないけど少しわくわくしている私。当然、まもちゃんにはわくわくしていたら怒られたことは言うまでもない。もしもまもちゃんが、可愛らしい華奢な感じではなく、ゴツめのマツチョとかだったら女装した姿なんて見たくはない。可愛い男は女装させたい……！なんて言ったらまた怒られちゃうかな。

今日は貧血対策料理をたくさんご馳走になり、すっかり遅い時間まで渋谷家に入り浸ってしまった。でも、まもちゃんのお見合いの話はしていない。話そうかなとは思ったけれど、今、まもちゃんは仕事に忙しそうに突然の握手会というアクシデントが訪れた為此以上彼の心労を増やすのは得策ではないと思った。だから私は言わない。お見合いは私になんとか解決しよう。勿論、お見合いなんてしたいわけではないけれど、父の立場やたちちゃんのお友達という繋がりがあるなら、会いもせずにお断りするのはいやな気がした。本来、お見合いをするなら真剣に向き合わなくてはいいのに、心に決めた人がいる私のような女がホイホイとお見合いなんかしていいのだろうか。なんか……違う気がする。多分、父はまもちゃんのことを好きだという私に、なんとか心変わりしてほしいのだろう。漫画家という不安定な職業の彼と一緒に幸せになれるかという心配から言っているのだとは思いますが。例えばまもちゃんの稼ぎが少なくなったとしても、私は彼以外の人と一緒にになりたいなんて思わないのに。どうにかして私を、安定した職業の人と結婚させたいという父心もわからなくはないけれど、今回の父の行動はあまりにも身勝手すぎる。お見合いの相手には悪いけれど、私、お見合いめっちゃくちゃにしています！

一人でそんなことを考えて拳を握っていると、横で私を家まで送ってくれているまもちゃんが不思議そうに私の顔を覗き込んだ。

「香澄？ どうしたの、拳握っちゃって」

「え？ や、ううん。なんでもないよ！」

「……ふうん。何か隠してるんだ」

「な、何も隠してないよ！？」

「香澄はわかりやすいから隠しても無駄だよ。……僕にも話せないことなの？」

「そんな……ことないけど」

「じゃあ、ちゃんと話して。僕、隠し事されるとなんか寂しいんだけど」

しよげた顔でそんなこと言われると……困るよー！

まもちゃんに心配かけたくないから隠しているのに、こんなに悲しい顔されるとうっかり話してしまいそうになる。でも、ダメだ。まもちゃんには言えないよ。私が自分で解決してみせるって決めたんだから！ 言いそうになる口をきゅっと閉ざして、無理矢理笑顔を作ってまもちゃんをまっすぐ見つめた。

「大丈夫！ 隠し事なんて……最近太ったけど、まもちゃん気にしてないかなあって思っただけ」

「……そうなの？ というより、香澄、最近太ったところか痩せた気がするんだけど」

「嘘！？ ホ、ホント！？ うわー、嬉しい！」

「僕は心配だけどね。手首なんて折れそうだよ……」

そう言いながら私の手首をそっと掴み、まもちゃんが掌で私の手首を包む。体の割りに大きくてしっかりしているその手が、私を何度も助けてくれる。だから私はつい、その手に頼ってしまうのだ。でも、自分でできることはできるだけ自分で解決したいの。まもちゃんに嘘をついてしまったことは、私にとって罪悪感以外何者でも

ないけれど、それでも……まもちゃんの負担になりたくないから。
だから嘘をつくね。まもちゃん、ごめんね。

忙しい毎日を過ごしているのに、まもちゃんは毎日私を気にしてくれる。こまめにメールをくれたり、美味しいご飯を作ってくれたり、本当はとても疲れているはずなのに仕事が終わると必ず私との時間を作ってくれる。そのことがとても嬉しいけれど、本当はとても不安になるときがある。私という存在が、まもちゃんにとって負担になっているのではないかと。私のことを気にかけて、まもちゃんはもっとゆっくり休めるんじゃないかって、時々思う事がある。思い過ぎしたとは思っても、一度そう考えてしまうとなかなかその不安が頭から離れていかない。もっと、もっと私はまもちゃんに甘えずに、自立した女性にならなくちゃいけないかもしれない。だけど、どうしたらそんな女性になれるのか検討もつかない。だからこそ、このお見合いを自分の手で解決すれば、何かが変わるのではないかと何処かで自分に期待している。だから……私はまもちゃんには話さない。まもちゃんに頼らなくても自分で何でもできるようになるから、まもちゃん……待っててね。

まもちゃんは、まだ少しだけ私が何かを隠していると疑っているようだけど、私は笑って取り繕う。するとまもちゃんが私の腕を引き寄せて、力強く私を抱きしめた。ここは住宅街の真ん中。もう夜遅いとはいえ、駅方面から誰がやってくるかもわからない天下の往来だ。

「ま、まもちゃん！？ どうしたの……？」

「……香澄。僕のこと、好き？」

「好き……だよ？」

「ん。ごめん、もう一回言って？」

「まもちゃんが、好き」

「……ありがとう」

まもちゃんがさらに力を込めて私を抱きすくめる。大好きなまもちゃんの匂いに包まれて、私は体の力を抜いた。彼に体を委ねて、そっと背中に手を回す。お互いのぬくもりがあれば、私達は何も言わなくても繋がっている気がする。こうして触れ合っているだけで、私はとっても幸せだ。

そんな幸せに浸っている私達……この時は、私の嘘がまもちゃんを傷つけることになるなんて、思いもせず。

11・僕のこと、好き？
(後書き)

12・聞かれてしまった!

まもちゃんにマンションまで送ってもらい、私達はそこで別れた。まだまもちゃんは仕事が残っているらしい。翠ちゃんが家にいないと、アシスタントは樹くんだけになる。私はまもちゃんの仕事を手伝えないので、そこにいてもなにもできないから。だからまもちゃんは、私を送るとすぐに家に帰っていった。彼の背中を見つめながら、私は今週末に控えているお見合いのぶち壊し作戦を考えることにしたのだ。夜中に一人で色々考えて、ああでもないこうでもない頭を悩ませているうちに、私は深い眠りに落ちていた。翌朝、さんと差し込む朝日で目覚め、変な体勢で寝た為か体のあちこちが痛い。

……ああ、会社に行きたくない! でも行かなくちゃ。

私は自分を奮い立たせて重い腰を上げ、出勤したのだった。

「うう……眠い……」

仕事中は、常にパソコンと睨めっこ状態。だけど今日はパソコンの画面を見ていると眠くなり、途中で手が止まり、意識が吹っ飛びそうになる。うつらうつらと船を漕いでいると、隣からワザとらしい咳払いが聞こえてきたり、無意識に自分の足がびくっと動き、それで目が覚めたり。もう、午前中の仕事は散々だった。昼休みになり、私は眠気を吹き飛ばすドリンクをコンビニに買いに行き、お昼はそのドリンク一本で終わらせた。あまりにも眠くて食欲なんてまるでない。まもちゃんがいたら、絶対怒られるだろうな……なんて考えながら、屋上でそのドリンクを飲みながら景色を眺めていた。東京のビル群がここから一望できるし、都会の真ん中だというのは緑も見える。そこはこのオフィス街で働く人にとってはオアシスだ。今の時間帯は昼休みの人が多いのか、このオフィス街は楽しそうに

笑いながら歩いている会社員が多く見受けられる。私もたまには外で食べようかと思っているけれど、あまり外食癖がつくと金欠になってしまうので、なるべく自分で作ったり安い社食で食べたり、時折お昼ご飯は抜いたりと色々工夫はしている。服やコスメ道具など買いたいものは沢山あるし、いつかはまもちゃんと旅行だってしたい。だから私はなるべくお金を貯める。まもちゃん……なんか、昨日会ったばかりなのにもう会いたくなっちゃったなあ。

胸を押さえながら遠くの景色を見つめているけれど、頭の中にはまもちゃんの笑顔ばかりが浮かんできてくる。やっぱりお見合いが不安だから、本当はまもちゃんに言ってしまいたい。きつと急にまもちゃんが恋しく感じられるのは、それが原因なのだろう。そんな時、突然私の携帯がけたたましく鳴りだした。

「も、もしもし」

『香澄。父さんだ』

「なんだお父さん……何？」

『お前、週末は予定なんか入れてないだろうな』

「……ちゃんと空けてるよ、お見合いすればいいんでしょ!？」

『……わかっていればいいんだ』

「もうお昼休み終わるから切るよ」

私は乱暴に携帯を切り、携帯をバッグの一番奥にしまいこんだ。

何よ……そんなに娘を結婚させたいの!？」

父は私をさっさと嫁に出したいのだろうか。もう、せっかくの昼休みだというのに気持ちちが沈んで仕方がない。はぁと重い溜息を吐くと背後から肩をぽんっと叩かれた。

「香澄ちゃん、あのさ……」

「うとう内海先輩!」

「どうしたの? ずいぶんな驚き方だなあ」

「今の電話……聞いてましたか……？」

「電話してたの？ いや、それすら気付かなかったけど……」
「そうですか、あ、じゃあいんです」

ホッとした。

内海先輩はまもちゃんが辞めてからなぜかまもちゃんに懐きだし、時折電話をしてはたまにお酒を飲みに行ったりしているらしい。高校時代、一度はねじれたその友人関係が、今ではすっかり元通りの仲良しになっている。時間が経ち、大人になり……昔とは違う見方ができるようになると、昔は仲違いしていた関係でも不思議と仲良くなれたりする。大人になるって、丸くなるってことなのだろうか。考え方が変わる……とは言うけれど、自分ではよくわからないなあ。とにかく、まもちゃんと内海先輩の仲はかなり良くなっているの、うかつにお見合いの話を内海先輩に話すわけにはいかない。いつ、まもちゃんの耳に入るかわからないから。せっかく隠しているのに、バラされちゃたまらない。

内海先輩は、やっぱり今度の握手会の話をしに私のところに来たらしい。ああ、普通に平穏な昼休みを過ごしたいのに、内海先輩の話は半分以上わからない。漫画の話ばかりされると、あまり詳しくない私の頭の中はハテナマークでいっぱいになるのだ。まもちゃんを描いた漫画の話だからわかるものの、あまりにもマニアックな話はちんぷんかんぷんだ。やがて昼休みが終わり、私は内海先輩と部署へ戻っていった。なんとなくドリンクの効果がでてきたのか、あんなに午前中は眠くて欠伸を噛み殺していたのに、今ではすっかり目覚めている。いやあ、こんなに効くなんて思わなかったなあ。バリバリと午後は働いたけれど、午前中の仕事の進まなさ故に今日は残業が決定。久々の残業に肩を落としたものの、自分で蒔いた種だ、そう自分に言い聞かせて仕事に取り掛かった。パソコンと資料を交互に睨めっこしていたら、いつのまにか集中力が上がってきて、他のことには気が利かなくなってしまうていた。

そう、私が集中して仕事を終わらせようと頑張っているその頃、外回りから帰ってきた内海先輩が私に声をかけたのだ。でも、内海先輩の声には全く気付かない私。そこで彼の言葉に耳を傾ければ何かが違ったのか……？ 内海先輩は、どうやら本当は昼休憩の私の電話内容を聞いてしまったのだと、謝罪したようなのだ。でも私は気付かない。そしてその晩、内海先輩はまもちゃんに電話して、うっかりその内容を話してしまったのだという。当然、このときの私はそんなこと思ひもしなかった。だからかな、今週はまもちゃんに一回も会えないまま、お見合いに行くことになってしまったのだ。

12・聞かれました！
(後書き)

13・母

ガタンゴトン……

私は今、実家へ帰省すべく新幹線に乗っている。この前のたろちゃんとの結婚式以来、久しぶりに帰る地元。あの時は、隣にまもちゃんがいって楽しかったけど、今日は私一人だ。なんといってもお見合いだ。それをぶち壊さなくてはならない。父に正面からの説得は無理だと判断した私は、なんとしてでもこれから行われるお見合いを台無しにしなくてはならない。相手の方には申し訳ないけれど、ここは一発、嫌われなくては！

ちなみに私のお見合いぶち壊し作戦はこういうものだ。

お見合いは着物で行く事が決まっているので、まずは着物なのに大股で歩いて女度の低さをアピールする。そして相手の話よりも目の前に出された料理をがつつりといく。ここできつと相手はかなりドン引きするに違いない。そして食事の後に二人で散歩というお決まりのコースを勧められたら、嬉しそうに笑顔を作り、彼の腕を強引に引っ張る。話す内容は、まあ最初はだいたい相手のことを知りたくて色々話しかけてくるに違いないから……その都度、ぶち壊す話をするでしょう。……ここまで来れば、大抵の男はドン引きするでしょう。勿論、私もお断りの返事を用意しておく。

「……我ながら完璧」

ぎっしり書き詰めた手帳をパタンと閉じ膝に置きながら、片手で窓側に置かれたペットボトルを手を取った。そしてペットボトルの脇に置かれている携帯は、この一週間、うんともすんとも言わない。無言を貫き通して、ついにお見合い当日になってしまったのだ。

まもちゃんは、どうしてるかな……お仕事忙しいのかな。

待ち受けに設定しているまもちゃんの写メ。そこに映っているの

は穏やかな陽だまりの微笑みを浮かべるまもちゃんの顔。それを見るだけで、胸がきゅうつと締め付けられる。なんでも打ち明けていたのに、このお見合いだけはまもちゃんに内緒にしている。そのことが時々罪悪感に変わり、変に胸がモヤモヤするのだ。この一週間、まもちゃんに一度も触れていない。私の中のまもちゃんが、なんだかとっても少なくなってしまった感じがする。

「会いたいな……」

その言葉は、まもちゃんに届かない。ただ、電車の音によってかき消されてしまうだけの言葉だ。窓の外に流れる景色を眺めるも、脳裏に浮かぶのはまもちゃんの笑顔だけだった。会いたくて、会いたくて……だって本当は凄く不安だから。このまま、まもちゃんとの仲を引き裂かれることになったらどうしよう、そんなことはさせないとは思っている。こうして一週間も離れているとなんだか心細くて……。私ってダメだなあ、結局まもちゃんを頼りにしすぎているからこうやって突然不安に襲われるのだ。私は気分を切り替えようと、両頬を掌でパンツと大きな音を立てて叩いた。少しは頭もすっきりするでしょう！　そしてそのまま、目的地まで私は目を瞑っていたら気がつけば眠りについていた。

目的地へ到着のアナウンスと共に目覚めた私は、荷物を持ってあわてて新幹線を飛び降りた。すっかり熟睡してしまったようだ。お見合い当日だというのにこの緊張感の無さ……我ながら大物のような気がする。駅前で待機しているタクシーに飛び乗り、実家へ向かったのだった。

「ただいまあ」

久しぶりの実家は、やっぱり懐かしかった。小さな家だけど、思い出がたっぷり詰まっているこの家は、昔から何一つ変わらない。

変わったことといえば、この家から私が出て行ったことくらいだろうか。父と母が暮らすこの家に足を踏み入れると、昔と変わらぬ笑顔で母が私を迎えてくれた。

「おかえり、香澄」

「お母さん、ただいま。元気？」

「元気よ、香澄も元気そうで良かったわ。本当に帰ってこないんだから……薄情な子」

「それはごめんってばー」

母と娘の他愛無い会話だけど、久しぶりの母との会話は心地良いものだ。いつだって母は私の味方をしてくれて、父と私が喧嘩しても必ず母が仲裁に入ってくれる。でも、今回のお見合いに関しては、母は何も触れてこなかった。父が帰った後、母に電話をしたけれども見合いの話には一切触れない。もしかして、母も私がお見合いすることを望んでいるのだろうか。なんだかさっさと嫁に行ってくれ！ と邪魔者扱いされているような気がして、ほんのちょっぴり寂しい気持ちになる。

実家の玄関を上がりリビングに入るが、そこに父の姿は無かった。

「お父さんはどうしたの？」

「お父さんはね、先にお見合いのお店に行ってるわよ」

「……ねえお母さん？ どうしてお見合いに反対しないの……？」

「……反対、したのよ？ でも、お父さんは香澄の為だって聞かないの。だったら香澄に判断してもらえばいいかなって思って」

「お母さん、私……大切な人がいるの。だから本当はお見合いなんてしたくないよ」

「じゃあ、先方さんに素直にそう言いましょうね。お相手には悪いけれど……香澄が辛い思いするくらいなら、お母さん助け舟だしてあげる」

にっこりと微笑む母の姿を見ていたら、なんだか私……小さい頃に戻ったような気がした。いくつになっても母は母だ。その暖かな空気に触れると、つい弱音も吐いてしまうし甘えたくなってしまう。私はいくつになっても大人になりきれないのかな。でも、たまになら……甘えてもいいよね？ お母さん。

13・母（後書き）

web拍手のお返事を書かせていただきました。お時間があるときにでも、ちらりと覗いてやってくださいます。

14・お見合い開始

前園家の和室にて、私は母の手によってそれはそれは見事な振袖に袖を通していた。真紅の牡丹が見事に咲き誇り、蝶がひらひらと楽しそうに舞う姿が描かれた着物は、母の娘時代にあつらえた物だという。この日のために永い眠りから目覚めたこの着物は、今再び光の下に甦ったのだ。

「あら、似合うじゃない」

「……なんか派手な気がする」

「そんなことないわよ。さ、できた！」

見事に結ばれた帯をポンツと叩き、着付け終了の合図をする母。そしてその完成した姿を姿見で確認する私。……案外似合っている。この姿を見せるのが、まもちゃんではないことがとても悲しい。いっただって綺麗になった姿は大好きな人に見て欲しいものだ。例えば、褒め言葉が出なくても、私はまもちゃんに見て欲しかった。今更になって、まもちゃんに今日のことを伝えなかったことを後悔していた。でも、この件は自分自身で解決すると決めたのは、他でもない私自身だ。ならば、その決意を本物にする為にも、どうしても今日のお見合いは自分でぶち壊すしかない。まもちゃん……私、頑張ります。

今の私の目はギラギラと燃えていて、まるでこれから戦にでも向かう武士のような闘志を宿している。いや、これは戦だ。『お見合い』という名の……！

「香澄、はい力抜いて。リラックスしなさいな」

「え。そんな力入ってた？」

「そりゃあもう。香澄の後ろにめらめらと炎が見えるくらい気合入

ってるのがわかったわ」

「……はは」

のんびりした口調の母に、すっかりペースを崩されそうだ。でも、それがある意味私をとて落ち着かせてくれた。肩の力を抜いて、あくまでも自然に……自分のペースを崩さないこと、それが大事だ。私は深呼吸をして少し自分を落ち着かせ、姿見に映る自分と向き合う。そして、にっこりと笑顔を浮かべた。

そう、これでいい。

何を言われても不敵に微笑んでいればいいのだ。父のことだから私がぎんぎん騒ぐことなどお見通しなのだろう。でも、今日の私は一味違う。にっこり笑ってばっさり切る、これでいい。どんな言葉も笑顔でかわしてみせよう。最後にもう一度微笑んで、私は実家をあとにした。

タクシーでやってきたのは、この街で一番大きなホテルだった。ホテル内にある懷石料理の料亭の個室を押さえてあるというのだ。ど、どこにそんなお金が……！　と思ってしまった根っからの庶民派である私。なんとなく、こんな料亭は別世界のような気がして氣後れしてしまう。すると、料亭の入り口に掛かっている暖簾をたくし上げて顔を出す父の姿が目止まる。

「おお、来たか。先方さんはもういらっしゃっているぞ。早く中に入りなさい」

「……本当にするの？　お見合いなんて」

「今更何を言ってるんだ。お前の将来を任せられる方を、選りすぐりの中から一人選んだんだ。父さんの腕を信じなさい」

「……選りすぐりってなによ。私にはまもちゃんがいるって……」

ぶつぶつと言ったところで、父の耳には届かない。そう、父はすでに心ここにあらず、といった具合で、お見合いをする私よりも浮

き足立っていた。そんな父の背中を見ながら中へと進んでいくと、ある一室の前で父が立ち止まり、ゆっくりと障子をあげた。

「すみません。ようやく娘が到着しました」

開かれた障子の向こうで座っていた男性が立ち上がってこちらを見る。その男性はにこやかに微笑み、大きくて綺麗な瞳を細めて嬉しそうなオーラを出している。ぱりつとしたスーツに、きちつと締めているネクタイ。タイピンは嫌味のないシルバーのシンプルなものだし、ポケットチーフはネクタイと同色でコーディネートしている。さらさらと流れる前髪、背筋もピンと伸びている。何処からどう見ても、さわやかな人という印象の彼は、自分の席から駆け寄って私の前に立ちはだかる。

「初めまして。私は藤野憲次ふじのけんじと申します。とてもお会いしたかったですよ！」

白い歯をきらりとさせながら、あくまでもさわやかに微笑む藤野さんは……案外好印象だ。ただ、あくまでも好印象だけで私にはまochaんだけだということを付け加えておこう。挨拶もそこそこに、私達はそのまま中に入り、席に着くとすぐに藤野さんが話し始めた。どうやら藤野さんにとってはもお喋り好きのようだ。人柄は申し分ない、ちよつと照れ屋だけど自分の意見をしっかりと言える、そんな人だ。いよいよ始まったお見合い、まずは乾杯からということ、相手にビールを注ぐ。軽くグラスを傾け一口飲むと、緊張していたせいか喉がしゅわしゅわして気持ちいい。あまりにも美味しくて、ついうっかり一気に飲み干してしまったほどだ。そんな私の姿を見て、目の前に座っている藤野さんがポカンと口を開けて私を見ていることに気がついた。口を開けたままだった藤野さんが、ハッと我にかえりすぐににこりと微笑んだ。

「見事な飲みっぷりですね！」

藤野さんが、さわやかな笑顔でパチパチと手を叩きながら私に言う。それは褒め言葉なのだろうか？ 本人は悪気はないようだけど、そんなこと言われて喜ぶ女がいるわけないだろう。だから私はにっこり笑って、あくまでもさりげなく彼に攻撃をした。

「うふふ、全然嬉しくないですー」

そしてそのまま手酌でグラスにビールを注ぎ、再びぐびぐびと飲み干した。そんな私を見ても、目の前の彼は動揺一つしない。逆に動揺していたのは私の父のほうだった。まさか娘が笑顔でそんなこと言うなんて思ってもみなかったのだろう。真っ青な顔をして動揺の色を隠せない父、なんだかおかしくて笑ってしまいそうだ。そんな形で、お見合いはスタートしたのだった。

15・気が強い女

目の前で微笑みながら談笑している藤野さんは、話してみるとなかなか良い人のようで、最初はぶち壊してやる！と意気込んでいた私もいつのまにか彼の和やかペースに巻き込まれていた。のほほんとした彼の穏やか光線……もといにつこり笑った笑顔は、なんだか人を引き込むものがあつた。そんな彼がなぜお見合いをしているのか。当然、こんなに性格が良くて気配りができて、その上顔もカッコよければそれなりにモテるだろうに。なんでお見合いなんて引き受けたんだろう。日本酒が入ったお猪口に口をつけ、ちらりと上目遣いで彼を見ると、ぼつちりと目が合ってしまった。なんとなく気まずくて、ぷいっと横を向く私。……この方がよっぽど気まずかった。

「香澄さん」

突然声を掛けられて、びくつと肩を震わす私。その様子を見て、申し訳なさそうに謝る藤野さん。

「あ、ごめんね。いきなり声かけちゃって」

「いえ、すみません。私の方こそ過剰に驚いてしまつて」

「いいよ。悪いのは私だから」

どことなく、まもちゃん性格と重なる部分がある。藤野さんとまもちゃんの気の遣い方は似ているような気がするのだ。それでも藤野さんに惹かれることは絶対にはないといえるけど。なんだか、いつでもまもちゃんのことばかり思い出してしまつて、どんどんまもちゃんに会いたいという気持ちばかりが心に降り積もっていく。まもちゃんの笑った顔がみたい、まもちゃんのあつたかい掌でぎゅっ

と繋がりたい、そして華奢なようで意外と逞しいまもちゃんの腕に、抱きしめられたい……。もう、頭の中はまもちゃんだらけになってしまった。このままこの席から立ち上がり、まもちゃんのところへ向かおうかな。そんなことを考えていると、隣のお父さんが私の腕を肘で突いてきた。

「香澄、藤野くん散歩に誘われてるぞ。ほら行って来い」

「え？ 散歩って……」

突然父にそう言われても、頭の中はまもちゃんだらけなのだ。何を言われているのかさっぱり検討つかない。すると目の前の藤野さんがにこりと微笑みながら、私に手を差し伸べる。

「ホテルの庭園が、とても見事だと聞いてます。一緒に少し、歩きませんか？」

その仕草、その誘い方、それはまるでどこかの国の王子様のようで、私は思わず赤面してしまったほどだ。なんとかして、彼のペースカ抜け出さないとずるずると良い雰囲気のまま、このお見合いを続けなくてはならない。彼のは申し訳ないと思うけど、私はあえてキツイことを彼に言った。

「手なんて引いてもらわなくても結構です」

差し伸べられた手を、私は受け取らず、そのまま彼の前をすたすたと歩いていった。呆氣にとられた藤野さんが、一瞬ぼかんとしていただけれど、すぐに私の後ろを追いかけてきて気がつけば隣に並んで歩いていった。人にキツイ言い方をするのって、こんなに難しいのかと一つ溜息を吐く。そう、こんな言い方には一生慣れることは無いだろう。藤野さんは悪くないのに、こんな言い方するなんて。私

は何か間違ってるかな……。隣を歩いている藤野さんの顔を見ると、彼は何も気にしてないようにたださわやかな微笑みを浮かべている。目が合えば必ずにこっと笑うし、さりげなく段差などを教えてくれる。着物で動きづらい私のために、細心の注意を払ってくれるいい人なのに……。私は、藤野さんと庭園に来てから、思い切って言うことにした。

『私には、大切な人がいる』と。

緑広がる庭園に足を踏み入れると、そこは日本庭園が広がっていた。青々と茂る芝の向こうにある日本庭園は、立派な岩と池と小さな橋があり、ししおどしもある。丁寧に砂利を敷き詰め、本当に見事な日本庭園が広がっている。その池にかかる小さな橋を渡ろうとした時、私は藤野さんに声をかけようとした。でも、私が声をかけるより前に、藤野さんが私のほうに振り返って、声を出した。

「あの！ 香澄さん！」

「……は、はい」

「もう、俺……香澄さんのこと、好きになってしまいました」

「え！？ 早っ」

ほんのりと頬を赤らめながら告白に近いものを私にしてきた藤野さん、いったい私のどこがいいというのだろうか。呆氣にとられてしまったのは今度は私の方だ。すると、藤野さんの口から衝撃なひと言が。

「香澄さんのように気が強い女性が大好きなんです。言葉のキツさとか……たまらなく好きです」

「えええええ！？」

嫌われようとして使ってきたキツイ口調なのに、好かれてしまうなんて。まさかの出来事に、何も言えなくなってしまった。

「あの、これはその……わざとですから」

「またまた。そんなこと言わなくてもわかりますよ」

わかってない！

もう、完全に藤野さんの中で私の印象は『強気な口調の強気な女』らしい。これを覆すにはどうすればいいのかな。もう、ハッキリと彼に告げたほうがいいのかもしれない。そう思った私は、ごくりと唾を飲み込んで、彼に向かい合いハッキリと告げた。

「私にはもう、大切な人がいます。だから、藤野さんとはお付き合いなんて出来ませんから」

「……俺は、君にとって大切な人になる自信がありますよ？」

「無理です。私には彼だけですから」

「ならば長期戦でいかせてもらいましょうか」

藤野さんのさわやかな笑みが、いきなり黒くなった瞬間だった。

16・王子様、いらっしやい

藤野さんの表情が妖しく変化した時、その、あまりにも綺麗な顔立ちに一瞬背中がゾクリとした。なんだか今までの優しそうな藤野さんではなく、まるで別人のように妖しく笑う。たろちゃんの友達と言っていたから、どこか気が緩んでいたのだろうか。たろちゃんは見ると思っていた。でも、なんだかこの人は、たろちゃんの周りにいる友達とはどこか違う気がする。それをうまく言葉で表すことはできないけれど、なんとなく纏っている空気が違うのだ。長年たろちゃんの隣にいて、傍で彼を見つめてきた私だからこそ、わかるのかもしれない。そんなことを考えていたら、いつのまにか藤野さんは私の手を取り、私の顔の高さまで持ち上げた。

「……俺なら、香澄ちゃんを幸せにできるよ」

真っ直ぐに見つめられ、そっと私の手の甲に唇を落とす。それはまるで将来を誓う儀式のようで、私は何も言えなくなってしまった。そんな時、頭の中に浮かんだのはまもちゃんの顔だ。そう、私の幸せはまもちゃんが傍にいるから叶うのに、藤野さんと幸せになんかなれるはずなのに……。まもちゃんの笑顔が頭の中を支配すると、私の瞳からは涙が自然に零れていた。私はお姫様扱いをされたいわけじゃない、楽な生活をしたいわけでもない。ただ、まもちゃんと一緒に支え合って、笑い合って過ごしたいだけ。そう思ったら、私は藤野さんの手を払い除けていた。勢いよく手を払い除けた後、藤野さんをキッと睨みつけて、思い切り叫んでいた。

「私の幸せは、藤野さんでは掴めない！ 私にはまもちゃんだけなの！」

声を振り絞って本心を叫ぶ。その声は庭園内に響き渡りそうなほどの大きさだった。そんな私の声が届いたのだろうか、庭園内から聞こえてきたのは、私がこの世で一番好きな声だ。

「……香澄、迎えにきたよ」

はあはあと息を切らせながら庭園に来てくれたのは、やっぱり私の王子様、まもちゃんだった。いつもこういうピンチの時には、まもちゃんが必ずやってくる。今日なんてお見合いのことを告げてもないのに、ここまで来てくれた。気がつけば私の足はまもちゃんの所へ駆け出したいた。大きく手を広げて彼の胸に飛び込んだら、何も言わずにまもちゃんが強く抱きしめてくれる。そう、これがないと私はダメなんだ。いくら他の男性に抱きしめられたとしても、まもちゃんじゃなきゃ意味が無い。ドキドキしないし、安心できない。私の心を暖めてくれるのは、まもちゃんだけなの。この腕の中にいると、本当の自分を取り戻したような気がするのはどうしてだろう。まもちゃんの傍にすることで、本当の私になれるのかもしれない。たったの一週間なのに、随分長いこと会っていないような気がする。体中の全ての細胞が、彼を求めていたのかもしれない。私はようやく、心の底からホッとする事ができたのだ。

「藤野さんと仰いましたか。すみませんが、香澄だけは譲れません。これは絶対です」

「しかし、香澄ちゃんのお父上からは是非にと言われてこの席を設けたのです」

「今から香澄のご両親のところへ参ります。そこで全てをぶつけますから。では」

まもちゃんが珍しく早口になっている。これは相当怒っているに

ちがいない。やっぱり私が今日のことを言わなかったからかな……。踵を返して、ずんずんと力強く歩いていくまもちゃんの手に引かれながら、私達はホテルの中へ戻っていった。ホテル内をずんずん突き進むまもちゃんだけど、一回も道を間違えずに私の両親がいる部屋へとやってきた。まるで全てを知っているかのように。

「失礼します」

声をかけて障子を開く。そこには驚いた顔をした藤野さんのご両親と、やっぱり驚いた顔をしたお父さん、そしてこんなときでも冷静で穏やかな表情をしたお母さんが一斉にこちらを見た。しかしまもちゃんはそれに怯むことなく、入り口で正座をする。私もそれに合わせて、少し後方で正座をすると、まもちゃんが突然大きな声を出した。

「お父さん……僕はあなたが僕を認めてくれるまで何でも我慢するつもりでした。でも、今回のこのお見合いは我慢できません。僕に辛い仕打ちをするのは結構、でも香澄を無理矢理お見合いさせるのは、如何なものかと思います」

「む……お前よりもこちらの藤野さんのほうが、香澄を幸せにできると思ったから見合いをお願いしたんじゃないか」

「何がご不満ですか。私の職業ですか、年収ですか、それとも僕自身に気に食わないのですか」

「香澄に何不自由なく暮らせるくらいの収入がないと、俺は認めん」
「では僕の去年の収入を見ていただければわかるでしょう。どうぞ、ご覧ください」

差し出した紙切れには一体どんな事が書かれているのだろう。まもちゃんの年収が書かれていることだけは確かだけど……。まもちゃんがお父さんに手渡した紙切れを見て、お父さんの顔色がみるみ

る青ざめていく。まもちゃんはその様子をジッと見つめて待ち構えていた。そして静かに口を開く。

「……如何ですか。ちなみに贅沢などしていませんので、その大半は貯金してあります。それでも不満ですか!？」

「むむむむ……」

「僕自身のことを、もっと知ってください。僕は香澄……さんが好きです。彼女がいるから頑張れる。僕は、彼女を……僕の一生をかけて幸せにしたいのです」

これは……これは、紛れも無く両親に向かって、結婚宣言していることになる。まもちゃんの固い決意が、私の両親に打ち明けられた今、ここにいる人全員が、すっかり言葉を失っていたのだった。

17・ストレートでいこう

しん、と静まり返った和室に、一つの咳払いがこの空気を打ち碎いた。咳払いをしたのは、藤野さんのお父様。彼は渋い顔をして、静かに話し出した。

「……前園さん、これは一体どういうことでしょうか」

ジロリと睨みつける相手は勿論私の父だ。父はたじろぎ、少々ばつが悪そうな顔をしている。そんな時、割って入るように声を掛けたのは、私のお母さんだった。

「主人は、娘の幸せをただ望んでいただけです。藤野様はとても知的で、そして申し分ないお仕事に素晴らしい性格だとお聞きして、主人は是非にとお見合いの席を望んだのです。藤野様には申し訳ないことをしてしまったと、心よりお詫びいたします」

ゆっくりと指をついて頭を下げる母の姿を見たら、私も同じように頭を下げていた。藤野さんのご両親は怪訝な表情を浮かべ、父は恐縮している。母は深く頭を下げたまま、じっと動かなかった。そこへ後からやってきた藤野さん本人は、その場の空気を断つように口を開いた。

「嫌だな父さん、母さん、そんな顔しないでよ。俺は……気にしてないから。むしろ香澄ちゃんに出会えたことを喜んでるんだから」

にこっと笑いながら、窮屈だったのか、自分のネクタイを少々緩めながら穏やかな口調で話し出す。藤野さんはそれから私の方を見て、目線を合わせて頬に触れた。彼の掌は熱く、そして逃すまいと

強く私の頬に手を置いて、何事もなかったかのように私に囁いた。

「俺、諦めは悪いほうなんだ。……忘れないでね」

それだけ言い残し、さっさとこの部屋から出て行ってしまった藤野さん。その後を追いかけていくのは彼のご両親だった。お見合いの席は、彼が残した一言で締められたのだった。

頬に残る藤野さんの掌の感触と彼の言葉が私の頭の中でぐるぐると回っていく。つけられていないのに、大きな傷を私はつけられたような感覚に陥っていた。『諦めは悪いほうなんだ』、この言葉が意味するものを、今の私は知らない。これから先、藤野さんに会う機会があるというのか……それは藤野さんにしかわからない。

最後の最後で、恐怖にも似た感情が私の心に渦巻いていく。次に彼に会った時、私はいつたいうようになってしまうのだろう。まもちゃんだけ、そうまもちゃんだけなのに……がっしりと掴まれてしまった心から彼を追出すことは不可能だった。それは恋とは違うまるで別の感情、恐ろしい彼の執念が私を捉えて放さない。

「香澄、顔色が悪い。どこかで休もうか？」

「え……あ、ううん。大丈夫」

どうやら顔色が悪いらしい。自分でも気付かなかったけれど、恐怖心は顔色にも出ていたようだ。それを見た父は、私を無理矢理この座敷に寝かせて、ひと言も口を開かないままただ傍にいただけだった。母は、まもちゃんの前に行き、深々と頭を下げる。まもちゃんも母につられて同じように頭を下げた。

「守さん、初めまして。香澄の母です。お電話ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ。不躰な電話を……失礼しました」

その会話を何気なく聞いていたが、どうもまもちゃんは私の実家に電話をしたようだ。母は不思議そうな顔をしている私に、そのことを説明してくれた。

「今日の朝、守さんから電話があつたのよ。お見合いをすることは知っていたようだったから、このホテルの場所と部屋を教えてさしあげたの。……香澄は彼を待っていたのでしょうか？」

「え……お母さんに電話……？」

何が何だかわからなかった。だってまもちゃんは私の実家の電話番号なんて知らないし、まさかお見合いのことまで知っているなんて思わなかったから。私は話した覚えは無いし、誰にも話していないのに。訳がわからないまま口をポカンと開けていると、まもちゃんがにっこりと微笑んで私に事情を説明してくれた。

「実は一週間前に、内海からお見合いの話を聞かされたんだ。僕は……信じられなかったけど、でも気になって。平日は毎日会社に行っていることは知ってたから、恐らくお見合いは土日だろうと思ってマンションに行ったら、香澄はマンションにはもういなくて。焦った僕は凄く挙動不審に見えたのか、マンションの住人が不審な目をして僕に話しかけてきたんだけど、事情を説明したらその人がちやうど香澄が大きなバッグをもってマンションを出て行ったのを見ていたんだよ。だから僕はそのまま太郎くんに電話して、香澄の実家の番号を教えてもらったんだ」

長い長いまもちゃんの説明が終わると、私は必死でまもちゃんが私を探してくれていたことを痛感した。こんなことなら自分で何とかしようなんて思わないで、ちゃんと相談すれば良かったんだ。結局、今日はまもちゃんを駆けずり回してしまい、疲れた体を休める

こともせず、ただ彼を疲れさせてしまい心配をかけただけだった。解決すると言っていたのに、最後は結局まもちゃんが守ってくれた。私は、やっぱりただの役立たずだ。

「まもちゃん……ごめんなさい。私、自分でなんとかしようってそればかり考えて……」

「僕はいんだよ。結果的に香澄を見つけれられたから」
「まもちゃんっ」

もう夢中だった。一緒に親がいることなんてすっかり忘れて、ただまもちゃんにしがみ付いていた。力いっぱい彼を抱きしめて、たくさんの涙が溢れてくる。まもちゃんを、ただひたすら感じていたくて、この腕を離したくなくて、何もかもを忘れて夢中で彼にしがみ付いていたのだ。そっと背中に回されたまもちゃんの手が優しく私を包み、もう片方の手で私の頭を撫でてくれる。撫でられているだけで、本当に安心できる……この手があったから私は笑えるんだ。それを確信した時、私は父に向かって叫んでいた。

「お父さん、私……まもちゃんがいなきゃ、笑うこともできないよ！ まもちゃんがいなきゃダメなの！ だから……だから……」

必死で父に懇願するように叫んだ。でもその後の言葉が続かない。何て言えばいい？ どう言ったらいいの？ 後にく言葉を出せない私の代わりに、言葉が続けたのはまもちゃんだった。

「香澄さんを僕にください」

ストレートなその言葉に、私も父も母も、皆一様に固まったのは言うまでもない。

17・ストレートでいこう(後書き)

活動報告で拍手コメントのお礼を書かせていただきました。
お時間がありましたらどうぞご覧ください。

18・夫婦

「香澄さんを僕にください!」

まもちゃんの声が和室に響き渡り、父も母も、そして私も何も言えず、ただ固まっていた。正座をして膝に拳を置き、まもちゃんの真剣な表情が真っ直ぐ父に向けられる。その真剣な表情から父も視線を外す事が出来ずにいた。しかし、ここでまもちゃんがハツとなり、真剣な表情が途端に崩れだす。

「うわ……唐突にこんなことを……申し訳ありません!」

慌てて頭を畳に擦り付けるように土下座をするまもちゃんの姿を見て、私は慌てて彼に駆け寄った。

「まもちゃん、頭上げてよ!」

「だって……僕、まだ香澄にプロポーズだって正式にしてないのに……」

恐縮して一向に土下座の姿勢を崩さないまもちゃんに、父は言葉をかけた。

「頭を上げなさい」

おそろおそろ頭を上げるまもちゃんを、父は睨みつける。けれどその目は、先程とはどこか違っていて少しだけ優しい光を宿しているようにも見える。もしかしたら、まもちゃんのことを認めてくれるのかもしれない! そんな希望が胸に芽生えた。ちゃんと両親に

認めてもらって『家族』として彼を受け入れて欲しい。結婚とは二人だけのものではない、家と家の結びつきだ。昔からこう教えられてきた私は、やっぱり両親にまもちゃんとの付き合いを快諾してもらいたかったのだと、この時ようやく気付く事ができた。きつとまもちゃんも同じ思いだったのだろう。だからこそ、父が納得してくれるまで気長に待つと言ってくれたのだ。小さくても頼れるまもちゃんの背中を見ると、いつの間にかとても大きくなったような気がする。頼りなさそうだと思った初めて口を利いた飲み会の日、まさかこんなに頼れる男性だとは思ひもなかった。私をいつでも大事に思ってくれる彼が、他の誰よりも大好き。だから、どうしても父にまもちゃんのことを知ってもらいたい。そう思った私は、父に向かって口を開いた。

「お父さん、お願いだからまもちゃんをちゃんと知ってください。本当に私を大事にしてくれる……私にとっても大事な人です」

父に自分の気持ちを告げ、畳に三つ指揃えて頭を下げた。今まで親にこんな丁寧なお辞儀なんてしたことなかったけれど、こういう時は自然に頭を下げられるものだと初めて知った。気がつけば頭を下げていた。すると隣に並んでまもちゃんも再び頭を下げた。下げたままの状態で私達の目が合い、お互い微笑み合うと、なんだか私達の気持ちの一つになっているようで嬉しい。この思いが一つになったことで、なんとなく溢れてきた笑みは、頭を上げるまで絶やすことはなかった。同じ気持ちを持った私達なら、これから先だっとうまくやっていけるに違いない。

一方、実の娘と娘の恋人に目の前で土下座をされた父は、あぐりと口を開き、ただひたすらその様子を眺めているだけだった。そんな父の姿を見て、横から口を挟むのは母。母は、テーブルに置かれた冷め切ったお茶に手を伸ばし、ゆっくりと喉に流し込む。そして真っ直ぐ父の方を向き、にこりと微笑んだ。

「……いいじゃありませんか。守さんなら香澄を守ってくださいますよ」

「お前は黙っていなさい」

「あなた、意地を張るのもいい加減になさい。そんなに香澄が選んだ方を信用できないと仰るのですか？　もしそんなこと仰るなら……私はもう、一緒には暮らしていきません」

母の言葉はキツイ。そして表情は言葉とは裏腹ににっこりと微笑みを絶やさぬままだ。そうだった、母はここぞというときこそ、今のようになにこりと微笑んだまま、キツイ言葉を放つ人間なのだ。母の絶やさぬ笑顔の裏側には、少々怖いものが潜んでいることを忘れてはいけない。当然、父は母無しでは生きていけない人なので、その言葉を放った一瞬で強そうに見えた父が途端に小さくなってしまったのだ。

「お、お前……本気か？」

「本気に見えませんか？」

「うう……む」

汗だくの父、涼しい表情でお茶を飲み干す母、そして私達は正座をしたままその様子を窺っていた。父と娘のバトルから、父と母のバトルへと変わっていき、それは母の一方的な勝利で幕を閉じたのだった。

父は観念したのか大きく息を吐き、母の顔を覗き込む。そして、蟻のような小さな声で「ごめん」と謝った。ふふつと笑みを漏らす母を見て、やっぱり父は母には勝てないんだなあと思った瞬間だった。

一方、そんな二人の姿を見ていたまもちゃんも、どこかぼんやりとその光景を眺めている。どうしたのかと思い、彼の顔を覗き込む

と、私のことに気付いたまもちゃんは笑顔を向けた。

「なんか……良いご夫婦だね。羨ましいよ」

「あ……」

その時、まもちゃんのご両親はまもちゃんが幼い頃に離婚してしまったという話を思い出した。幼い頃、まもちゃんの母親は必死でまもちゃんを育てながら仕事をしていたという。きっと両親の仲が悪い状態しか知らないのだろう。まもちゃんの話思い出したら、私の胸が小さくきゅっと痛んだ。俯いてしまった私の頭を優しく撫でるまもちゃんは、黙って私の頭を撫で続けてくれる。優しい手付きで、いつまでも。

18・夫婦（後書き）

長く更新をお休みして申し訳ありませんでした。

詳しいことは活動報告に記載してあります。

更新は毎日とはいきませんが、ストック分は毎日更新しようと思います。

日付が変わる頃、更新する予定です。

それから、かなり日経ってしまいましたがweb拍手のお礼を書かせていただきました。お時間があるときにでも、ちらりと覗いてやってください。

19・同居宣言

結局、お見合いの席は台無しになり、結果、両親はまもちゃんと私の仲を認めてくれたが、父はまだ渋々了承したと言いたい様な顔をしている。まあ、父がお膳立てしてくれたお見合いの席を台無しにしたのだから仕方ないと言えば仕方ないけれど、それでもまもちゃんとの仲を認めてくれたことは素直に嬉しかった。またまもちゃんと一緒に過ごせる、私はそう思ったけれど、立ち去っていった藤野さんの言葉を思い出したら、少しだけ怖くなってしまった。

『諦めが悪い』

こういう残して立ち去った藤野さん、これから先、私の前に現れるのだろうか。それは怖いというより、どうしたら諦めてくれるのだろうか、こればかり考えてしまう。まもちゃんと別れるなんて絶対に嫌だし、これから平穏な毎日を過ごしたい。東京に戻ればいつもの日常になるのだろうか。言いようのない不安が胸に渦巻く中、横からそつとまもちゃんの掌が私の手を包み込んだ。

「……藤野さんだっけ？ 彼がこれからどう出てくるか、怖い？」

「う、ん……正直言うと、ちょっとだけ怖いかな」

「香澄、僕に提案があるんだけど」

「ん？ 何か良い案があるなら教えて」

「じゃあ、ご両親に了承してもらわないとね」

にっこりと微笑んで私を和ますまもちゃんだけど、一体何を了承してもらおうというのだろうか。私は訳が分からないまま、まもちゃんの笑顔を見つめていた。そしてまもちゃんが両親に向かって再び正座をして、口を開いた。

「あの、実は一つお願いがあります」

まもちゃんが真剣な表情で両親に切り出すと、父は怪訝そうな表情でまもちゃんをギロリと睨みつけた。母は相変わらずにこにこと笑みを浮かべていたが、まもちゃんがこれから話そうとしていることに、しっかり耳を傾けているようだ。睨みつける父に怯むことなく、まもちゃんはまたまた私の想像を超えるようなことを言い出したのだ。

「香澄さんとの同居を許してもらえませんか？」

再び訪れた沈黙。父は目を見開き、冷静な母までも驚いているようだ。何より一番驚いたのは私。そんな、同居って……一緒に住むってことだね！？ そんな話は今まで一度だってしたことなかったのに、ここにきて突然なぜそんな話になったのか、私にはさっぱりわからない。けれど、今までの話を考えると、まもちゃんは私を自分の近くに置くことで、私を守ろうと考えているのかもしれないと、そう思った。言いようのない不安を抱えながらの一人暮らしは、とても不安だ。でもまもちゃんの傍にいれば、まもちゃんもいるし、樹くんや翠ちゃんもいる。一人でいるより沢山いたほうが私が安心できる、そう思ってくれたのだろうか。そうだとしたら、こんなに心強いことはない。しかし父が首を縦に振る筈もなく、まもちゃんの言葉はバツサリと切り捨てられた。

「嫁入り前の娘を、男と同居させるなんて絶対に認めん！」

「お父さん、僕の家は僕の他にも弟と妹が同居しています。だから香澄さんが一人で暮らすよりも僕の家族と一緒に住むほうが、ご両親も安心ではないでしょうか」

「弟と妹と住んでいるとは……ご両親はどうしたのかね」

「うちの両親は、父の仕事が海外を拠点にしていますので……母は物

書きですから海外で執筆しております」

「すると弟と妹の面倒は君が……？」

「そうですね。僕がずっと面倒を見てます」

まもちゃんが家族のことを語ると、今までまもちゃんを敵視していた父が、突然態度を変えた。それはまるで掌を返したように、まもちゃんを褒めちぎり始めたのだ。

まもちゃんが自分の兄妹の面倒を見ていると知った父は、まもちゃんをどうやら見直したようだ。ただの漫画ばかり描いてるものだと思われていたのだろうか。漫画家という職業を立派に全うしながらも、しっかり兄妹の面倒は見るまもちゃん。それはまもちゃんが幼い頃から一人でいることが多く、家族団欒する機会がとても少なかったから、樹くんや翠ちゃんには寂しい思いをさせたくなくて、必死に親のような存在になろうと頑張ってきたから。そんな優しいまもちゃんだからこそ、樹くんも翠ちゃんも心を開き、まるで本当の兄妹のようになれたのだと思う。

私の父がまもちゃんのことを見直してくれたこと、まもちゃんが私と住みたいと言ってくれた事で、今日は私にとってもまもちゃんにとっても、とても嬉しい日になったに違いない。頑なに首を縦に振らなかった父も、まもちゃんという人柄を知ってから、ようやく同居することに賛成してくれた。

「香澄をどうかよろしく」

「了承してくださって、ありがとうございます。香澄さん、大切にお預かりいたします」

まもちゃんはいつだって誠実に相手と向き合ってくれる。そんなところが私はとても大好きだ。

こうして父に認められた私とまもちゃんの同居生活は、ついにスタートすることになったのだ。

20・左手薬指

「なんで俺まで……」

ぶつくさ文句を言いつつも、荷下ろしを手伝ってくれる樹くん。実は今日、早速私はまもちゃんの家に移ってきたのだ。一人暮らしの荷物は結構多く、いらぬものはリサイクル店に売ったり、欲しいと言っていた友人に家具をあげたりして、何とか渋沢家の一室に私の荷物は納まった。そんなわけで、晴れて渋沢家の一員になった私は、改めてこの家をぐるっと見回す。今日からここが、私の家だ。

荷物を全て部屋に入れ終わったところで、皆がリビングに降り、休憩をすることになった。そこでまもちゃん、樹くん、翠ちゃんの三人に向かって私は深々と頭を下げる。やっぱり親しき仲にも礼儀あり、ということ、きちんと挨拶をしておこうと思ったのだ。

「皆さん、今日からお世話になります。どうぞよろしく願います！」

声を張り上げてそう言うと、その言葉に快く返事をしてくれたのは、翠ちゃんだった。

「香澄ちゃんが来てくれて、凄く嬉しいよ！」

「翠ちゃん、これからよろしくね」

「お姉ちゃんができたみたいで、嬉しいな」

にこりと笑った翠ちゃんに、内心ホッとしていた。渋沢家の秩序を乱すようなことをしないでくれ、そう言われたらどうしようかと

思っていたから。翠ちゃんは優しい子なのでそんなことは言わないとは思っていたけれど、もしもそう言われてしまったら…….と思うたらやっぱり緊張していたのだ。でも、こうして気持ちよく受け入れてもらえてよかった！　なんて思ったのも束の間、私の隣にずいといと出てきた樹くんが、ふんつと鼻を鳴らしながら私を横目で見つめている。

「ちゃんと家事とか掃除しろよ？でもお前不器用そうだからなあ」

「ご飯ならよく作ってたでしょ？
掃除は、まもちゃんほど得意で
はないけど頑張るもん」

「本当に？　じゃあ俺の分も掃除よろしく」

へらつと笑いながら私の肩に肘をつき、けらけらと笑う樹くんはこの後すぐに、まもちゃんによる鉄槌が下された。

「樹、調子に乗るな！ 自分の分担当はしっかりやる、渋沢家の方針は変わらないよ」

「……ちえつ、兄ちゃんは香澄に甘くしそうだから、俺からしつかり伝えてるだけなのに」

「香澄はちゃんとやってくれる。僕はわかってるから」

「はいはい、ごちそうさま。俺はこれから友達と遊ぶから行くわ」

ひらひらと手を振りながらリビングを出て行く樹くんの後姿を追いかけて、私は玄関まで見送りに行った。樹くんはこうして憎まれ口を叩いたりするけれど、本当はとても優しいことはまもちちゃんと付き合う前からよく知っている。お兄ちゃん大好きっ子な樹くんは、いくつになってもまもちちゃんを慕っている可愛い弟だ。私にとっても可愛い義弟になる日も、そう遠くない未来来るのかもしれない……なんて。

ぷくくつと笑いを堪えていると、私の額がデコピンされた。

「痛い！」

「何ほくそ笑んでるんだ。気持ち悪いから。まあ……その、これからよろしく」

「うん。よろしくね、樹くん。なんなら私のことお姉さんって呼んでもいいよ？」

「調子に乗ってるのは俺じゃなくて、お前だな。まあいや。行ってくる」

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

靴を履きながら玄関を出て行く樹くんを見送ると、私の後ろから翠ちゃんも駆け足で玄関にやってきた。そして急いで靴を履き、私の方に振り向いて小刻みに手を振る。

「じゃあ私も、行ってきます」

「え！？ 翠ちゃんもお出かけなの？」

「うん、彼氏とデートなの」

ふにやりと顔をほころばせて、頬を紅潮させながら私に彼氏ができたことを告げた翠ちゃんに、慌てた声が降り注ぐ。それは勿論、妹思いの……兄二人だ。出て行ったはずの樹くんはいつのまにか戻っていて、玄関のドアを開けて驚いた表情で翠ちゃんを見つめている。樹くんの耳は、一体どんな構造なの？ 聞こえるはずはないのに、彼には聞こえたいらしい。そして慌しくリビングから出てきたまもちゃんも、驚きの表情で翠ちゃんを見つめていた。

「みみみ翠？ 彼氏って……ホントに？」

「お兄ちゃんったら、当たり前でしょ？ もう私だって彼氏くらいいるに決まってるじゃん」

「翠！ 俺は聞いてないぞ」

「樹兄に言うとは五月蠅いんだもん。ほら、もう行くよ！　じゃあ行つてきます！」

「二人とも気をつけて行けよ」

賑やかな二人がいなくなり、渋谷家は私とまもちゃんの二人きりになってしまった。今日は賑やかな一日になると思っていたのに、思いがけず二人きりになって少しだけ緊張していた。するとまもちゃんが、くすつと笑って私をソファアへと手招きしている。とことことソファアへ向かい、まもちゃんの隣に座ると、私の掌に小さな箱がポンと置かれた。

「開けてみて」

「なんだろう？」

ドキドキとわくわくが胸いっぱい広がっていく。その箱のサイズは、掌のサイズ。それって、それって……女の子なら貰って喜ばない人はいないんじゃないかなあって思えるものではないだろうか。箱を彩るように結ばれたピンクのリボンを解き、箱の蓋をゆっくり開けた。そこには勿論、期待通りのものが収められていたのだ。

「ずっと前から買ってあったんだ。……僕の家族になって欲しいって思ったのは、君だけだから」

私の掌の中にある箱からまもちゃんがソレを取り上げて、私の左手を少し高めに掲げる。そして約束の左手の薬指には、煌々と輝くダイヤモンドの指輪がはめ込まれた。いつ私の指のサイズを知ったのかはわからないけれど、その指輪は私にぴったりだった。きらきらと幸せ色を放つダイヤモンドリングが、私とまもちゃんの将来を約束しているようだ。

「ずっと傍にいてね」

まもちゃんが指輪に唇を落とし、私を見上げる。

そのまま私とまもちゃんはぎゅっと抱き合い、二人の未来を誓い合うようにキスをした。そしてそのまま……熱い夜を迎えたのだった。

21・朝はてんやわんや

朝目覚めると、いつもとは違う天井が目に入った。そう、昨日から私はここ、渋谷家に引っ越して来たのだ。昨日越してきたばかりなのに、部屋の中はすっかり片付いている。それは昨日、まもちゃんや樹くん、翠ちゃんが一所懸命手伝ってくれたからだ。三人には感謝している。しかし、手伝ってくれたとはいえ、やっぱり引越したというのは面倒な作業が多く、昨日はへとへとになってしまった。まあ、引越だけが原因ではないような気もするけど……。なんとなく疲れが残っている体に喝を入れるため、腕を大きく上にあげて体をぐっと伸ばす。すると、それだけで体の疲れが少なくなったような気がする。

「うん、いい感じだ」

まだベッドに寝そべったままの状態で、ぽつりと独り言を漏らすと、私しかないはずの部屋からもう一つの声が飛んできた。

「いい感じならそろそろ起きてね。メシだよ」

突然の男性の声に私は身を硬くした。恐る恐る横を向くと、私の横にしゃがんだ状態で寝顔を見ている樹くんの姿があった。ベッドに肘を突き、私と目が合うとにっこりさわやかな笑みを浮かべ、私の頬を人差し指でぶすりと刺す。勿論、その後の私の行動は、以前まもちゃんにお風呂で鉢合わせした時と同じように、大きな声で叫び声を上げたのだった。その叫び声は渋谷家全体に響き渡るほどの大声で、当然まもちゃんの耳にも届いたようだ。隣にいる樹くんは、両手で耳を塞いで目をぎゅっと瞑っている。そりゃこんなに近い位

置で叫ばれたら、耳の一つも塞がなければ鼓膜が破れてしまうかもしれない。申し訳ないという気持ちと、女性が寝ている部屋に無断で侵入した罰だ、という二つの気持ちがあつたけど、どちらかというと勝手にこの部屋に入ってきた樹くんが悪い、そんな結論が私の中で出ていたので、申し訳ないという気持ちはどこかにいつてしまった。そして程なくして、どたどたとやかましい音が近づいてきて、ついに部屋の扉が開かれた！

「香澄！？　ななな何があつたの！？」

「ま、まもちゃんまで！　もう！　着替えてないんだから二人とも出て行って！」

パジャマ姿の私に気付いたまもちゃんが、頬を染めながら慌てて部屋を出て行った。その時、樹くんを忘れずに連れて行くところは流石だと思う。二人が部屋から出て行ったことを確認してから、私はベッドから起き上がって着替えをした。とりあえず、今日は会社だ。会社用のシンプルなカットソーとベージュのスーツを選んで着替えた。カットソーから覗く鎖骨の辺りが寂しいので、小さなダイヤモンドヘッドのゴールドネックレスをつけることにする。これで少しは寂しくないかな？　左手の薬指には勿論、まもちゃんから貰った大切な指輪が幸せオーラを放っている。思わずニヤケそうな顔を抑えながら、私はリビングへと階段を下りていったのだ。

「おはよう」

リビングの扉を開けて朝の挨拶をすると、ソファーにはふて腐れている樹くんがいた。それと同時に、味噌汁のいい匂いが鼻をくすぐる。どうやらまもちゃんが、朝ごはんを用意してくれたらしい。

「香澄、座って？　朝ごはんできたよ」

「うわぁ、すごい美味しそう!」

「うちは朝は大体和食なんだけど……よかったかな」

「和食好きだよ。ありがとうまもちゃん、いただきます」

両手を合わせて箸を手にするが、何から食べたらいいいのか迷ってしまう。箸をあちこちに向けてはうろうろしていると、まもちゃんがくすつと笑いながら私を嗜めた。

「こら。迷い箸はマナー違反だよ」

まもちゃんは、ちっとも怖くない声で私を注意した。それに対して私は謝り、まずはこのいい匂いがするお味噌汁からいただくことにした。ほんわりと立ち上る湯気と共に、お味噌と出汁の香りに包まれて、なんだかとても懐かしい気持ちが甦る。それはまだ、私の実家で暮らしていた頃のことだ。実家も和食が主だったので、こうしてお味噌汁の香りを楽しみながら飲んだものだ。だからこんなに懐かしい気持ちになるのかもしれない。まもちゃんと笑い合いながら朝食を摂っていたが、突然後ろから恨みがましい声が聞こえてきた。

「……俺は放置かよ」

すっかりいじけてしまった樹くんがのそのそと食卓につくと、まもちゃんが私の顔を見て、思い出したように「あ」と呟く。そして、樹くんのご飯をよそって食卓に戻ってから、ゆっくりと話し出した。

「朝は急に部屋に入ってごめんね。樹にもしつかり言って聞かせたから安心してね」

「言っとくけど、あんな色気のねえ寝顔なんか見ても嬉しくもなるともないからな!」

相変わらず口が悪い樹くん。彼は本当に懲りないというか何というか……。当然、こんな暴言を吐いたのだから、彼の頭上から拳が降ってきたのは当たり前というか。先程部屋に勝手に入った時も、まもちゃんに拳骨をくらったらしい。そして再び同じ場所へ落とされた拳骨。樹くんがその痛みを必死で堪えている姿が、悪いけど笑えた。こうして食卓は笑いで包まれて、朝食はどんどん進んでいく。今日は翠ちゃんがいないのが残念だったけど、これからはこうして誰かと一緒にご飯を食べる事ができるのだ。それがなんだかとても嬉しくて、幸せなことのよう気がする。普段は忘れがちだけど、一人でご飯を食べるより、笑いながら楽しくご飯を食べられることってとても幸せなことだと、しみじみ思う。

「美味しい？」

まもちゃんに顔を覗き込まれ、くりっとした黒曜石のような瞳を向けられると、朝から心臓に悪い。でも、まもちゃんがちょっとドキドキしながら私の答えを待っているの、私は満面の笑みを彼に向けて大きな声で彼に言う。

「凄く美味しいよ！」

それだけでなく、まもちゃんはとても満足気に微笑んだ。そして食卓にまた笑顔が戻る。

二人きりもいいけれど、こんな風に賑やかな日常も……。悪くない、そう思った。

「さて、そろそろ会社行かないと」

食事を済ませ歯を磨き、メイクを仕上げてリビングのソファ―

から立ち上がった。まもちゃんは片付けを済ませ、洗濯機を回している。樹くんは朝のニュースを観ながらコーヒを飲んでいた。出掛けるのは私だけだと思ったけれど、のっそりと樹くんがソファから立ち上がり、部屋の隅に置いてあったバッグを手を取った。

「俺もガッコー行くから」

ちらっと横目で私を見て、玄関へと一人で向かう樹くんの後ろ姿を、私は追いかけた。スーツのジャケットを羽織り、ベージュのスーツに合わせたヒールを履く。そして玄関に掛けられている鏡を覗き込んで、最後の仕上げに身だしなみを整える。私が鏡を見ながらヘアスタイルを整えていると、私の背後で同じように鏡を覗き込んで、同じくヘアスタイルを整える樹くんの姿が見えた。お洒落っ子な樹くんも、毎朝念入りに自分の姿をチェックしているらしい。そしてそんな私達の姿を見て、いつのまにか見送りに出てきてくれたまもちゃんが、くすつと笑う。

「なんで二人とも同じ行動してるの。なんか傍から見ると面白いよ」

くすくすと微笑んでいるまもちゃんに対して、私もつい顔をほころぼせる。でも樹くんはニヤリと笑って、私を後ろからぎゅっと抱きしめた。突然抱きしめられて、私は驚きのあまり声を出せずにいた。そして目の前にいるまもちゃんの表情が、ぴしっと固まってしまっている。当の樹くんは特に気にすることもなく、そして悪びれることなくへらつと冗談を言う。

「俺と香澄、案外兄ちゃんより合ってるのかもなーなんて」

はっはっは、と笑いながらするりと私から腕を離し、玄関の扉を

開ける樹くん。当然だけど、まもちゃんの様子には気付いていないようだ。樹くんにしてみればこれは冗談の一環に過ぎないのだろうけれど、まもちゃんは冗談でも真剣に受け取ってしまうところがある。冗談を受け入れて本気にすると、まもちゃんはもう、冷静ではいられなくなるだろう。まもちゃんの様子をそつと窺うと、真っ青になりショックから立ち直れないまま、そこに立ち尽くしている。

ああ、まもちゃん。それは冗談なのよ！

心の中で叫ばずにはいられない、一日の始まりだった。

22・夢を語る男

青ざめたまもちゃんを残して出社した私は、駅までの道のりで何度樹くんの背中を叩いたかわからない。通勤用のバッグで背中をばしばし叩きながら歩いていく私達の姿は、通行人から見たら酷く滑稽な姿を晒していただろう。だって気がつけば、じろじろと怪しげな目で見られていたのだから。中高生くらいの男女なら、こんなじやれあいほは微笑ましく皆の目に映ったかもしれないけれど、社会人と大学院生のじゃれあいほは、ただの男女の喧嘩にしか見えない。こうして私は周囲の視線に気付いてから、ようやく通勤バッグで樹くんを殴りつけるのをやめたのだった。

「なんでそんなに凶暴なんだよ、お前は……」

結構痛かったのだろう。樹くんは薄手のシャツを羽織っているだけなので、きつとバッグで殴られた衝撃がダイレクトに伝わったに違いない。でもいいのだ。まもちゃんにショックを与えた罰なのだから。

「樹くんが悪いんだからね？　まもちゃんに変な冗談言わないで欲しいなあ」

「兄ちゃんが信じすぎるのが悪いんじゃないか」

「でも、そういうまもちゃんが樹くんは好きなんでしょう？」

ちらりと上目遣いで樹くんを見つめると、どうやら言葉に詰まってしまったようだ。まもちゃんのことが高好きな樹くんは、そのことを他の人から指摘されると何も言えなくなってしまう。ただ、返事として顔だけがみるみる赤くなっていくのだが……。

照れ屋さんところは、まもちゃんとちょっと似てる。血の繋がりはなくとも毎日一緒に暮らしていれば、血が繋がっていても遠く離れて暮らしている兄弟よりも、よっぽど兄弟らしいかもしれない。そう思わせるくらい樹くんはまもちゃんの弟なんだなあと、強く思わせるほど何か似ている。もしかしたら、本人はそのことに気付いていないかもしれないけど。一步前を歩く樹くんは照れているせいだろうか、ちらりと髪の毛の隙間から覗く耳朶が赤く染まっている。こういうところも本当にそっくりだ。思わず一人、くすっと笑ってしまったのだった。

駅までの道のりを進み、最寄り駅の改札を二人で通る。樹くんとは同じ電車に乗ることになった。私が勤めている会社より、もう少し先の駅で降りるという樹くん。電車内は人の熱気でむんむんしている上、酷いラッシュに巻き込まれてしまった私達。夏が始まり、暑さはもう最高潮！ という時の電車は、冷房なんて全く効いていない。数年前から電車の中は『弱冷房車』なるものばかりが多くなり、ガンガン冷房が効いているものがなくなってしまった。確かに効き過ぎる冷房は、ただひたすら寒さばかりを覚えるだけだし、地球温暖化の影響も大きい。CO₂の排出を抑えるためにこの企業も必死だというのに、必死になりすぎて暑くなり、冷房の設定温度を低くしてしまったら本末転倒というものだろう。そう、頭では納得しているけれど……これは酷すぎる！

「香澄ちゃん、大丈夫？」

「……ん、なんとか」

「あんたが潰されないようになんとかするけど、おっぱいさわっちゃったらごめんね？」

「大丈夫よ。ちゃんとまもちゃんに報告するから」

もう樹くんの冗談には慣れっこだ。樹くんは冗談を言う時、必ずといっていいほど同じ笑顔を向ける。だから冗談も本気も私にはお

見通しだ。何年も一緒に住んでいても未だ樹くんの表情に気付かないのは、まもちゃん唯一人だけ。それはまもちゃんが樹くんを、何時いかなる時も信じているからかもしれない。

樹くんの冗談もほどほどに、気がつけば会社の最寄り駅に電車が停車した。すると樹くんが「あ」と、一声あげて、人の波に押されながら下車している私に何か叫んでいるようだ。

「何？ 樹くん、聞こえないよ」

けれど、私の声は駅員のアナウンスと発車のお知らせの音楽、おびただしい数の乗客の声によってかき消されてしまったのだ。そして電車の扉が閉まり、口をパクパクさせたままの樹くんを電車が運んでいってしまった。ああ、何言ってるか全然わからなかった。まあ、何か大事なことからメールが送られてくるに違いはない、それまでは放っておこう。樹くんのことは諦めて、私はこの人混みの中に紛れて、混雑しているホームを抜け出したのだった。

駅から徒歩で会社に向かうと、後方からなんだかご機嫌な声が聞こえてきた。

「おはよう、香澄ちゃん」

「あ、内海先輩。おはようございます」

「聞いたよ、聞いたよ？ 今、渋谷の家に住んでるんだって？」

情報掴むの早っ！ ということは、まもちゃんが内海先輩にいつのまにか話したということか。どれだけこの二人、仲良くなってるんだろう。内海先輩がマメなのか、まもちゃんが真面目なのか、もうどちらでもよくなってきた。私達のこと何でも内海先輩に筒抜けになってしまうのかと思ったら、途端に頭が痛くなる。先が心配だわ、と溜息を吐きながら頭を押さえる押さえる私の隣で、内海先輩はうきうきした口調で話をペラペラと始めてしまった。

「いやあ、もうすぐ会えるんだよね。早く彼女に会いたいなあ」

彼女？ ああ、まもちゃんの女装版の姿のことかあ。死んでもあれがまもちゃんだなんて言えない。内海先輩はもう、女装版のまもちゃんの姿に夢中で、しかも恋してしまっている。ちなみに、まもちゃんの漫画家の名前は『しふ洩 かえて楓』という。洩沢という名字から一文字とり、楓というのは男か女かわからない、どちらにも適用する名前だから使ったという。ペンネームの由来など、何一つない。

「実はさ、俺、楓先生が出している出版社に転職しようと思ってるんだ」

困ります。そんなキラキラと少年のような瞳で語られると、何も言えなくなってしまう。出版社で働けば、何か接点が生まれるのではないかと、内海先輩は大きな希望を胸に抱きながら私に語るのだった。

先輩。その恋、叶いませんで……早く忘れてくださいね。

23・ご指名

内海先輩の報われない恋の話を聞きながら会社に入ると、先程までの恋する乙女のような表情をスッと消し、会社仕様の表情に変化する。元々はカッコイイ人なので、女子社員からはとてもモテる内海先輩だが、私にはもう、内海先輩がカッコよく映ることはない。憧れてはいたけれど、彼の変な一面も知っているせいか、彼の周りできやあきやあと黄色い声をあげている女性の気持ちが変わらなくなってしまうらしい。どうにかして内海先輩という人の、本当の姿を周りの女性に教えてあげたい気持ちになるが、彼女達にとってそれが幸せなことなのかはわからない。要するに、放っておこう。そんな結果に落ち着いた。

午前中、パソコンとずっと睨めっこ状態が続き目がしょぼしょぼしてきたので、気分転換に席を立ち、自動販売機でコーヒーをかうことにした。デスクの引き出しにしまった財布を取り出し、私は席を立つ。すると、ちょうど会議から戻ってきた部長が部署内に入る時、私と思い切りぶつかってしまった。

「すまん。大丈夫か？ ……と、前園。ちようどよかった。今からデスクに来てほしい」

「今、ですか？」

「そうだ。至急聞きたい事がある」

部長があまりにも真剣な表情で言うので、内心首を傾げながらも部長の後ろを追うことにしたのだ。コーヒーを飲めなかったのはちよつと残念だけど、なぜか部長の顔色が優れないような気がして、コーヒーを飲みたいだなんて言い出せなくなってしまったのだ。そして私は、部長と共に部長室に入室し、扉をゆっくりと閉じたのだ。

った。

こじんまりとした狭い空間の真ん中に鎮座している部長のデスクは、いつも通り綺麗に片付いていて埃一つ見当たらない。意外なところで部長の几帳面さが見えてくる。部長室の壁面にあるブラインドを全て下げ、部長がゆっくりとこちらを振り向く。そして静かに口を開き始めた。

「実は、我が社にとって大きな契約の話が舞い込んできたんだ。この契約一つで、我が社の業績は前年よりもはるかに上回る間違いなしと言っても過言ではないくらい、大きな契約なんだが」

「はあ……要するに、会社にとってなんとしても契約を結びたいということですね？」

「そうなんだ。それでだ、その契約相手の条件が……その、お前を指名してるんだ」

「私ですか。……え！？　ななななんで私なんですか！？」

「上層部も首を捻ってるんだよ。お前、藤野社長と知り合いなのか？」

「社長の知り合いなんて、え？　今、藤野社長と仰いましたか？」
「ああ」

藤野社長って、もしかしてこの前のお見合いの相手の藤野さんのことだろうか？　元々、父が勝手に進めて来たお見合い話だったので、私は相手を知ろうとしなかったし、あの時は、どうやってお見合いの席をぶち壊すかしか考えてなかったから、藤野さんの職業や住んでるところなど、細かな情報は全くと言っていいほど聞きもしなかったのだ。

彼について覚えていることは、諦めが悪いと耳元で囁かれたことだけ。あの囁きは、今でも私の耳に残っている。感情もなにも読み取れないくらいので、ぼそりと呟かれた言葉は、恐ろしいくらい私の心を鷲掴みしたのだ。それは私のことをどうしたいという

ものではなく、彼のプライドをズタズタにしまったことへの復讐を誓ったような囁きに聞こえたから。あれから暫く、私の胸は嫌な気持ちでいっぱいだった。せっかく、まもちゃんと一緒に住むことになってから、その嫌な気持ちが無くなってきたというのに、こんな形での気持ちが甦ることになるとは思ひもしなかった。仕事とプライベートは別物のはずなのに、こうして仕事を絡めて私を指名してくるなんて、なんて卑怯なのだろうか。恐怖というよりは、怒りの感情が私の中に静かに渦巻き始めていた。

「部長、藤野さん……いえ。藤野社長は、私にどういったことをお望みなのでしょうか」

「それがな、まあ、うちとしてはこの大きな契約を必ずモノにしたいと思っている。だから逃がさないように、その、まあ、接待をすることになったんだ。その接待の主賓である藤野社長の横で、前園に接待してもらいたいと言っているんだ」

「要するに、お酒を注いだりお話をしたり……ということですか？

私、接待の席はついたことがありますから、細かなことはよくわかりませんが」

「大雑把に言えば、そういうことだ。契約の書類などの交わしは、上役の仕事になるから心配するな。とりあえず前園は、藤野社長のご機嫌を悪くしないように心掛けてほしいんだ」

接待をするのも初めてなのに、相手先の社長、しかも藤野さんのご機嫌をとるために笑顔でお酒を注いだりしなくてはいけないなんて、本当は嫌だ。でも、これは仕事だ。私がここで「嫌だ」と言ったら、もしかしたら最悪の場合、会社にとって大きな契約が白紙に戻ってしまうかもしれないのだ。突然大役を貰ったような気がして、私の胃がキリキリと痛み出す。普通のOLなのに、なぜそんな大役を！

ああ、まもちゃん。私、明日にも胃に穴が空きそうだよ。

24・帰り道にて

結局、部長には「はい、やらせていただきます」としか返事をすることができなかった。あの場で首を横に振ることが、どうしてもできなかったのだ。会社にとって大きな契約、これを自分の返事一つで潰してしまうことを考えたら、あの場ではどうしても首を縦にしか振れないだろう。

「気が重いよ……」

会社からの帰り道、肩を落として大きな溜息を何度も吐く。不思議と、夕日に照らされた私の影すらも、どこか落ち込んでいるように見えてくる。このキリキリと痛む胃も、明日には穴が空いて血を吐くんだわ。なんて考えていたら、余計気が重くなってしまった。まもちゃんの家に帰るまでに、どうにか自分の暗い表情をなんとかしなくてはと思い、楽しいことを色々考えてみたけれど、何を思い出してもこの気分が晴れることはなかったのだ。

最寄り駅につき、まもちゃんの家までの道をとぼとぼと歩く。辺りは帰宅途中の会社員や学生、犬の散歩をしている人、楽しそうな子供の笑い声に包まれていて、どうして自分だけがこんなに暗い気持ちになっっているのだろう、と考えてしまう。子供の無邪気な笑い声を聞いたら、自分もあんなふうに無邪気に笑えるのだろうか？と心配になってしまった。それはまもちゃんの前でも、今度の接待の場でも。失敗は許されない、というプレッシャーと、藤野さんが私にどんなことを言ってくるのだろうかという不安が入り混じっていて、何とも表現しづらい気持ちばかりが私を覆ってくる。ごちゃごちゃと色々考えすぎて、どうやら頭はパンク寸前のようなのだ。そんな時、後ろからぽんっと軽快に肩を叩かれて、私は吃驚しすぎて飛

び跳ねてしまった。

「あら、そんなに吃驚しなくてもいいじゃない。元気？ 香澄ちゃん」

「え、あ！ 誠吾さん、お久しぶりです！」

にっこりと優しい笑みを浮かべながら私の頭を撫でてくれるのは、まもちゃんの実父である誠吾さんだ。あのケーキバイキング以来会っていなかったけれど、誠吾さんの笑顔は相変わらず素敵だ。

それにしても、誠吾さんがこの辺にいてことは、やっぱりまもちゃんに会いに来たのだろうか？ 私は誠吾さんを見上げて、訊いてみることにした。

「誠吾さん、もしかしてまもちゃんに会いに来たんですか？」

「うん。ちょっと守に確認したいことがあってね。守、家にいるかな」

「たぶんいると思います。実は今、私、まもちゃんの家に住んでるんです。だから一緒に行きませんか？」

すると誠吾さんは私を見つめて、嬉しそうに笑みを浮かべる。それはいつもの笑顔とは少し違う、子供の成長を喜ぶ「父親」の表情のように思えた。まもちゃんと私を、あたたかく見守ってくれている人がここにいること、それは私にとって、とても嬉しく、心強いものだ。不安に揺らぐ私の気持ちに、ふいに和らぐ瞬間だった。

誠吾さんと話をしながら歩いていると、あっという間にまもちゃんの家に着いていた。中に入ろうと門を開けると、そこで誠吾さんの足はピタリと止まる。私は誠吾さんを見つめ、首を傾げた。どうして入らないのかな？ そんな思いが伝わったのか、誠吾さんは少々躊躇いながらも口を開く。

「実は、守の家に入るのは、初めてなの。緊張してるみたい」

「誠吾さん。せっかくここまで来たのに、帰るなんて言いませんよね？」

「そう……だね。せっかく来たし」

躊躇っている誠吾さんの腕を引き、私はゆっくり中に誘う。すると、誠吾さんの表情が緊張でいっぱいになっていることに気付き、私はわざと大きな声で誠吾さんに声をかけた。

「大丈夫ですってば！ 私と一緒になら、少しは緊張も解れませんかね？」

大袈裟なほど大きな声で、呆れるほどの笑顔を浮かべると、誠吾さんの緊張が少しずつ解けてきたのか、本来の笑顔を取り戻しつつあった。

実の父と息子といえど、誠吾さんはまもちゃんとまもちゃんのお母さんを捨てた人だ。誠吾さん達の間は何があったのかはわからないけれど、まもちゃんはお母さんの苦しむ姿を見て育ってきた。だからこそ、誠吾さんと距離をとっていたのだろう。それは誠吾さんと同じで、過去を振り返るたびに、その胸を痛めていたのかもしれない。だからこそ、まもちゃんの様子が気になっていたのに会いもせず、こっそりと様子を見るだけに留めていたのだろう。お互い少しずつ歩み寄ったとはいえ、どこか壁を作っているのはわかっている。だからこんなに誠吾さんは緊張しているのだろう。だったら私は、その邪魔つけない壁を取っ払ってあげたい。そう思ったら、誠吾さんの腕を引いて、玄関の扉を開けていた。

「ただいま……て、うわっ！」

玄関の扉を開けてすぐ、目の前にはなんだか複雑な格好をしたま

もちゃんの姿があつた。まもちゃんの頭には長毛のウィッグが乗つ
かつており、顔には以前のような瓶底眼鏡が掛けられている。格好
はいつも通り、長袖のシャツにジーンズという姿だが異様な頭部を
見て、私と誠吾さんは訝しげにまもちゃんを見つめていた。

一体まもちゃんに、何があつたというの？

25・話すことから始めよう

「まもちゃん？ ど、どうしたの。その格好」

「しっ！」

人差し指を口の前でピンと立て、ちらりと二階の様子を窺っている。そして私と誠吾さんを家に上げ、リビングへと押し込むまもちゃん。リビングの扉を閉めて、まもちゃんがほっと一息つきながら、ウィッグを取り外したのだった。

「はあ……。ひとまずお帰り、香澄。なんで父さんが一緒なのかはわからないけど、とりあえず僕の話の先に聞いてほしい」

「うん」

「実は、担当さんからアシスタントを回されてきてね。翠や樹だけだと追いつかないほど仕事が増えたから、どうしてもアシスタントを雇わなくちゃならなくなったんだ」

確かに。最近、翠ちゃんも樹くんも忙しくて、まもちゃんの仕事を手伝えていない。私という会社もあるし、まもちゃんの仕事にはノータッチなのでお手伝いもできない。だから担当さんがアシスタントを手回しするのもわかる。けれど、まもちゃんの漫画家としての顔は「女性」だ。男性ということを隠して漫画家として仕事をしているのに、アシスタントさんにバレてしまっただけは意味がない。そこでこのウィッグというわけか。

「アシスタントさんの前では、女性として過ごすことにしたんだね？」

「まあね。すぐく肩が凝るよ、ホントに」

まあ、まもちゃんの普段の声ならきっと大丈夫だろう。普通の男性より少し声は高めのまもちゃんだ、きっと大丈夫。問題はアシスタントさんの前で、ずっと女装していなければいけないということだ。それは、まもちゃんにとって毎日が大変になるに違いない。これならいっそのこと『渋楓は本当は男です』と、世間に公表してしまったほうが良いのではないかと思ってしまう。頑なにまもちゃんが自分の正体を隠そうとするのは何故だろう。やっぱり、お母さんの漫画嫌いが原因なのだろうか。でも、お母さんに一生秘密にすることなんて、きっと出来ないと思う。だからこれは、まもちゃんにとってのチャンスなんじゃないかと思い、私の口は勝手に動き出していた。

「ねえ、まもちゃん。いつそのこと、ちゃんと自分のことを表に出したらどうかなあ」

「どういうこと？」

「……まもちゃんが、一生女性として漫画家を続けるより、今、公表したほうがいいんじゃないかって思って」

「前にも言ったけど、僕の母親は大の漫画嫌いなんだ。それに、一度女性として表に出ているのに、今変更なんてできない」

まもちゃんは、結構頑固なほうだと思う。でも、時には素直になることも大事なのに。

まもちゃんは忘れていると思うけど、隣には誠吾さんがいる。誠吾さんは、まもちゃんが漫画を描いているなんて知らないはずだ。それなのに、この話題を出しても隠そうともしないなんて、心に余裕がない証拠だ。

しばらく沈黙が続くりビングに、飛び切り明るい声が響いた。

「守ったら、やっぱり漫画家だったのね！ 父さん、自慢だわ！」

「あっ……！　い、いや、それはその」

誠吾さんに言われて初めて気付いたまもちゃんは、しどろもどろになってしまった。

まもちゃん、誠吾さんの言葉をちゃんと聞いていた？　誠吾さんはまもちゃんに「自慢」と言ったことに、気付いているだろうか。しかし、まもちゃんは動揺するばかりで、誠吾さんの言葉は届いていないようだった。

「守。お母さんにきちんと話しなさい。それができないなら、漫画家なんて辞めたほうがいい」

誠吾さんの真面目な顔と突然低くなった声のトーンに、まもちゃんは一瞬、グツと詰まらせた。いつものちゃらちゃらした感じは全くなく、今の誠吾さんはまもちゃんの父親としての顔をしている。そして誠吾さんが言っていることは、尤もだと思う。ちゃんと隠さず、素直に自分の夢であった漫画家になったと、お母さんに伝えてほしい。全てはそこから始めるべきなんだと、改めて思った。

まもちゃんが頑なに自分の正体を明かさないのは、やっぱりお母さんのためだったのだ。自分を大事に女で一つで育ててくれた母親を、これ以上苦しめたくなくて、悲しい顔をさせたくなくて吐きたくもない嘘を吐く。それは、まもちゃんの精一杯の優しさから始まった嘘だった。

「まもちゃん。誠吾さんの言いたいこと、わかる気がする」

「香澄まで、そんなこと言うの？」

「だって、まもちゃんを大事に思っているお母さんが、まもちゃんが夢を叶えたことを喜ばないわけないもん。少なくとも、私はそう思う」

まもちゃんは目を伏せて、悲しげな表情をしている。きっと自分でもわかってるんだと思った。迷いが生まれて、正しい答えを自分で出せなくなることは、人間なら誰でもあると思う。今だからこそ、まもちゃんは自分に正直になるべきだ。私と誠吾さんができることは、今、少し臆病になっているまもちゃんの背中を、そっと押してあげること。お母さんがどんな答えを出しても、私はいつだってまもちゃんを受け入れる自信がある。だから、まもちゃん。素直になって、お母さんと向き合うところから始めてほしい。世間に性別を偽っていたことを言うか、このまま伏せて過ごすかは後で考えればいい。握手会は迫っているけれど、まずはお母さんと話すことだけを考えてみてほしい。それを伝えようと思ったけれど、まもちゃんはもう、わかってるのだろう。さっきまで伏し目がちだったまもちゃんが、今は真っ直ぐ前を見つめている。

「今度……話してみよう、と思う」

ぽつりと小さな声で呟いたまもちゃんは、まだ少し自信はなさげだけど、今まさに、小さな一歩を踏み出そうとしている。

心の中で『頑張って』と、そっと呟いた。

26・拉致

まもちゃんは、自分の職業を母親に言うことをずっと拒んできたけれど、今日、少しずつ素直に話してみようという気持ちに変化していき、私と誠吾さんは顔を見合わせて微笑んだ。もしかしたら大反対されるかもしれない。でも私は、まもちゃんが立派に仕事していることを知ったら、お母さんは嬉しいのではないかと思う。勿論、断言できるわけではないけれど。まもちゃんのお母さんが、まもちゃんを認めてくれるといいなあと、心から思っていた。

「あ。そうだ」

突然声を上げたまもちゃんが、テーブルの上に置いたウィッグを手に取り、頭にばさっと乗せる。そして慌てて椅子から立ち上がり、慌しく二階へと向かっていく。

「まもちゃん、どうしたの？」

「二階にアシスタントさんいるの、すっかり忘れてた！」

そう言って、ばたばたと二階に上がっていくまもちゃん。私と誠吾さんはその様子を見て、呆気にとられてしまった。お互いポカンと大きな口を開けたまま、まもちゃんの後姿を見送っていた。

アシスタントさん。まもちゃんは一体、私のことをどう説明するつもりだろう？ 樹くんや翠ちゃんは兄妹だから良いとしても、私は一応、まもちゃんの恋人なわけで。それに紹介するより何より、まもちゃんの家でこのまま一緒に暮らしていると、自然に二人の空気が滲み出て、アシスタントさんにバレてしまうのではないか？ そんな心配が私の中に過ぎった。不安に思案中、二階からまもちゃんがアシスタントさんを連れて、リビングに入ってきた。

「えっと、アシスタントさんたちを紹介しておこうかなと思って」
「う、うん」

目の前には、私と同じくらいの年齢の可愛い女の子が一人、そして少々年上のような男性が一人立っている。アシスタントさんは、どうやら二人いるらしい。私はどこかで、アシスタントさんが女の子一人出なくて良かった、と胸を撫で下ろしていた。いくらまもちゃんが女装しているからといっても、こんなに愛らしい女性と一緒に何日も同じ部屋にいるなんて、耐えられない。情けないけど、嫉妬してしまう。もっともっと、自分に自信が持てればいいけれど、それは一生かかっても無理そうな気がする。

一通りアシスタントさんたちの自己紹介が終わると、今度は私が自己紹介をする番になった。しかし、私の自己紹介を横から遮るように明るい声を出したのは、他ならぬ誠吾さんだ。

「私は父親の誠吾です。で、この子は私の可愛い可愛い恋人です」

その発言に、私とまもちゃんは声も出ないほど驚いてしまった。
え？ 何？ それってつまり、私と誠吾さんが恋人同士ということ？

一体誠吾さんが何を企んでそんなことを言っているのか、私には全くわからなかった。そんな私の意思を無視する誠吾さんは、さらに発言を続ける。

「さて、そろそろ帰ろうか？ 私達のお家に」

「え？ え？」

「やだなあ、帰るんだよ。香澄」

言うが早いのか、誠吾さんは私の腕を掴んで立ち上がり、そのまま

手をひらひらと振りながら玄関へと歩いていった。私もその誠吾さんに引きずられるように玄関へ行き、靴を履いて誠吾さんとまもちゃんの家を後にした。ちらりと後ろを振り向くと、まもちゃんの心配そうな瞳の色が私を見てる。私は、その瞳を忘れられないまま、誠吾さんの後ろ姿についていったのだった。

いつのまにか腕を掴んでいた誠吾さんの手が、私の手と繋がれている。大きな掌に包み込まれる私の手から、誠吾さんが男の人だということをはっきり認識できる。普段の言葉遣いは女性のようなだが、包みこむ掌は、まさしく男性のものだ。私は、パツと誠吾さんの手の振り払っていた。まもちゃんの家から駅までの道のりの途中、私は誠吾さんの背中を見ながら立ち止まる。そしてまもちゃんの家の方向を振り向くが、まもちゃんが追いかけてくる気配は、感じられない。私が辛うじて持ってきたものは、まもちゃんから貰った左手のダイヤの指輪と手荷物一つのみで、他の何もかもを置いてきてしまった私は一体どうなってしまうのだろう。

「香澄ちゃん。手荒な真似をして、ごめんなさいね？」

「どうしてあんなこと言ったんですか」

「守が、ちゃんとお母さんに本当のことを話すまで、香澄ちゃんは人質にするつもりだから」

「人質!？」

くすくすと手を口元に当てながら笑う誠吾さんに、私は戸惑いの瞳を向ける。でも、誠吾さんが私を見つめる瞳はとても優しく、柔らかく微笑むその顔を見て、ほんの少しだけホッとした。人質だなんて物騒な言葉を向けられたものだから少々戸惑ってはいたけれど、誠吾さんはそんな言葉とは裏腹に、とても優しさに満ちた笑みを浮かべている。

「嘘を重ねていくうちに、きっと守は耐えられなくなってしまうと

思うの。自分のことより人のことばかり考える子だから、いつか耐え切れなくて壊れてしまう気がしてね。ちょっと厳しいかもしれないけど、身边を綺麗にしてからじゃないと香澄ちゃんを帰す気はないわ」

「……やっぱり誠吾さんは、まもちゃんの『お父さん』ですね」

ふふっと少しだけ笑って私の頭を撫でてくれた誠吾さんの掌から伝わる、まもちゃんへの愛情。それはきつと、どんなに年を重ねても変わらない、誠吾さんの父親としての愛なのだろう。改めて、まもちゃんは愛されているんだなあと感じた瞬間だった。

27・デザイナーズマンション

「ところで誠吾さん」

「何かしら？」

「私、本当に誠吾さんのところに住むことになるんでしょうか？」

「そうよお。今から一緒に帰りましょうね」

確かに、今の私は宿無し状態だ。まもちゃんの家に住むと決めてから、早々に前に住んでいたマンションを解約してしまったし、だからといってまもちゃんの家に住むことになればアシスタントさんの目もある。まもちゃんと友達同士を演じるには無理がある。まもちゃんが目の前にいたら、やっぱりどうしても『女』の顔になってしまうだろう。ホテル住まいにするにはお金がかかりすぎるし……などと考えていたら、やっぱり最終的には誠吾さんのお宅にお世話になるしか答えは見つからなかった。

誠吾さんの家までは電車で駅五つほど。会社まで通うのも大変ではない。だけど、どうしてもどこかで躊躇してしまうのは、女言葉とはいえ誠吾さんは男性だからだ。男性と二人きりで暮らすなんて父が聞いたら、どれほど怒られるだろうか。父が鬼の形相で怒っている姿を想像したら、身震いしてしまった。絶対、バレないようにしないよね。

誠吾さんと電車に乗り、車窓に映る流れ行く景色をぼんやりと眺めていた。通勤時は景色を眺める余裕などはなく、ただひたすらラッシュとの闘いでぼろぼろになって駅に辿り着く。今の時間は、電車内の乗客は疎らで、私も誠吾さんも無言のまま景色を眺めていた。

「着いたわよ」

ぼんやりしていて気付かなかったが、どうやら降りる駅に着いたようで、誠吾さんに手を引かれながらホームに足を下ろした。通り過ぎたことはあったけれど、この駅は初めて降りる駅だ。何処に何があるのかなんてさっぱりわからない。右も左もわからない私と並んで歩く誠吾さんは、色々説明しながらゆっくりと家までの道を歩いてくれた。駅前からは商店街になっていて、その賑やかな商店街を通っていくと、実家を思い出す。実家の近くにもこうして賑やかな商店街があり、町全体が知り合いのように顔を合わせれば挨拶をする。そんな光景を思い浮かべていたら、ちよつとだけ懐かしさを感じた。だからだろうか、この町が自分に合っているような気がしてならない。商店街は八百屋さんやお魚屋さん、お肉屋さんに床屋さんなど商店街にはよくあるお店が並んでいる。そろそろ閉店時間が迫っているのだろう。商店街の人は、みんな店じまいの仕度を始めている。そして時折、誠吾さんの姿を見つけた商店街の人たちが声をかけては、少しずつ色々なものをくれた。みんな笑顔で、誠吾さんも笑顔で、なんだか見ている私まで笑顔になってしまう。人と人との結びつきが、この町にはちゃんとあるようだ。

「こんなにもらっちゃったわ」

「誠吾さんって人気者なんですネ」

「そうなら嬉しいわ」

いっぱい野菜やお肉、そして惣菜などを私と手分けして持ちながら歩く。その姿は他の人から見れば、夫婦に見えたのだろう。実際、商店街の人に「若い奥様ね」なんて何人もの人に言われてしまった。そして誠吾さんは否定もせず、ただ笑うだけ。

……本当に誠吾さんの家に住んでもいいのだろうか。うーん……。商店街を抜けてもうしばらく歩くと、なんだか立派な住宅街に入り、その中でも一際目立つデザインーズマンションが目飛び込んできた。

「うわ、素敵なマンション！ 誠吾さん、私実は、いつかあんなマンションに住んでみたいって思ってるんですよー」

なんて言ったら誠吾さんは、ふふん、と笑う。

「あそこ、私が住んでるところよ」

私は驚いて目を見開いたまま、誠吾さんとマンションを交互に見てしまった。ここが誠吾さんのマンションなのかと思ったら、戸惑いよりもわくわく感で胸がいっぱいになってしまった。デザイナーズマンションの中をみるのは初めてだ。だから内装がどんな風になっているのか、とても楽しみだ。

マンションの前に着くと、当然入り口はオートロックになっていて、部屋番号を押して掌をかざすと入り口の自動ドアが静かに開いた。掌認証のオートロックは初めてだ。私は感嘆の息を漏らしながら、マンションの中へと入っていった。入り口には二十四時間体制で管理人さんが入り口を管理していて、誠吾さんは管理人さんに私を紹介した。掌認証で自動ドアを開けるのに、私の掌は登録されていないので、マンションに一人でも入れるように管理人さんに相談しているらしい。私は誠吾さんの後ろ姿を見ていただけだったが、やがて管理人の男性がこちらに向き、にこりと微笑む。眩しい笑顔を見せてくれる管理人さんは、かなりの男前だ。そして管理人さんが何やら機械のようなものを取り出し、そこに掌をかざすように言われた。言われるままに掌を翳すと、機械が私の掌を読み取り、管理人さんがパソコンを素早く打ち込む。そしてものの一分ほどで、私の掌は登録されたのだった。

「随分簡単なんですネ」

「管理人ですので登録するのは簡単ですよ。一般の方には操作でき

ないように工夫されてますので、不審者などは通れませんからご安心ください」

そして再び眩しい笑顔を向けられて、私はつい、頬を染めてしまう。まもちゃんという人がいながら……うっかりドキドキしてしまったなんて！　自分で自分を怒って、頭をぽかぽかと殴る様は、誠吾さんも管理人さんも呆然と見ているだけだった。いや、むしろ、私の滑稽な行動のせいで、二人は私に声をかけられなかったに違いない。そんな二人の呆然とした様子に気付いた私は、恥ずかしさで思わず背を向けてしまったくらいだ。絶対におかしな女だと思われるに違いない。私の株は、下がりまくってる気がした。

28・王子様を待ちわびて

セキュリティーばっちりのデザイナーズマンションへ足を踏み入れると、私はその内装の豪華さや華やかさに目を奪われてしまった。まるで別世界のようなマンションの内装は、表のコンクリート打ちっぱなしの壁とは違い、木目が美しい壁が暖かみを感じさせる。その木目の美しい壁には様々な絵画が掛けられており、所々に活けられている花々が彩を加えている。エレベーターは二台あり、地下にはなんと、住人専用のプールとジムがあるらしい。噂には聞いた事があったけれど、本当にこの世の中にそんな設備ばっちりのマンションがあるとは。そしてそんなセレブ専用のようなマンションに、自分が住むことになるとは思ってもしなかった。

「屋上にはドッグランもあるのよ」

「へえ！ 凄いですね」

そう。このマンションはペット可のマンションなので、なかなか散歩に行けない人用に、屋上にドッグランがある。ありとあらゆる設備が整っていて、私はなんだかわくわくしてしまうのを押さえきれずに、きよろきよろとマンションの中を見回した。みつともないとは思ったけれど、こんな別世界から目を逸らすなんてもったいない！ 全てが自分には手が届かないような代物ばかりの絵画や応接ソファは、見ているだけでとても心をうきうきさせる。

そうは言っても、ここはマンションのエントランス。まだ誠吾さんのお部屋ではない。エントランスからエレベーターに乗り、誠吾さんの部屋がある七階へと向かう。するとエレベーターの扉が開き、目の前にはセキュリティーのためか、自動ドアがあった。

「もしかして、各階もオートロックになってるんですか？」

「そうなの。防犯システムの嚴重さはハンパないでしょ」

さすが売れっ子だと思った。

誠吾さんはプロのヘアメイクになってから、ぐんぐんとその名前が業界へと知れ渡り、いつしか一流のヘアメイクになったと雑誌で読んだ事がある。でも一流になるのには勿論、代償があった。それは『家族』。離婚して、奥さんともまもちゃんとも離れて、たった一人でこの世界で頑張ってきたのだろうか。それはヘアメイクとして成功したとはいえ、あまりにも悲しい出来事のような気がする。私には、無理だ。

目の前のオートロックを解除してから真っ直ぐ廊下を進み、突き当りの部屋の前で立ち止まると、誠吾さんは鍵を開けて扉を開き、私を中に招き入れた。

「どうぞ。私のお城へようこそ」

目の前に広がるのは、まるでホテルのスイートルームのような部屋。モノトーンを基調とした部屋にはスタイリッシュな家具が並び、天井には豪華絢爛なシャンデリアがその存在感を誇張している。そして、部屋からは都内に溢れる眩い光を見渡せる、広い窓があった。

「うっわぁ！ 凄い綺麗！」

思わず声を上げてしまうほどの景色。宝石を散りばめたような景色に、思わずうっとりしてしまうほどだ。ずっと眺めていても飽きが来ないくらい、私はただ、静かに景色を眺めていたが、やがて誠吾さんの声により、私は現実へと引き戻された。

「香澄ちゃん、ごめんね。実は私、これから海外で仕事なのよ」

「え!?!」

「だからね、この部屋好きに使っていいよ。留守の間よろしくね」

「あ、あの」

「じゃあ、行ってきます!」

こうして、あつという間に誠吾さんは用意していたスーツケースを片手に、部屋から出て行ってしまったのだ。なんというバイタリテイだろうか……さすがに売れっ子は忙しい。

こんな広い部屋にぽつんと一人取り残されてしまった私は、とりあえずまもちゃんに電話することにした。バッグから携帯を取り出すと、そこには不在着信の表示が。勿論、まもちゃんの名前でぎっしり埋めつくされていたのだ。

ああ、心配しているだろうな……。

そう思った私は、まもちゃんに急いで電話をかけた。どうか、繋がりますように。

まもちゃんに電話をかけてからワンコールも経たないうちに、繋がったことにまず驚いた。

『はい! 香澄!?!』

「まもちゃん。ごめん、いっぱい電話してくれてたんだね」

『……だって、あんな突然連れていかれたら心配するに決まってる』

「ごめんね」

『いや、悪いのは父さんだから。父さん、そこにいるの!?!』

「えっと、たった今、仕事に出かけたよ」

『じゃあ香澄一人……』

「うん」

私が「うん」と返事して、しばらく無言が続いた。まもちゃんが何かを考え込んでしまったのか、携帯からはまもちゃんの声が聞こえてこない。なんだかちょっと心配になり、遠慮がちに声を出した。

「ま、まもちゃん？　どうしたの？」

『あ、ごめん。あの、さ……あ、あ、あ』

「あ？」

『会いに行っても、いい？』

　ごによごによと聞き取りにくい声を出すまもちゃんだったけど、それが「会いたい」の言葉だとわかった時、私の顔はゆるゆるとほころんでいく。嬉しさのあまり、ニヤケ顔をとめることができなかった。

　その後、当然ながら私はまもちゃんの問いかけに対して「うん！」と、力いっぱい返事をして、まもちゃんが来るのを待っていた。どうやら、この家の住所は知っているようだ。来たことはない、と言っていたけれど、ちゃんと誠吾さんの住所はアドレス帳に書き留めていたらしい。こういうところで、まもちゃんの几帳面な性格が窺える。

　大きな窓から東京の夜景を見渡しながら、今か今かと、まもちゃんを待ちわびる私。

　「会いたい」気持ちを胸に抱きながら、何度も時計を見ながら彼を待っているのだった。

29・そのままの君でいて

電話から三十分後。部屋の中にインターホンが鳴り響く。

私は慌ててリビングの壁に掛かっている液晶を見ると、そこにはマンションの入り口にいる、息を切らしたまもちゃんの姿が映っていた。どれほど急いで私に会いに来てくれたのだろうか。それは額に浮かぶ汗を見れば、一目瞭然だった。

そのまま、まもちゃんが入れるようにロックを解除して、彼をマンション内に招き入れる。そして玄関の扉を開くと同時に、私はまもちゃんに飛びついた。

「まもちゃん、心配かけてごめんなさい！」

扉が開いたと同時に飛び出したものだから、まもちゃんは私を受け止めきれずに尻もちをついてしまった。その、尻もちをついた状態のまま、私はまもちゃんの首に腕を絡めてぎゅっと強く抱きしめた。すると、まもちゃんも私の背中に手を回し、同じようにぎゅっと抱きしめてくれる。この優しさが、やっぱりまもちゃんなんだなあ、と感じながらしばらく私達は抱き合っていたのだった。

「あの、とにかく中に入れてくれるかな……？」

ちょっと恥ずかしそうにまもちゃんが私にそう言うと、私はふと我にかえり、まもちゃんから体を離れた。別に何日も会っていないかわけでもないのに、なぜかずっと会っていなかったような気がしてしまい、思い切り抱きしめたまま、まもちゃんを堪能していたのだ。

「あ、ごめん。とりあえずじゃあ、中に入ろうか」
「うん、入ろう」

そう言って立ち上がり、お尻をパンパンと叩きながら私とまもちゃん、部屋の中に入っていた。

部屋に入ってからのもちゃんは先程までの私の行動とそっくりで、珍しいものを見るようにきよきよと部屋を見回している。それはそうだろう。こんなに立派な部屋、一般庶民の私達には考えられないほどの豪華さで、思わず見入ってしまうほどだ。そしてやっぱり目についたのは、一際大きな窓。そこから見る景色には、本当に圧倒されてしまう。辺りが程よく暗くなってきたので、窓から見える景色にちらほらと明かりが灯る。その光がどんどん増えていき、やがて幻想的な夜景へと変化していった。

「すごく綺麗だね」

「そうだね。父さん、こんな豪華なところに住んでたんだなあ。住所しか知らなかったから、ここに着いた時は吃驚した」

「私も！ 連れてこられたときは、どこの世界に來たのかと思ったよ」

私もまもちゃんも、完全に庶民丸出しの会話を楽しみ、夜景と共におしゃべりは弾んでいく。しかし次の瞬間、まもちゃんが「あ」と声をあげ、真剣な表情で私の顔を覗き込んだ。

「実は、香澄が父さんに連れて行かれてからすぐに、母さんに電話したんだ」

「え？ 早いね、まもちゃん」

「だって、早く香澄を取り返したかったから」

ストレートな言葉を、照れることなくぶつけてくるまもちゃんに、私の胸は大きく跳ねた。こうして、まもちゃんは時々、私をとっても幸せな気持ちにさせてくれる。本人は自覚していないようだが、何気なくさりと人が喜ぶことを言えるって、本当に凄いなあって思う。いつだってまもちゃんが私を幸せな気持ちにさせてくれる。だから、本当は一刻も早く、まもちゃんの家に帰りたい。でも……。

「まもちゃん。私、ここで待ってるね。まもちゃんがちゃんとお母さんに正直に話せた時は、まもちゃんの家に帰ってもいいんだよね？」

「うん、勿論だよ。でね、来週頭に両親揃って、久しぶりに日本に帰ってくるんだ。滞在期間は短いけど、その時、香澄のこと紹介したいんだ」

「う。き、緊張するなあ」

「大丈夫。そんなに緊張するような相手じゃないよ」

まもちゃんはケラケラと笑っているけど、女にとって彼氏のお母さんというのはなんとなく怖いのだ。お母さんに気に入られなければ結婚も危うくなる、ような気がする。嫁姑問題は主婦向けの番組でしょっちゅう取り上げられているテーマだ。番組を観て嫁姑関係っていうのは、いかに難しいのか思い知ったけれど、気に入ってもらえるのだろうか。不安と緊張が今から押し寄せているというのに、一体当日はどれほど緊張するのだろう。もしかしたら、呂律が回らなくて馬鹿なことを口走ってしまうかもしれない。それとも、何かとんでもない失態を犯してしまうかもしれない。

もしかしたら、の状況ばかりを想像していたら、私の顔色はみるみる青くなっていた。ぐるぐると表情を変える私の姿を見て、まもちゃんがぷつ、と笑いながら優しく頭を撫でてくれる。

「僕が傍にいるからね。そんなに緊張しないでね」

まもちゃんの優しい瞳に見つめられると、変にこわばっていた体からふっ、と力が抜けて、不安でいっぱいだった心に安心感が溢れてくる。

不思議だな。まもちゃんの言葉は、どうしてこんなに安らぐんだろう。

いつもの自分を取り戻した私は、そっとまもちゃんの肩に寄り添って、ゆっくり瞳を閉じた。まもちゃんの体温を感じながら、穏やかな時間を肌で感じ、幸せすぎるこの時間を堪能していた。

「まもちゃん」

「ん？」

「私、良いお嫁さんになるように、頑張るね」

「……頑張らないで、今のままの香澄でいてね。僕は今の香澄が大好きだよ」

ああ。今この瞬間、私の頭の中に、教会の鐘の音が鳴り響いた気がした。

30・まもちゃんのお守り

まもちゃんと二人きりの空間は、いつだって安心する。優しい瞳に見つめられ、甘い囁きで耳をくすぐられながら、一緒に笑顔になれる。その時間がとても嬉しくて、つい、いつまでも一緒にいたい、そう思ってしまう。

しかしそんな甘い空間を、現実へと引き戻す携帯の音楽が鳴り響き、私とまもちゃんは我にかえった。

「僕の携帯、かな」

ジーンズの後ろポケットに入れてある携帯を取り出すと、まもちゃんが着信画面を覗いて眉をひそめた。

「父さんからだ」

父さんとは誠吾さんのことかな？　そういえば誠吾さんは仕事だと言って、部屋を勢いよく飛び出して行ったのだった。私は誠吾さんの番号もアドレスも知らないの、連絡が取れない。この部屋の何を使っているのかわからないまま、不安な日々をすごさなければならぬのかと心配していた。

誠吾さんがまもちゃんに電話をかけ、まもちゃんが通話ボタンを押したと同時に、物凄い声でまもちゃんが誠吾さんを怒鳴りつけた！

「父さん！　何、勝手なことしてるんだ！」

今まで見た事がないくらいまもちゃんが怒っている。それはそれは凄い声で、吃驚しすぎて座っていたソファから転げ落ちたほど

だ。そんな私の姿に気付いたまもちゃんが、手を伸ばし、私をソファーに引き上げてくれた。その時の顔は、少し笑っていたような気がしたが、再び険しい顔に戻ってしまった。

その後、まもちゃんと誠吾さんの会話は続いていたが、はっきり言って私には何を話しているのかわからない。所々は理解できても、よくわからなかった。だからソファーから立ち上がって、誠吾さんの部屋をぶらぶらと見て回ることにした。

玄関から続く廊下を抜けると、今、私とまもちゃんがいるリビングに繋がり、その隣には最新式のシステムキッチンがピカピカの状態でそこにどん、と構えている。キッチンにある冷蔵庫には、いつしまったのかわからないけれど、先程商店街でもらったものがちゃんとしまわれていた。が、しかし、本当に家にいることが少ないんだなあと見てわかるほど、冷蔵庫の中身は空に近かった。ミネラルウォーターや栄養ドリンク、アルコール類とつまみ程度のものしか置いていない。

キッチンがピカピカなのは、殆ど使っていないからなのね。

そう思いながらキッチンの脇を見ると、そこはバスルームに続いているようだ。中を見てみると、ジャグジー風呂に、なんとシャワーブースまでついていた。本当にここは、ホテルじゃないの？　と

思ってしまうほどの豪華さに、頭がくらくらしてしまう。今度はリビングの反対側の部屋に足を進めると、そこはあまりにもシンプルすぎる部屋だった。部屋の真ん中に見た事がないほどの大きなベッドが一つ、ポツンとあるだけで、あとは部屋の隅に観葉植物と大きな水槽があるのみだ。水槽の中には、気持ち良さそうに泳いでいる色とりどりの熱帯魚がたくさんいる。

「わあ、綺麗」

思わず水槽を食い入るように見つめると、魚達は自慢の体を魅せるように目の前を何度も行き来しながら泳いでいく。まるで水族館

のような水槽に、私はいつのまにか引き込まれてしまっていたようだ。

「綺麗だね」

背後で突然声がして、ようやく自分が水槽の中の熱帯魚に夢中になっていたことに気がついた。後ろには電話を終えたまもちゃんが立っていて、腕を組んでにこりと微笑んでいた。

「電話、終わったの？」

「うん。一応五日ほど帰れるらしいから、それまで香澄に熱帯魚の世話を頼みたいらしい」

「え？ ご飯あげるくらいでいいのかな」

「いって言ってたよ。でも、そんなの香澄に頼まなくても、いつも頼んでる業者の人に頼めばいいのに……」

まもちゃんはぶつぶつと文句を言っていたけれど、誠吾さんはまもちゃんの身辺整理をする機会をくれたのだ。それはまもちゃんにもわかってるのだろうけれど、なんとなく納得いかないみたい。

「まもちゃん。多分、私がまもちゃんの家で生活しても、誠吾さんにはバレないと思う。でもね、まもちゃんがちゃんとするまで私はここで生活する。そのほうがきつと、まもちゃんの為でもあるし私の為にもなる気がする」

「香澄」

「ほら。この機会に、会えない時間で愛を確かめるってどう？ なんて」

かなり恥ずかしい台詞に、私は赤面しながらまもちゃんに言った。冗談めかして言わないと、恥ずかしすぎてここからダッシュで逃げ

出してしまいそうだ。会えない時間は寂しいけれど、相手のことを思いながら過ごす時間も悪くない、そう思った。

そして、藤野さんが接触してきたこと、接待のことを、まだまもちゃんには話していなかった。言うべきか言わないべきかちよつと悩んだけれど、言わないで心配をかけてしまったお見合いのことを考えると、やっぱりちゃんと話しておこうと思い、まもちゃんに声をかけた。

「あのね、まもちゃん。話があるの」

「何の話？」

「実は、藤野さんが接触してきたの」

藤野さんの名前を出した途端、まもちゃんの片眉がぴくりと上につり上がる。そして私は、まもちゃんに接待の話をした。まもちゃんは、何も言わずに話を聞いたまま、ずっと何かを考え込んでいる。すると、話を終えたと同時に財布を手に取り、その財布の中から古ぼけた赤い包みをり出した。そして、その赤い包みを、私の手のひらにポンと乗せた。

「これは？」

「気休めかもしれない。でも、これは昔から僕を助けてくれたお守り。現に怪我也病氣も何もないし、いつも幸せだし！ それに……仕事が絡むと僕は手が出せないから、せめてと思って」

申し訳なさそうな顔で私の手を握りしめ、しよげてしまったまもちゃん。そんなまもちゃんの姿を見ていたら、なんだかとても嬉しくて幸せな気持ちになる。

ああ、私、まもちゃんに大切にされているんだなあ、と。

まもちゃんの気持ちが充分すぎるほど伝わると、途端に自分の中から、ギラギラと漲るほどのパワーが湧いてくる。

「まもちゃん！ 私なら大丈夫だから心配しないで。部長も同席するみたいだし、何かしようとするものならば、殴ってやるわ！」

握りこぶしを作って空を切ると、まもちゃんは私を見てようやく笑ってくれた。まもちゃんの笑顔を見る事ができて、私もほっとした。笑顔を向けているまもちゃんが、ゆっくりと私を抱きしめながら頭をなでる。そしてそっと、呟いた。

「絶対に、無茶はしないで。何かあったら僕に電話して。必ず、駆けつけるからね」

抱きしめる腕に力が込められ、ちょっと苦しいくらい。でも、苦しいほどの幸せを、今、私はもらったのだった。

31・ハプニング

「え」

朝一番、会社に着いたと同時に部長に呼び出された私の口から出た言葉は、部下として相応しい言葉ではなかった。ただ、部長が言った事があまりにも唐突で、他に言葉が出なかったのだ。

「今度の日曜日って明後日ですか？」

「そうなんだ。急だとは思うが、なんとか接待の準備も整いそうだし、何より藤野社長の都合がその日しかつかないんだ。予定があったら悪いが、こちらを優先してもらえるか？」

「は、はい」

今度の日曜日。その日はまもちゃんのサイン会の日だ。このサイン会は女装をせず、素のままのまもちゃんで行うので私もこっそりついていこうと思っていた。でも、よりによってそんな日に接待だなんて。

がつくりと肩を落としながら部長室を出て行き自分のデスクに向かう時、後ろから部長が再び私の名を呼んだ。

「前園。この資料をよく読んで頭に入れといてくれ」

部長に手渡されたファイルを開くと、そこには藤野社長のプロフィールのようなものが書かれており、経営している会社概要や細かなことまで記されている。これを頭に入れるのは、とても大変そうだった。ペラペラとページをめくっていくと、もう何がなんだかわからなくなってくる。日曜日までに覚えられるか不安になった私は、こ

のファイルを家に持ち帰ることにした。

仕事が終わって誠吾さんのマンションに向かう途中、私はずっとファイルを読んでいた。社外秘のファイルではないので、持って帰っても構わない、と部長に言われたため私は頭に内容を詰め込むためにも、帰宅途中の合間もファイルを読んでいたのだ。ちよつとぶつぶつと呟きながらファイルを見ていたので、周りから見たら怪しい女に見えたかもしれない。それでもこの貴重な時間を無駄にするわけにもいかず、周りは一切気にせず、ひたすらファイルに夢中になっていた。

誠吾さんの家に向かう途中、あまりにもファイルに集中しすぎていつの間にか知らない道に出てしまった私。

なんで私、こんな川沿いの道にいるの……？　ていうか、ここどこ！？

夕日が沈みそうな川沿いの道は、犬の散歩やジョギングの人が溢れている。子供の賑やかな声も少しずつ減っていく、やがてこの道も闇に包まれようとしていた。そんな中、目の前を散歩している人が、突然前にふらつき、地面に膝をつく様子が目に飛び込んできた。

「大丈夫ですか!？」

「う……」

顔色が悪い。真っ青になって沢山の汗が額に浮かんでいる。その人はよく見るとお腹が大きく、すぐに妊婦なのだとわかった。

このままにはしておけない。救急車呼ばなくちゃ!

咄嗟にバッグからハンカチを取り出し彼女の額を拭き、携帯で救急車を呼んだ。あんなに溢れていた人は大分少なくなっていて、数人の人が心配そうに覗きこんでいる。背中をさすってくれる人、一緒に支えてくれる人、そして汗を拭いてくれる人、皆がとても親切で私は妊婦さんに一所懸命話しかけていた。

「大丈夫ですか？　今、救急車呼びましたからね！」

「ありがとうございます……」

艶やかな黒髪が肩上で切り揃えられており、身に付けているものは何となく上質なものだ。派手なわけではなく、地味なわけでもない。控えめで清楚な服に身を包んだ妊婦さんは、不安げな表情で私を見上げ、震える手で私の手を握っていた。その手を励ますように私も握り返すと、少しホッとしたような表情に変わり、私も同じようにホッとしていた。

やがて遠くから救急車のサイレンが聞こえてきて、その音がだんだん近くなり、やがてすぐ傍で救急車は停車した。すぐに担架に乗せられ運ばれる妊婦さんは私の手を離そうとしない。

「すみませんが乗ってもらえますか？」

救急隊員の方に促され、私はうっかり首を縦に振ってしまった。全くの赤の他人だというのに、良いのだろうか。そう思いながらも、彼女の小さな手を握り締めながら病院へと運ばれていくのだった。

病院に着いた途端、バタバタと慌しく看護師や医師が飛び出してくて、顔色を変えながら医師が看護師に指示を仰いでいる。その様子をただ見ていることしかできない私はおろおろするばかり。看護師に聞いた話では、どうやら破水しているようでもう分娩室に入っただということだ。彼女のことを何も知らない私は、彼女の家族にすら連絡する事ができず、分娩室の前の長椅子の前でうろうろするだけ。何もしてあげられることもなく、かと言って、何も言わずにここから立ち去るのも何だかなあと思ったら、足だけが動いていた。

分娩室に入ってもう、一時間ほど経った頃だろうか。扉の向こうから元気な産声が私の耳まで届き、その元気の良さに安堵していた。

ちょうどその産声と同じ頃、バタバタと忙しない足音が聞こえてきて、その足音は私の目の前でピタリと止まった。

「産まれた……！」

汗びっしょりの男性が喜びに体を震わせながらガッツポーズをしている。多分、彼女の旦那様なのだろう。

「おめでとうございます。可愛らしいお嬢さんがお生まれになりましたよ」

分娩室から助産師さんが出てきて、男性に笑顔を向ける。男性はちよつと涙ぐみながら満面の笑みを浮かべた。そしてくると私の方を振り向き、嬉しさのあまり私の手を握って上下にぶんぶん振った。

「ありがとう！　ありがとう！」

男性は舞い上がっているのか、私に疑いの目を向けず嬉しそうに子供が産まれた喜びを噛み締めていた。そして助産師さんに促されるように中へと入って行き、再び私の周りは静けさに包まれていた。どうしよう。帰ろうかな……。

そう思っていた頃、もう一人の男性が私の元に近づいてきて、深々とお辞儀をした。

「奥様についてくださった方ですね。ありがとうございます」

「いえ、そんな」

「私、こういうものでございます」

スッと懷から名刺入れを取り出し、一枚の名刺を私に差し出した。

名刺なんて貰っても困るけれど、いらないうわけにもいかず両手で受け取った。その名刺に書かれている名前と会社名、それはここ最近社長が変わり、この不景気だというのにぐんぐん成長している会社として何度もメディアに取り上げられていた会社名だった。

そこに書いてあった名前は、『黒川商事 社長第一秘書 一柳 晶』

そう書かれていた。

32・ファイルの行方

目の前の男性は丁寧な挨拶と共に深くお辞儀をし、特に必要もないのに名刺まで手渡してくれた。正直、なんと言葉を返せば良いのかわからず、私はただ、頂いた名刺を両手に持ち、彼を見つめ返すしかできない。

しばらく呆然としていたが、やがて一柳さんという方が目を細めて優しく笑いかけ、言葉をかけてくれた。

「今日は本当にありがとうございました。奥様が大変な時にずっとついてくださったのですよね。黒川に代わりお礼を申し上げます」

「いえ、そんなに何度もお礼なんて言っていたただかなくても……でも、無事に産まれたようですね。本当に良かった……」

私はホッとして体から力が抜けた。やっぱり緊張していたのだろうか。体から力が抜けた途端、急激な眠気に襲われた。このままここにいるよりも、今日は帰って眠ったほうがいいかもしれない。親子感動の対面に他人はいらないだろう、そう思った私は、一柳さんに頭を下げた。

「では……私は帰ります。おめでとうございます、とだけお伝えくださいね」

「そんな。何もお礼もしないまま帰してしまっっては、私が黒川と奥様に叱られてしまいます」

「何度も言いますが、お礼は結構です。私はそんな、何もしていませんから。では」

これ以上話を続けると一柳さんに言い負かされそうだったので、私は再び頭を下げてその場から逃げるように立ち去っていったのだった。

病院を出たものの、ここが何処なのかさっぱりわからない。辺りを見回したけれど、あまりこの辺りの地理に詳しくない私は途方に暮れてしまった。

仕方ない。タクシーで最寄り駅まで行って、電車で帰ろう。

病院前に並んでいるタクシーの一台に乗り込んで、私はそのまま駅へと向かい、家まで帰ったのだった。

家に着いた私は欠伸を噛み殺しながらシャワーを浴び、その日はそのままベッドに潜って眠ろうと思っていた。あ、勿論もちろんにはメールはするけれど。電話をしようかとも思っただけれど、もし、仕事で忙しかつたら悪い気がして、メールにとびっきりの愛を込めて送ることにした。接待の日がサイン会に重なってしまったことも書き、今日の出来事も書いた。そうしたらメールの文字数が大変なことになってしまった。電話にしたほうが良かった？ いやいや、一息ついたときにでも私のことを思い出してくれば、それで充分だ。メール送信を済ませ、私はベッドに潜り込んだ。

誠吾さんのベッドは一人で眠るには贅沢なほど広くて、枕も掛け布団もシーツも、全てが新品のように綺麗だ。いつもと違う布団や枕だけど、私はそんなことは関係なく眠りの国へと誘われていったのだった。

翌朝。今日は土曜日だというのに会社は休みではなく、久しぶりの土曜出勤になっていた。月一回は必ず土曜出勤の日があり、それが今日。

今日も会社、明日は接待……なんだかこの一週間、かなり忙しいなあ。

休みというものがなく、溜息ばかり零れる朝。さあ出社しよう！

そう思った時の事だ。

「あれ。あれ？ あれー！？」

会社用のバッグは昨日と同じものを使用している筈なのに、部長から手渡されたファイルが見当たらない。内容を頭に入れておけると言われ、昨日は帰りながらファイルをぶつぶつ読んでいた。それから妊婦さんが倒れて救急車を呼んで……。そこからファイルの記憶は一切ない。

「どどどどうしよう！」

青ざめながら部屋を探すもののファイルは見つからない。必死に昨日のことを思い出すものの、やっぱり何処からファイルを手放したのか、ちっとも思い出す事ができなかった。

その時、ふと、ある物を思い出す。それは昨日、特に必要ないと思いつつも捨てる事ができなかった彼の名刺。もしかしたら、あの廊下の長椅子に置き忘れてしまったのかもしれない！ そう思った私は、名刺に書いてある番号に電話をすることにした。

「……繋がらない」

名刺に書いてあったのは会社の電話番号のみだ。会社に電話しても繋がらないということは、まだ会社に誰もいないのかもしれない。私は再び、途方に暮れてしまった。

途方に暮れていても仕方がない。そう思い会社に向かった私は、部長に謝ろうと出社してすぐに部長室へ向かった。だが、部長は早朝会議に出席していて、今は席を外している。私はそのまま自分のデスクに戻り、自分の仕事を片付けながら部長の帰りを待ちわびていた。

土曜日の会社は全員出社ではなく各土曜日に数名社員がいればいい程度なので、今日休んでいる社員も当然いる。だから、いつもはたくさんいる社員も今日は半分以下だ。加えて営業の社員が部署から出て行ってしまったので、今、この部署内には私しかない。なんだかとても、寂しい感じがした。

パチパチとキーボードを打つ音が部署内に響いている。何度も息を吐きながら時計を見るけれど、部長は一向に帰ってくる気配はなかった。

「はあ……どうしよう」

デスクに頬杖をつきながら目を閉じると、足音がだんだん近づいてくる。私は閉じていた目を開き、部署の入り口に目を向けると、そこには昨日「ありがとう！」と何度も叫びながらぶんぶん手を振る彼と、名刺をくれた一柳さんがいた。

「あ、社長。あちらの方です」

社長と呼ばれる男性が私の方を向くと昨日とはまるで違う男性のように、パリッとした上質なスーツに身を包み、顔付きも昨日の緩んだ表情とは百八十度違うといってもいいくらい凛とした瞳で私を見据えていた。そしてゆっくり私の方に近づき、片手を差し出す。

「昨日は妻が世話になったそうで……本当に感謝しています。ありがとうございます」

差し出された手に自分の手を重ね、握手をすると、嬉しそうにニコニコと微笑みながら昨日のように手を大きく振った。

なんだか、社長さんには見えないなあ。

敏腕社長とワイドショーなどでやっていたけれど、本当なのかし

ら？ どちらかというと秘書の一柳さんの方が敏腕という言葉が似合っているような気がする。

……なんて、失礼なことを考えていたけれど、彼らが何をしに来たのか、それすらもわからないまま、社長さんの待望の第一子の可愛らしさと感動の話を延々とされたのだった。

33・黒川と一柳

デレデレの表情で延々と可愛い我が子の話をするのはいいけれど、一体いつまで続くのだろうか。それにどうしてここがわかったの？ 疑問はいくつもあるけれど、なかなか口を挟ませてはもらえそうもない。始めはちゃんと出来ていた笑顔も、少々引きつってきてしまった。そんな私の様子に気付いたのは、目の前にいる社長さんではなく、傍で控えていた第一秘書の一柳さんだ。

「社長、ご自分のお話はそろそろその辺にされては如何ですか？」
「あ……つと、すまない。つい、昨日の感動を話したくて話したくて」

照れくさそうにぼりぼりと頭を掻いた社長さんは、改めて姿勢を戻し、私に自己紹介を始めた。

「私は黒川譲くろかわじょうといいます。昨日は妻が大変お世話になったとか。どうしてもお礼が言いたくて押しかけてしまったが……迷惑ではなかっただろうか」

「いえ、そんな迷惑だなんて。それにしても奥様が無事にお子様をご出産されて、良かったですね」

「本当に君のお陰だ。ありがとう。感謝してもしきれないくらいだ。それと、昨日病院にこれを忘れていったようだったので届けにきたのだが」

そう言って一柳さんが黒川社長の後ろから控えめに差し出してきたのは、私が今朝、なくしたと思っていたファイルだ。ファイルの中には、会社名も私の名前も書かれている。きつとそれを見て届け

てくれたのだろう。

差し出されたファイルを両手で受け取り、私は思い切り頭を深々と下げた。

「ありがとうございます！ 探していたんです……良かった」

ファイルを胸にぎゅっと抱きしめ、ホッと安堵の息を吐いた私を、ジッと見つめる黒川社長は、何かを考えているのか顎に手を当てたまま黙ってしまった。

「あの、何か？」

「あー、その、ファイルの持ち主について何か書かれていないかと思ひ、無断で中を見てしまったのだが、これは接待の資料だね？」

「ええ。それが何か」

「その、接待には君が行くのか？」

「はあ。その、藤野社長のご指名ですので、断れなくて」

「藤野の指名、か」

黒川社長は、どうやら藤野さんのことを知っているようだ。社長同士の繋がりでもあるのかと思いきや、秘書の一柳さんが言ったことに私は驚きを隠せなかった。

「藤野社長と言えば、最近あまり良い噂を聞きませんね。会社の急成長と共に社長の黒い噂も多く出回っております。特に女性関係の噂は絶えません」

「じよ、女性関係ですか？」

「ええ。女性の前ではとても言い難い内容ですが、確かな情報です。……その接待、貴女はご同行されないほうがよいのではないかと思います」

「そんなこと言われましても、突然キャンセルなどしてしまっ

契約が破談になってしまいますし」

口ではそんなことを言いながらも、正直怖くなってしまった。そんな噂なんて聞いたことはなかったし、部長だって何も言っていないかった。

藤野社長が直々に指名したのは、お見合いの時に私を気に入ってくれたからなのかと思ったけれど、それは違うのだろうか。女性関係の噂、女性の前では言い難い内容、そんなこと言われてしまったら明日の接待に行くのが本当に怖い。でも、今更キャンセルするわけにもいかない。

色々考え込んでいると、黒川社長の大きな手が私の肩に置かれ、にかっ和白い歯を見せて笑う。

「……あまり考えすぎるな。でも、気は張っておけ。嫌なことはきちんと断ること。接待だからって何でも許していいわけじゃない」
「はい」

「よし。大丈夫だ。そんなに心配そうな顔するな」

黒川社長の言葉は力強くて、とても励みになる。太陽のような笑顔を浮かべ、ぽんぽんと肩を叩かれると、なんだかとても気持ち軽くなった。

不思議な人だなあ。あんなに怖くて緊張していたのに、いつのまにか早鐘を打っていた心臓も穏やかになっている。

「あの、ありがとうございます。なんだか、とても落ち着きました」
「そうか、それは良かった。あ、それと君の連絡先を教えてください」
「連絡先ですか？」

「妻がどうしてもちゃんとお礼を言いたいと、そして無事に生まれた子供を見てほしいと言っているんだ」

何度も何度も断ったが、負けました。黒川社長にすっかり言い包められ、私は携帯の番号を教え、改めて自分の自己紹介もする羽目になってしまった。まあ、生まれた赤ちゃんに会いに行けるのはとても嬉しいけれど、この強引さにはすっかり参ってしまった。これが急成長している会社の社長パワーなのだろうか。

無事ファイルが手に戻ってきたことは嬉しいけれど、なんだかすっきり気が重くなってしまった。接待は無事に終わるのだろうか。さくつと終わらせて、まもちゃんのところにも一刻も早く駆けつけたいのに。

話は済んだのか、黒川社長と一柳さんは一礼をすると、満足気に会社を去っていった。その後ろ姿を見て、急にどっと疲れが出たのは言うまでもない。

色々、不安なことはあるけれど、私にはこれがある。まもちゃんから貰ったお守りをそっと胸に抱いて、愛しい彼の顔を思い出していた。

まもちゃん……頑張るよ、私。

弱音は吐かない。決めたことは貫き通す。まもちゃんが頑張ろうとしているのに、私がここで怯んではいけない。

自分に言い聞かせて、再び目の前の仕事にとりかかったのだった。

33・黒川と一柳（後書き）

大変遅くなりましたが、拍手コメントのお返事を書かせていただきました。

よろしければ、活動報告をご覧くださいませ。

いつも本当にありがとうございます！

34・契約の条件

翌日、いよいよ接待の日がやってきた。

昨日は仕事を終わらせてからまもなくと電話はできたけれど、握手会の準備やら打ち合わせやらで忙しいのか、五分ほどうか話できなかった。その時、何度も「無茶はしないで」と念を押されたのだ。

大丈夫、大丈夫。冷静に、冷静に。

自分に言い聞かせるように心の中で呟き、胸にまもなくから貰ったお守りを握り締めた。

今日の接待は、忙しい藤野社長のスケジュールの合間を縫って行くことになっている。通常なら夜に行われる料亭での食事は、少々早いけれど昼間になっていた。店も藤野社長のお気に入りというところで、指定の料亭の個室を押さえてある。真新しい畳の良い匂いにする座敷は、塵一つ落ちていないほど丁寧に掃除が行き届いており、床の間には立派な活け花が飾られている。掛け軸なんかも掛けられているけれど、正直何が書かれているのかはさっぱりだ。

個室のチェック、料理やお酒などのチェックを完璧に済ませ、料亭の玄関先で藤野社長が着くのを私と部長、そして話なんてしたことがない社長とその秘書が並んで待っていた。程なくして一台の車が店の前にやってきた。その車の後部座席からは藤野社長が優雅に出てきた。

「お待ちしておりました」

深々と頭を下げる社長。藤野社長よりも何十歳も年上なのに、何度も何度もぺこぺこ頭を下げる。それだけ、この契約が大事なのだろう。私も深々と頭を下げて藤野社長を迎えたのだった。

座敷に案内を済ませ、穏やかな談笑が続く。

藤野社長は社長らしく堂々と振舞い、そして私に対して何をしようとするわけもなく、仕事の話をしている。

良かった。この調子なら何事もなさそうだわ。

空いたグラスにビールを注ぎながら、内心ホッとしていた。

だが、その気の緩みを見透かされたのか、藤野社長の視線が私に降り注ぐ。そして、しばらく凝視した後、楽しそうに笑い声を上げた。

「いやいや、君が本当は来ないんじゃないかなあって心配していたんだよ」

ぼん、と肩を叩かれ、わはは、と笑う藤野社長。

来なくていいなら来なくなかったわよ！ と心の中で悪態をつきながら、にっこりと微笑み、ビールを注ぐ私。こんな席で何を話したらいいのかわからないので、ボロを出すくらいなら黙って微笑んでいたほうが無難だと踏んだのだ。

「君がここに来るのが条件とは言ったが、契約の条件をもう一つ増やしてもらおうよ。社長、それでいいでしょうか？」

藤野社長は突然、契約についての話を始めた。話の流れを突然断ち切り、契約の話に持っていくなんて吃驚だ。うちの会社の社長は、恐る恐るその条件とやらを聞き、藤野社長は楽しそうに、そして愉快そうに笑いながら私の肩を抱き寄せた。

「あー！」

あまりにも強い力で引き寄せられたので、藤野社長の肩にそのまま頭をもたれるような体勢になり、私は慌てて藤野社長から離れよ

うとした。だけど、藤野社長の力は緩むことなく、私の肩を力強く抱き寄せたままだ。目の前にいる部長も社長も、困ったような表情で、でも何も言えずに座ったまま。

誰も助けてはくれない。自分がなんとかしなくちゃ！

そうは思ったものの、破談になってしまっただけで準備してきたものが全て水の泡だ。肩に置かれた手はかなり不愉快だったけれど、必死で堪えて笑顔を見せた。大人の女の余裕を魅せる！なんてスキルは私にはないので、笑顔もきつと引きつっていたに違いない。仕方ないので、藤野社長の付加条件を話しだすまで待つことにした。すると、藤野社長が私の方を向き、ついに条件とやらを話し出した。

「彼女を、私の会社に引き抜くこと。それが条件です」

誰もが口を開く事ができなかった。

それはあまりにも唐突で、そしてあまりにも意外な条件だったからだ。

私を引き抜く？ この私を？ こんなふつうのOLを引き抜いて何がしたいの？

頭の中はクエスチョンでぎっしり埋まっている。きっと、社長や部長、秘書の方々もそうだろう。私を引き抜いたからといって、藤野社長の会社に有益になることなど何もない。数字や資料と睨めっこすることや、お茶を淹れることくらいしか出来ないのに、一体どうしてこんな条件を？ ますます理解できないこの男の言動を理解するのは、どうやら無理そうだ。その時、藤野社長が席を立ち、私の手を強引に引き上げて立たせた。そして再び肩を抱かれて、楽しそうに話し出す。

「少し外の空気を吸ってくるよ。ここは庭も美しいからね。こちらの女性を、お借りするよ」

「え、あの……！」

ぐいぐいと引っ張られて個室を出て行く私達。座敷には哑然としたままの社長と部長の顔が、少し見えたまま襖は閉められてしまったのだった。

料亭の庭は見事な日本庭園で、植木の手入れは完璧だし、小さいながらもちゃんとした池があり、中には立派な錦鯉が華麗に泳いでいる。その日本庭園が見渡せる、一番良い場所に席が設けられており、私と藤野社長はそこに腰をおろした。そして開口一番、私は藤野社長を責め立てた。

「なんですか、あの条件は！」

「なんですかって、君を近くに置くにはこれが一番良いだろう？」

「人手が欲しいなら募集したらどうですか!？」

「あのねえ……」

呆れたように溜息を吐き、藤野社長はちよつと楽しそうにくつつ、と喉の奥で笑っていた。

「見合いのときに言った筈だよ？ 私は諦めが悪い、と。君を近くに置くには私の会社で、そして誰よりも私の傍で働いてもらうのが一番だ。そのほうが君を拘束しやすい」

「諦めが悪いと言われても、私にはちゃんと恋人がいます。藤野さんとはお付き合いなんてできませんよ？」

「嫌だ、と言わせないようにすることは容易いんだよ。私には地位も名誉も金もある。何でもできる。あんな貧相な恋人とは別れて私と付き合ったほうが絶対に君には良い」

改めて、彼を本当に嫌なやつだと思った。

地位？ 名誉？ 金？ そんなものに目がくらむ私ではない。そして、そんな権力に屈する気なんてさらさらない。こんなお決まりのような台詞を吐くような男が、私は大嫌いだ。そう思ったときには、すでに私は冷静ではいられなかった。

「馬鹿みたい！ 地位も名誉も金もある、だからなんだっていうのよ！ そんなことで私はまもちゃんから離れたりしないんだから。しかもまもちゃんは貧相なんかじゃない！」

激しく捲くし立てた後、はっ、と気付いたときには、もう遅かった。

今日は冷静でいるんじゃないの？ 私！

でも今となってはもう遅い。それに私は沢山の暴言を吐いたことを、後悔していなかった。まもちゃんの悪口を言われて黙っているほど心の広い女じゃないのよ！

眉間に皺を寄せながら、藤野社長を睨みつける私。

ああ、会社の皆さんごめんなさい。きっとこの契約は白紙に戻るでしょう……。

辞表を書かなきゃなあ、と、どこか冷静な私がいた瞬間だった。

35・翼があったなら

「やっぱり君は強気でイイ女だ！」

満面の笑みを浮かべながら両手を広げる藤野社長の仕草は、あまりにも大袈裟で思わず呆氣にとられてしまう。そして訝しげに彼を見つめると、彼はスラックスのポケットに手を突っ込みながら私に問い掛ける。

「返事は君次第。君が我が社に来るといふのなら、この契約は成立する。だけど、君が否を唱えるのなら、契約は破談だ。さあ……どうする？」

先程、契約相手の社長に向かって「馬鹿」と叫んだことは怒っていないようだ。むしろなぜか喜んでいるようにも見えるから不思議だ。

契約破談は、まだされない。ここで私が返事をするのなら、会社は安泰だ。でも、私、藤野さんの会社には行きたくない。どうしたらいいの？

苦渋の決断を迫られて、私は頭を抱え込む。すると、藤野さんは鼻で笑いながら私に手を差し伸べて、きっぱりと言い切ったのだ。

「君には、何不自由のない生活を約束しよう。今のまま、強気な君でいてくれればそれでいい。仕事も比較的楽なものを与えるよう手配しておこう。……さあ、部屋に戻ろうか。返事は皆の前でしてくれ。良い返事を期待しているよ」

藤野さんの中では、すでに私の返事が「YES」だと決まっているようだ。でも、私はまだ悩んでいる。まもちゃんとの思い出がつ

まった会社を窮地に立たせるようなことはしたくない。けれど、会社の為に自分の意思に反したことをするのは、やっぱり何かが違うと思う。

藤野さんの背中を追うように庭を出て、再び個室へと足を運ぶ私達。部屋に辿り着くと、そこには先程よりも人数が一人増えていた。その姿を見て、思わず声を上げた私を見つめる瞳は、とても優しい。まさかこんなところで会うなんて、思いもしなかった。

「藤野社長、どうも」

「な、なんで黒川社長がここに!？」

「いや、久しぶりにここで食事したいなあと思ってね。そうしたら君がここにいてって玄関にいる君の部下に聞いてね、顔でも見に行こうかなあと思ったんだ」

「それは……とても光栄ですが」

藤野さんの顔色が優れない。黒川社長は、相変わらず素敵なお笑いで、飄々と嘘を言いのけた。ここで食事をしたい、なんて嘘。絶対資料を読んで、この場所で接待を行うことを知っていたに違いない。どこか確信めいたものが私の中にはあった。

「やあ、香澄ちゃん。元気かな？」

「か、香澄ちゃん……」

元気かって。黒川社長とは昨日会ったばかりなのに、あまりにもわざとらしい彼の挨拶に、思わず吹き出しそうになってしまった。けらけらと明るく笑う黒川社長は、とても社長には見えなくらい砕けていて、とても話しやすい年上のお兄さんという感じがする。先程の契約条件の上乗せによって暗い表情をしていた社長と部長に、少し明るい色が戻っている。どうやら黒川社長は、場の雰囲気をよくする力があるみたい。

しかし、明るいお兄さんの顔は、次の瞬間、すっかり消えていたのだ。目の前にいるのはビジネス用の顔をした『黒川社長』だ。お兄さんなんて気軽に声をかけられるような感じではない。表情一つで、こんなにも雰囲気が変わる人を、私は初めて見たかもしれない。

「藤野社長、どうやら契約をするのに、条件をつけたとか」

「それは、黒川社長には関係ないのでは？」

「いやいや。彼女が絡むような契約条件なら、私は引かないよ？」

彼女は私の妻にとって命の恩人なんだから。彼女を悲しませるようなことをするのなら、黒川を敵に回す、と言っているのと同じだ」

黒川商事を敵に回す。それは企業にとって脅威になるだろう。それほどまでに黒川という企業は、信じられないくらい業績を伸ばし続けている。何より長く続いている歴史ある会社だから、他企業との繋がりもある。そんな会社を敵に回すなんて、誰もしないだろう。現に藤野さんの額には汗が滲んでおり、顔色もかなり悪い。先程まで私と一緒にいた時の、自信に満ちた藤野さんの姿は、欠片もなくなっていた。

黒川社長は、ふっ、と笑みを零すと、私の方を向いて声をかける。

「さあ、契約の条件は無しだ。そしてこの契約話、私も混ざっていないかな？」

「黒川社長が契約話に！？」

「ああ。だから香澄ちゃん、君はもう帰りなさい。せっかくの日曜日だ、どこか出かけたいよなあ。さあ、行きなさい」

黒川社長は、どこまでお見通しなの？ 私がまもちちゃんのところに駆けつけたいことを知っているの？ そんな話は一切していないのに、黒川社長の配慮が今の私にはありがたかった。

座敷から荷物を取り、社長や部長に挨拶をして私は座敷から抜け

出した。

まだきつと間に合う。まもちゃんのサイン会にはきつと間に合わせてみせる。握手会で自分が性別を偽っていたことを話すまもちゃんは、きつと心細いに決まっている。だから一刻も早く、彼の元に辿り着かなくちゃいけない！

まもちゃん、待っててね！

お行儀は悪いけれど、長い廊下を走り抜けて玄関まで辿り着いた。靴箱から靴を取り出し、そのまま駆け出そうとすると、私の前に一人の男性が立ちはだかる。その人はとても大きくて、私とは全く面識のない人だ。

「申し訳ありませんが、藤野社長に、あなたをここから出さないように言われているのでお戻りください」

「そんな！」

その男性が私の腕を恐る恐る掴もうと腕を伸ばすと同時に、「ぎゃ」と品の無い悲鳴あげた。目の前の男性が腕をとられ、背中で捻られている。そこにいたのは、黒川社長といつも一緒にいる、秘書の一柳さんだった。

「一柳さん！」

「前園様、お怪我はありませんか？ 全く……女性に手をあげようとするなんて、とんでもない輩ですね」

呆れたように溜息を吐き、腕を捻っている男性を前へと突き飛ばした一柳さんは、涼しい顔をしたまま手を叩く。そして私に微笑みかけるその姿に、うっかりときめきそうだ。

「さあ、お送りしましょう。ここは駅から遠いですからね。ご自宅までお送りいたしますでしょうか？」

一柳さんは車のキーを私に見せて、前を歩く。本当なら断らなきゃいけないってわかってるのに、今日はどうしても早く、まもちゃんのところに行きたい。

「あの！ 駅まででいいんです、お願いできますか！？」

都内は道が混みやすい。渋滞なんかに巻き込まれたら大変なので、私はここの最寄り駅から電車で、そう遠くない握手会の最寄り駅まで送ってもらうことにした。

一柳さんが車を料亭の玄関前まで持ってきて、私は後部座席に乗り込む。そして祈るように両手を合わせ、まもちゃんのことを考えていた。

ああ、こんなとき翼があれば、まもちゃんのところへ飛んでいくのに！ そう思わずにはいられないくらい、私の心は焦りの色に帯びている。大事な人の大事な場面を、ちゃんと見守りたい。

まもちゃんのお守りを握り締め、私はゆっくり目を閉じたのだった。

36・浮いてる人と一緒

「一柳さん、ありがとうございました」

料亭の最寄り駅まで車で送ってもらった私は、後部座席のドアをわざわざ運転席から開けに来てくれた一柳さんに、頭を深々と下げた。なんだか、やることなすことがスマートで、無駄な動きがまるで見当たらない一柳さんは、秘書というより漫画に出てくる執事のようなのだ。

「お怪我などされないよう、お気をつけて」

「ありがとうございます。黒川社長にも、どうぞよろしくお伝えください」

「かしこまりました」

目を細めて微笑む姿は、悪いけど雑誌の表紙を飾るモデルなんかよりよっぽどカッコイイ。なんというか……目の保養になる人だなあ。

駅前で一柳さんと別れてから改札にすぐさま向かい、ホームで電車を待っている私は、電車までまだ時間があるので、まもちゃんに電話をかけることにした。携帯をバッグから取り出し、すぐにまもちゃんの番号にかけると、まもちゃんはすぐに電話に出てくれた。

『香澄！？　どうしたの、何かあったの？』

「まもちゃん、何も無いよ。終わったから今、まもちゃんのところに向かってるからね」

『……ありがとうございます。香澄が来てくれたら、何でもできそうだ』

「大袈裟だよ。でも、ちゃんと見守ってるからね。あ、電車来た！

それじゃあ」

『うん。待ってる』

電車に乗る前に電話を切り、そのまま電車に乗り込んだ。電車は中途半端な時間にも関わらず、休日にお出かけする人で車内は賑わっている。それでも朝のラッシュよりは数倍楽だ。普通に立っていただけるのだから。吊革に掴まりながら外の流れ行く風景を、ぼんやりと見つめている。時折、窓に映る自分を見ると、少し緊張した面持ちをしていることに気付いた。

なんだか、私の方が緊張してきたかもしれない……。

胸に手を当てながら早まる鼓動を感じていると、やがて目的地の駅に着くとの車内アナウンスが耳に届く。すると、緊張していた体が、さらに緊張してきてしまった。ドキドキと早鐘を打つ心臓が、まるで耳元にあるように大きく頭の中に響き渡ると、他の音が何一つ聴こえなくなってしまった。

落ち着いて、落ち着いて

自分に言い聞かせながら深呼吸をして、電車を降りていった。

改札を出ると、そこはいつも通りの賑やかな街並み、そして人々が楽しげに闊歩している。駅からそう遠くないまもちゃんの握手会会場は、前回の本屋さんで開催された規模とは違い、少し広めのホールを貸切にして行われるという。そのホールの場所は、教えてもらわなくても知っている。まもちゃんの行きつけの喫茶店のすぐ側にあるホールは、誰が見ても目立つくらい大きな建物だ。階によって色々な催し物が行われているとは聞いた事があるけれど、そこに入るのは初めてだ。そのホール目指して歩みを進めると、会場前に長蛇の列を発見した。そしてその長蛇の列の中でも、なんだかその場に相応しくないような格好の人がいるのが見えた。

「もしかして、あれは……」

恐る恐るその人に近づいていくと、その人も私に気付き、満面の笑みを浮かべた。

「香澄ちゃん、やあ！」

……あくまでもさわやかな挨拶をする人。そう、それは内海先輩だ。

「内海先輩、あの……その姿は一体」

「ああ、これ？ 少しでも彼女に俺の覚えて欲しくてね。どう？」

「う。に、似合ってますよ」

「だろう？」

私服の人々に紛れて列に並んでいる内海先輩の姿は、まるで結婚式に行くようなドレスシーなスーツ姿。別にドレスコードはブラックスタイなわけではないのだけど、あくまでも内海先輩はどうしても自分を全面に押し出して、まもちゃんに自分の姿を印象付けたいらしい。片手には大輪のバラの花束を抱えて、これからプロポーズでもするのだろうか？ と、思ってしまうほど派手だ。

こんなに張り切っている内海先輩の姿を見て、ますますまもちゃんのことを言い出しづらくなってしまったけれど、ここは心を鬼にして内海先輩に事実を知ってもらわなくてはならない。私は、よし！ と、自分に気合を入れて、内海先輩を列から引っ張り出したのだ。

「ちょっとちょっと、香澄ちゃん！ 今列から出たら、また最後尾に並ばなきゃならないよ」

「大丈夫です。私、関係者なので、裏から一緒に入りましょう」

「ええっ！？ な、なんでもっと早く教えてくれなかったの！？」

「……その、言い出しづらくて」

こそそと内緒話をするような声で内海先輩と話をし、私は内海先輩を会場の関係者入り口へと向かって行ったのだった。

入り口付近には、まもちゃんの担当さんが立っていた。きっと、先程まもちゃんに電話した時に担当さんに伝えてくれたのだろう。私の姿を見つけた担当さんが、手を振ってくれた。そして次の瞬間、固まってしまった。無理もない。隣には煌びやかすぎるほどの内海先輩が、バラの花束を抱えて立っているのだから。関係者の方々が、内海先輩の異様な姿に視線を向けては固まってしまっている。なんだか、隣にいるのも恥ずかしいんですけど！

「香澄ちゃん、彼女はどこかな？ 会えるのかな？」

「いや、多分もう握手会がスタートするので、側で見えることはできると思いますよ」

「そっかー。いやあ、終わってからでも話ができると思うと、感激で胸が震えるよ」

「ははは」

そわそわわくわくしている内海先輩に私は固まった笑いしか返すことができなくて、本当のことを言いたい気持ちを無理やり胸に押し込めて、内海先輩と並んで担当さんに連れられ、会場内へと入っていた。

腕時計をちらりと見ると、握手会はどうやらスタート時間を過ぎているようだ。そしてその時、会場から、わーっ！ と大きな声がかかる。しかし次の瞬間、その声がざわめきに変わっていった。

「どうしたんだろう？ 早く観に行こう！」

内海先輩も会場の声が途切れることを不思議に感じたようだ。さあ、これからだ。どうか先輩、失神しないでくださいね。

心の中で、
呟いた。

37・握手会

内海先輩と共にまもちゃんが見える位置まで行くと、少し高くなっている場所にまもちゃんが立っているのが見えた。その姿を見て、隣にいる内海先輩は首を傾げている。

「なんで守が？」

「……」

私は何も答えられなかった。

これからまもちゃんが話すことを、内海先輩がちゃんと受け止めてくれればいいなあと思つた。

しばらく会場内はざわめきが収まらず、まもちゃんも少々困惑している。しかし、そこで怯まずに、しっかりとマイクを握り締めて会場に来てくれたお客さんへと言葉を投げかけた。

「今日は、握手会の前に皆様にお詫びをしなくてはなりません」

マイクを通してまもちゃんの声が会場内に響き渡ると、ざわめきたっていた会場が少しずつ静けさを取り戻していく。そして、まもちゃんは真っ直ぐ前を見据え、いつもより少し声を張り上げて話を始めた。

「前回の握手会で、僕は皆さんに嘘を吐きました。本当は男なのに女性のフリをして皆さんの前に立ちました。性別を偽っていたこと、深くお詫び申し上げます」

言葉の終わりと共に深々と頭を下げるまもちゃんの姿に、私は胸

を打たれていた。

このまま、まもちゃんが本当のことを言わなくても、きっとバレはしないだろうし、バレたとしても何も言わなければそれで済むと思う。実際、性別を偽っている人もいるだろうし、顔を晒さない人だっているのだ。少々の嘘くらい、なんてことないはず。でも、まもちゃんは真面目すぎる性格の持ち主だ。一つの嘘が心苦しくなってしまうだろう、と父親の誠吾さんは言っていた。これはまもちゃんの大きな一歩。しっかりと見届けたい。

まもちゃんが深々と頭を下げている間、会場内のざわめきは収まる気配がない。その時、小さいながらもぱらぱらと拍手が聞こえてきたのだ。小さい拍手は、やがて大きなものへと変化していき、やがて会場内を揺るがすほどの大きな拍手に変わっていった。

まもちゃんの作品が好き。そう言ってくれているお客さんが殆どで、皆がまもちゃんを受け入れてくれたのだ。勿論、女装していたまもちゃんが好きでファンになった人には受け入れてはもらえなかったようだけど、まもちゃんの表情はとても優しく、穏やかな微笑みを浮かべていた。

「うう……まもちゃん、良かったよう」

目には涙、鼻から鼻水、そんな私の泣き顔は誰にも見せられないけれど、まもちゃんが一つのことをやり遂げたことが嬉しくて、そしてその場にいられたことが幸せで、つい、人目を気にせずグスグスと泣き喚いていた。ハンカチで涙を拭い、ふと気付いてしまった。隣にいる内海先輩が、固まってしまっていることに。

「う、内海先輩？」

「……守が、彼女だったというのか？ そんな馬鹿な！」

「あの」

「いや。きつと嘘に違いない。この俺が守の女装姿にときめいた、

だと？」

「あの」

「これは夢だ。夢に違いない」

ぶつぶつと念仏のように一人で喋っている内海先輩は、今にも砂となり風に飛ばされてしまいそうなほどショックを受けている。そんな彼が哀れで、どんな言葉をかけていいのかわからない。だから私はそつとしておこう。そう思い、再びまもちゃんに目を向けたのだった。

その後、握手会は滞りなく終わり、まもちゃんは右手を押さえながら私の元へと帰ってきた。沢山の人と握手をしたので、まもちゃんの右手が少し腫れてしまっているようだ。

「まもちゃん。お疲れ様。手、大丈夫？」

「香澄……ありがとう。でも大丈夫。今、すごく晴れ晴れとした気持ちなんだ」

「そう。それは良かった。でもね、ちょっとあっちにショックを受けている人がいるんだけど」

「あ……」

私の指先の方にいる人物を見て、まもちゃんが苦笑いを浮かべている。部屋の隅っこで小さく体育座りをしている内海先輩。持ってきた大輪のバラの花束までもが、どこかどんよりしているように見える。

まもちゃんは内海先輩の背中に少しずつ近づき、小さくまるまっている先輩の肩を遠慮がちにポン、と叩いた。

「内海、騙しててごめん」

ゆっくりと振り向く内海先輩の表情はどんよりと曇っている、というよりも地獄にでも落ちたような鬼の形相をしていた。その表情に一瞬まもちゃんは怯んだが、負けないように真っ直ぐ内海先輩を見据え、次の言葉を待っている。

「俺を、騙すつもりだったのか」

恨めしそうに内海先輩がまもちゃんに言うと、まもちゃんは大袈裟すぎるほど首を横に振った。思わずその首が飛んでいってしまうのではないかと思ってしまうほど、大きく大きく横に振る。そしてまもちゃんは内海先輩の前で正座をし、大きく体を前に曲げた。

「本当にごめん！ どうしても言い出せなかったんだ。内海を騙そうなんて気持ちとはこれっぽっちもなかったけど、僕が臆病なせいで傷つけてごめん」

しっかりと内海先輩に謝罪の言葉を述べ、まもちゃんは床に額をこすりつけて土下座をした。でも内海先輩は何も言わない。それどころか再び小さく体育座りをして、大きな溜息を吐く始末。まもちゃんは、おろおろとするばかりだ。

しかし、次の瞬間。内海先輩がくるとまもちゃんの方を向き、両手でまもちゃんの腕を力強く掴んだ。

「もうこの際だから、守！ 性転換してくれよ！ それで俺の彼女になれよー！」

あまりのショックで、涙を浮かべながらまもちゃんに性転換しろなんて、とんでもないことを言う内海先輩。まもちゃんは思いがけない言葉を向けられて、何も言えなくなってしまった。でも、ここで内海先輩に反抗したのは、他でもない、この私だ。

「何言ってるんですか！ そんなのダメに決まってるじゃないですか！ 私からまもちゃんを盗るつもりですか……？」

「このショックから、どう立ち直れて言うんだ。好きになったと思ったら、実は男でしかも親友。二重に裏切られたんだぞ、俺は！」
「内海先輩なら大丈夫です。女性にモテモテじゃないですか！ やっぱりかっこいい人はオーラも違うし、なんていうか華がありますしね！」

なるべく早くショックから立ち直ってもらわないと困るので、一所懸命内海先輩を褒めちぎると、どんよりと暗くなっていた内海先輩の表情がどこか嬉しそうに、口端が持ち上がっている。

「……そ、そうかな？」

照れながら、ちらりと私を上目遣いで見上げる内海先輩は、嬉しそうに頬が紅潮している。なんと簡単な男だ！ と内心思いながらも、完全に立ち直ってもらうために私はなおも内海先輩を褒めちぎる。

「うちの女子社員の半分は内海先輩のこと好きって聞いたことありますよー。出世も秒読みだって噂だし、取引先の企業の方も内海先輩だと契約するのが安心だーなんて言っていましたよ！」

やばい。調子に乗って言い過ぎたかな。あまり持ち上げられると人間かえって不審に思うだろうけれど、やっぱり内海先輩は普通とは一味違う。

「そ、そうか。まあ、知ってたけどね」

すっかり機嫌を良くした内海先輩は、すでに満面の笑みを浮かべて、少し自慢げに背を反らしている。呆れるほど単純な内海先輩、でもそれが内海先輩の良いところでもあるのかもしれない。

ご機嫌になった内海先輩が立ち上がり、大輪のバラの花束をまもちゃんに手渡した。

「これは俺からの祝いだと思って貰ってくれ。そしたら、俺はこれで」

そう言いながら背を向けて歩き出す内海先輩は、後姿もやっぱり浮いている。ドレッシーなスーツで握手会に来る人なんていないので、皆が同じように彼を振り返る。

ああ、それにしてもひとまず握手会は終了だ。内海先輩も案外早く立ち直ってくれたし、本当に良かった。

ちらりとまもちゃんを見上げると、何やら手にカードらしきものを持ったまま、固まっている。

「まもちゃん？」

「……」

固まったまま動かないまもちゃんの手元のカードを覗き込むと、それは内海先輩の花束についていたメッセージカードのようだ。

『結婚してください 内海』

たったひと言だけ書かれていたプロポーズの言葉。こんなことカードに込められても、絶対貰ったほうはドン引きに違いない。

「す、ストレートな奴だなあ」

苦笑いを浮かべるまもちゃんの様子が、とても印象的だった。

38・どきどき初対面

握手会は無事に終わり、内海先輩を宥めて帰し、私とまもちゃんは帰り支度をしていた。握手会が終わってすんなり帰れるわけもなく、何度も何度も関係者の方がまもちゃんの元を訪れ、挨拶をしてはまた、挨拶を繰り返す。色々忙しそうなまもちゃんの控え室で暇を持て余す私は、バッグから携帯を取り出した。暇をつぶすには携帯をいじるのが一番手っ取り早い。携帯を取り出すと、メールが届いていることを示すようにチカチカと点滅していることに気がついた。

「あ」

メールは部長からだ。ドキドキしながらメールを開くと、そこには契約話は無事に終了した、との報告がされていた。私が途中で退席してしまったことで契約話がめちゃくちゃになってしまうのではないか、という不安は常に心に残っていたけれど、途中でやってきた黒川社長が何とかしてくれたのかと思って、少しホッとした。

「もう、あんな席はこりごりだわ……」

はあ、と大きく溜息を吐くと、背後からゆっくり腕が回されて、優しく抱きしめられる。勿論、抱きしめてくれるのはまもちゃんだ。

「どうしたの？ 大きな溜息なんか吐いて」

「部長からメールがあってね。接待お疲れって」

「そっか。本当にお疲れ様。それにしても香澄に何もなくて良かったよ。本当に心配だったんだ」

「まあ、色々あってね。あとでゆっくり話すよ。話すと長くなるから」

こうして私達は握手会の会場から、担当さんが用意してくれたタクシーに乗り込んで帰宅した。

誠吾さんの家でお世話になっていたけれど、今日からまもちゃんの家に戻っても良いのだろうか？　そもそも誠吾さんは一体いつ帰ってくるの？　何も聞かされていないので、勝手に出て行ってもいいのかと心配になってしまったけれど、まもちゃんは私の気持ちを察するように、くすつ、と笑い頭をくしゃくしゃと撫でる。

「父さんとの約束はちゃんと果たすよ。きっと今頃、母さんたちは家に帰ってきているはずだから」

「え！？　もう日本に帰国してるの？」

「うん。昨日電話貰ってね。帰国したら真っ直ぐ家に帰るって言うてたから」

やばい。まずい。物凄く緊張するよ！　というより、まもちゃんったら、なぜ言ってくれなかったの！？

これからまもちゃんのご両親に会うのかと思ったら、バッグからパウダリーファンデーションを取り出し、必死に顔を作り直していた。まもちゃんの前で化粧直しをするのは気が引けたけれど、タクシーを降りてしまったらすぐにまもちゃんのご両親との対面が待っているのだ。無理無理、今化粧直ししないと崩れたままで会うことになるてしまう。

化粧直しをしつつ、私は自分の服に目をやる。今日は接待から飛び出してきたから一応スーツは着ているけれど、もう少し華やかなスーツにしておけばよかったよー！　スーツってご両親に挨拶するには少々硬すぎるので、本当はワンピースにしたかったのに。でも着替える暇は無いし、もうこのまま会うしかない。

「まもちゃん。ご両親に嫌われたらどうしよう……」

「香澄なら大丈夫だよ。それよりも両親が香澄を構いすぎて、僕が放置されそうだ」

「そんな。久々の親子の対面なのに、それは流石にないんじゃない？」

「……いや。母ならやりかねない」

私の隣で苦笑いをするまもちゃんを見ていたら、私も少し笑ってしまった。それがどれほど私の気持ちをリラックスさせてくれたことか。いつでも私の気持ちを落ち着かせてくれるのは、他ならぬまもちゃんの笑顔。例えそれが苦笑いでも、だ。元気の源はいつだってここにあるんだ。

まもちゃんの顔を見ながら、座席の上で私達はきゅっと手を握り締めたのだった。

やがてタクシーは渋沢家の前に着き、私は門の前に立ち尽くしていた。

「香澄、どうしたの？」

「いや。ちょっと緊張して」

「……おいで。大丈夫」

私の前に手を差し伸べるまもちゃんは、優しく微笑む紳士のようなだ。

差し出されたその手のひらに自分の手を重ね、私は渋沢家の玄関に入ってしまった。

玄関には見慣れないヒールと大きな革靴が並べられていて、リビングからは楽しそうな笑い声が聞こえてくる。この笑い声は、樹く

んと翠ちゃんだ。そしてまもちゃんのご両親の笑い声も。賑やかなリビングのドアをまもちゃんは躊躇することなく手をかけて、ゆっくりと扉を開いた。ご両親に紹介されるのも緊張するけれど、まもちゃんが漫画家としてこの先やっていきたいという決意を両親に打ち明けることのほうが、はるかに緊張する。

漫画嫌いのお母さんが、まもちゃんを認めてくれるのか？ ううん。きっと大丈夫。

心の中で強く願いながら、私はまもちゃんのご両親と初めての対面を果たしたのだった。

38・どきどき初対面（後書き）

WEB拍手のお礼を書かせていただきました。

活動報告に書きましたので、お時間がありましたらどうぞご覧くださいませ。

いつも沢山の拍手とコメントをありがとうございます。

何よりの宝です。

39・甘えちゃうかも

リビングのドアを開き、賑やかだったリビングが急に静かになる。それと同時に私の緊張も限界を越えてしまいそうだ。

ソファーに腰をおろしているまもちゃんのご両親の視線が、まもちゃんをすり抜けて私へと向けられると、私は深く頭を下げた。

「ははは初めまして！ まままま前園かしゅみです」

「香澄ちゃんったら囃んでるよー」

くすつと笑いながら私につっこみを入れたのは翠ちゃん。そして私は真っ赤に顔を染めたまま、また自己紹介をやり直した。

うわぁん！ 大失敗だよー！！

心の中でさめざめと泣きながらも、表面では笑顔を浮かべている。緊張しすぎて自分が立っているのかすらもよくわからないくらいだ。握り締めた手は震え、笑顔はきつと引きつっているだろう。こんな私に、まもちゃんのご両親は、とても優しく微笑んでくれた。

「そんなに緊張しないで。ね？」

わざわざソファーから立ち上がり、私の肩を撫でる優しい手は、やっぱりまもちゃんの母親だ。まず人を安心させようとしてくれるところなんて、そっくり。笑顔が優しいのも、まもちゃんと同じだ。私はその笑顔を見て、ホッとした。

まもちゃんのお母さんは私とまもちゃんをソファーに座らせて、改めて口を開く。

「香澄さん、初めまして。守の母親です。そしてこちらは主人です」

まもちゃんのお母さんの隣に座っているお父さんは、見た目は少し強面な感じだけど、にこりと微笑むと意外にも可愛い笑顔を見せる。

しばらくご両親の海外での話や、まもちゃんたち兄妹の小さな頃の話などに華を咲かせていると、まもちゃんのお母さんが真剣な表情でまもちゃんと向き合った。

「守。あなた、本当に漫画家を続けるつもりなの？」

私とまもちゃんは驚きを隠せなかった。

まもちゃんのご両親に、まもちゃんは漫画家になったことを話していなかったはずなのに、どうして知っているのだろう。あまりにも私達二人が驚いているので、まもちゃんのお母さんは察したかのように言葉を付け加えた。

「誠吾さんに聞いたのよ。どうか守を応援してやってほしいって」

「父さんに……？ そっか」

「で。どうなの？ 続けるつもりなの？」

「母さんが漫画嫌いなのは知っている。だから言えなかったけど、僕はこの仕事に誇りを持っている。だから、続けていきたいと思ってるんだ」

その後、しばらく沈黙が続いたが、まもちゃんのお母さんが大きく息を吐くと、穏やかな笑みを浮かべていた。

「守が決めたのなら、私は応援する。そのかわり、この道は決して楽ではないの。今売れていても、次が売れなければ食べていけない。読者の期待に応える作品を作っていく、プロの仕事は厳しいの。その覚悟はある？」

「聞かれなくても、覚悟がなければこの世界に足を踏み入れないよ」
「……そう。それなら私は何も言わない。守がやりたいようにやりなさい」

「ありがとう、母さん」

やっぱりまもちゃんのお母さんは、まもちゃんの味方だ。でも、釘を刺すことを忘れないのはさすがだ。きっと、厳しい現実を知っているからこういう忠告ができるんだろうな。だって私だったら、手放して喜ぶしか出来ないと思うから。

まもちゃんの仕事がお母さんたちに認められて、どこかホッとしたのかまもちゃんの表情はとても明るい。モヤモヤしていたものが全て吹き飛び、ようやくまもちゃんの本当の笑顔を取り戻したかのようなうだ。その様子を見ていたら、なんだか私も凄く嬉しい。まもちゃんが嬉しそうに笑っている姿を見るのが、私にとって幸せなことから。

「ところで守。今日だけ私達、ここに泊まっていくつもりなんだけど」

「ああ、構わないんじゃない？　だってここは母さんたちの家でもあるんだし」

「じゃあ、夕飯は香澄ちゃんも一緒に食べましょうよ」

「あ、香澄と僕はこれからでかけるから」

え？　まもちゃんとこれからでかける？　そんな約束してたっけ？　約束を思い出せなくてキョトンとしてみると、まもちゃんが私の方を向いてニコリと微笑む。そして私の手を握り、リビングにいる家族に向かって、少し照れくさそうにボソリと呟いた。

「……今日は香澄と二人きりで過ごしたいから」

頬を染めながら呟くまもちゃんは、やがて顔いっぱい赤くなり、私の手を強く引いてリビングから出て行った。

玄関を出てからも、まもちゃんの腕は私を強く引っ張る。目の前にある、照れた背中がなんだかやけに可愛くて、思わず私の顔もほころんだ。人前で照れくさいことを言うのが苦手なはずなのに、兄妹や両親の前で「二人きりで過ごしたい」と言ってくれたまもちゃんが、たまらなく愛おしい。大好き、まもちゃん。

ぐいぐい引かれた腕が少し緩み、まもちゃんは足を止めた。そして私の方に振り向きなり、頭を深く下げたのだ。

「ちょ、ちよつとどうしたの!？」

「ごめん!　なんだか無理矢理連れ出したみたいな形になって」
「そんな、気にしてないから頭を上げてよ」

まもちゃんが頭を上げ、私と目を合わせる。そしてふわりと笑い、私の体を引き寄せる。暖かなまもちゃんの腕の中に閉じ込められた私は、少しの戸惑いと、眩暈がするほどの幸せを感じていた。自分の居場所は、やっぱりここだ、と。

「今日は、僕と一緒にずっといてほしい。……だめかな」

「ダメじゃないよ!　むしろ嬉しいよ」

「良かった。握手会が終わったら、香澄と一緒に過ごしたくて……」

部屋、予約してあるんだ」

「部屋？」

一瞬、なんのことだかわからなかった。

部屋って、部屋ああ!?　ホテルの部屋ってことだね。

実はまもちゃんと私、ホテルに泊まったことなんて一度もない。急に心臓がドキドキと激しく鼓動を打ち始め、私はその場で固まってしまった。まもちゃんの腕の中で急速に高まる緊張感が、まもち

やんに伝わってしまったらどうしよう。そんなことを考えていたら、まもちゃんが私の耳元にくちびるを寄せて、甘い声で囁いた。

「僕の方が、甘えちゃうかも。そしたら……ごめんね？」

いつも甘えさせてくれるまもちゃんが、私に甘える？

耳にいつまでもまもちゃんの甘い声が、こだまする。二人で過ごすなんて、慣れているはずなのに……私の心臓は、ドキドキしすぎて壊れそうなほど高鳴っていた。

40・もう君を離さない

せっかくご両親が帰国されたというのに、まもちゃんは私の手を引いて実家を出て行ってしまった。今日はこのまま家族団欒で食事でもするのかと思っていたので、まもちゃんが私と二人きりで過ごしたいと言ってくれたことが嬉しくもあり、少々悪いような気持ちだった。

「ねえ、まもちゃん。本当にいいの？　せっかくご両親が帰国されてるのに」

「うん。大丈夫。それに、全部終わったら香澄と二人きりで過ごしたいって思ってたから」

「でも、ご両親に悪い気がするんだけど」

「僕ももう、子供じゃないし。それにほら、しばらくは日本にいたいだから、改めて香澄をきちんと紹介するからね」

まもちゃんがそう言うなら、私はこれ以上何も言えない。

ご両親がしばらく日本にいるというのなら、私の両親とも会ってもらったほうがいいのかなあ。

私はまもちゃんにプロポーズされてから、色々なことを考えていた。

結婚するまではやることが山ほどある。まず始めに考えたのが『結納』のことだ。最近では結納というのは行わず、簡略化されてしまっているようだ。顔合わせといって、両家揃ってどこかで食事をするだけという方法が、最近では主流だという。まもちゃんに色々聞きたいことはたくさんあるけれど、今はひとまず、まもちゃんについて試みよう。

まもちゃんが私の手を引いて歩いていく背中を見つめていると、まもちゃんが私のほうを見ないまま、ぼそりと何かを呟いた。

「え、何？」

「なんか、ごめん。僕、ちょっと強引だったよね」

「まもちゃんにしては珍しいなあとは思ってたけど、でも気にしてないよ」

「そう？ それならいいけど」

ちらりと振り向いたまもちゃんの横顔からは、安堵の色が窺えた。きつと、強引に私を引っ張り出してきたことを気にしていたのだろう。そんな細やかな気遣いが、私はとても嬉しかった。ああ、さすがまもちゃんだなあって思った。

手を繋いだまま駅に行き、十分くらい電車で揺られて着いた場所は、日本で一番人の往来が激しいのではないかと思われる繁華街。その中でも、一番目立つホテルへとまもちゃんは足を向けていく。

もしかして、あのホテルに泊まるの？

それはあまりにも大きく、立派な、そして最近では充実したプランが口コミで広がり、なかなか予約がとれないと聞いていたホテル。女性なら誰でも憧れるような、女性のためのプランが頭を悩ませるほど多くあるという。そして、どのプランをとっても完璧なまでにお客様を喜ばせるという。そんなホテルが今、私の目の前にある。

「ま、まさかここに泊まるの？」

「うん。運良く予約が取れたんだ。……嫌？」

「まさか！ 凄く嬉しい！ ずっと憧れてたの」

「そうか。それなら良かった」

微笑むまもちゃんに手を引かれ、スマートなエスコートでホテル内へと踏み込んでいった。

フロントで予約の名前を告げ、部屋へと向かう。最上階にはいくつかレストランがあり、他の階にもエステルームやプール、シアタ

ールームやお洒落なバーがある。客室も多くあるけれど、週末もなれば予約はぎっしりの大人気ホテルだ。そんなホテルの一室に入った瞬間、私は感嘆の声をあげた。

「うわぁ……！ 素敵……」

ドアを開いて中へ歩いていくと、そこには十人くらい座っても余裕がありそうなレザーのソファがあり、大きな窓からはたくさんのビルが見える。ローテーブルの上にはカードが置かれてあり、そこには『贅沢な時を、お楽しみください』とメッセージが添えられていた。メッセーじカードの隣には色とりどりのウェルカムフルーツが置かれている。こんな立派なホテルでもてなされたことは、未だかつてない私は、初めての経験に感動を覚えていた。

「気に入ってくれた？」

「うん、うん！ すっごく素敵！」

「良かった。女の子がこういうものが好きなのかわからないから、僕なりに調べてみたんだ。良かった、気に入ってくれて」

私も嬉しいけれど、まもちちゃんも嬉しそう。それは、私が喜んだから嬉しくなってくれていると思ってもいいのかな。

それにしても、まもちちゃんったら忙しいのに、私の為に下調べまでしてこんなサプライズを用意してくれているなんて。なんだか、とても愛されているような気がして、心の中がほっこりと暖かくなった。

自然にこういうことができるのも素敵だけど、まもちちゃんみたいに「下調べした」と見栄を張らない方がなんだか嬉しい。そういうところが、まもちちゃんらしいなあと思う。

「香澄。今日はね、二人でゆっくりしたいなあと思ったから、夕飯

はルームサービスにしようと思っっているんだ。いいかな？」

「うん！ ルームサービスってちよつと懂れてたんだ」

レストランにならホテルに泊まらなくても行けるけど、ルームサービスってなんとなく映画なんかで見たことしかなかったから、少し懂れていた。二人きりでルームサービスを楽しみ、シャンパンをあけ、ほろ酔い気分で楽しい時を過ごせると思ったら、なんだかわくわくしちゃう。

しばらく、部屋の中の備品やアメニティなどのチェックを楽しみうろうろしていたが、隣の部屋の扉を開けた瞬間、私は固まってしまった。そこには、存在感たっぷりなキングサイズのベッドが、部屋の中央にどん、と鎮座していたのだ。まもちゃんと一緒に泊まる、ということは、まもちゃんと今夜はこのベッドで……なんて考えていたら、急に恥ずかしくて顔が熱くなった。まもちゃんと一緒に寝るのは、久しぶりだ。ましてや、こんなに素敵な部屋でまもちゃんとどなんて……。

香澄、しっかり！ まもちゃんと初めてなわけじゃあるまいし、そんなに緊張しなくていいじゃない！

自分に言い聞かせながら、自分の頬をペしペしと叩く。するとまもちゃんが、私の腕を掴みながら、にこりと微笑んだ。

「緊張してるの？」

「う……少し」

「僕も。香澄と同じように緊張してる」

「ほら」といって、まもちゃんが私の手のひらを自分の胸に当てた。私の手のひらから伝わってくるまもちゃんの鼓動は、私と同じくらい速く打っている。

そうか。まもちゃんも緊張してるのかあ。そっかあ。

自分だけが緊張して、まもちゃんは余裕なのかと思っていた。で

も、緊張していたのはまもちゃんも同じで。それがなんだかとてもホッとした。

気がついたらまもちゃんは、キングサイズのベッドにころんと横になって、まもちゃんの隣をぽんぽん、と手で叩く。

「香澄。おいで」

優しく誘われて、私は自然にまもちゃんの隣に行くと、優しく抱きしめられた。

首筋にかかるまもちゃんの息が、なんだかくすぐったい。背中に回された腕は、包み込むように優しく私を抱きしめている。

「もう、香澄を離さないからね。ずっと僕の傍にいて」

囁くような声が、私の全身に駆け巡る。それは、愛おしいまもちゃんの愛に溢れた言葉。

「ずっと傍にいるよ」そう言いたかったけれど、胸いっぱい言葉が出ない。だから私は、返事の代わりにまもちゃんを抱きしめる腕に力を込めた。

41・二人きりの優しい時間

まもちゃんの腕に抱かれ、私はゆっくりと瞳を閉じた。私とまもちゃんの鼓動が重なり、それが良い子守唄になって……気がつけば、私は意識を手放していた。

「ん……？」

ゆっくりと瞳を開くと、見知らぬ天井がそこにある。ボーっとした頭で記憶を手繰り寄せ、ようやくまもちゃんに抱きしめられながら眠ってしまったことに気がついた。急いでベッドから飛び降り、寝室の扉を開くと、まもちゃんの話し声が聞こえてきた。

「うん、うん。わかりました、ありがとうございます」

誰と話してるのかな？

なんとなく電話中ということもあり、扉を開けたまま中に入れずにいた私は、再び扉をしめようとした。が、そんな私に気がついたまもちゃんは、おいでおいで、と手招いてくれる。だから私は、少し遠慮がちにまもちゃんに近づいた。近づくと同時に、まもちゃんの携帯は切られてしまった。

誰からだったんだろう？

疑問に思いながらも相手を聞けずにいた私。そんな私の考えをいつもわかってしまうまもちゃんは、小さくくすり、と笑ってくしゃくしゃと私の頭を撫でた。

「担当さん、だよ」

「そ、そっかあ」

「香澄はすぐ顔に出るからわかりやすいなあ。これで安心した？」
「ごめん。疑ってるわけじゃないんだけどね」

そう。まもちゃんのことには信じている。でも、好きだから心配になる。

世の中には私よりも素敵な女性は五万というだろう。それでも私を選んでくれたまもちゃんが、いつ心変わりしてもおかしくはない、いつもそう思っている。まもちゃんにとって、私がいつも一番の女性でいられるように努力はしているつもりだけれど、もしも、素敵な女性がまもちゃんに言い寄ってきたりしたら、まもちゃんの心が揺れ動くんじゃないかって凄く心配になってしまう。信じているのに、なんだか矛盾している。

恋愛って理屈じゃないよなあ……。

時々、ふと、そう思う事がある。この感情に、正解なんて一つもないような気がしてしまう。だから、私は自分の気持ちに、もっと自信をもたなくてはいけない。それは今後の課題だ。

「香澄、どうしたの？」

「え？ あ、ううん。なんでもないよ。それよりまもちゃん、私お腹ぺこぺこ」

「じゃあルームサービス頼もうか」

まもちゃんがテーブルに置かれたメニューを持ってきてくれ、私達はソファアーにかけて一緒にメニューを眺めていた。

う……何これ、高っ！

しがないOLの給料では、ルームサービスの食事の料金を支払うにはかなり厳しい。これは……カード分割、なんてできるのかな？
メニューを見ながら唸っている私と、物珍しそうにメニューを見つめるまもちゃん。すると、まもちゃんがメニューから顔を上げて私の顔を覗き込んできた。

「どう？ 何か食べたいものあった？」

「ううう……き、きつねうどん」

「きつねうどん？」

だって。だって、このメニューの中で一番安いのは、きつねうどんなんだもん。バリバリの庶民ですから、いつもよりゼロがひとつ多い値段の料理を頼む度胸なんて私にはなかった。

「もしかして、自分で支払いしようなんて思っていないよね？」

まもちゃんが私を見つめ、真剣に聞いてきた。

え？ 違うの？

いつだってワリカンという環境にいたので、まもちゃんの言葉に私はただ、キョトンとしたまま。まもちゃんはそんな私を見て、くすくすと笑い、頬に小さくキスをした。

「やっぱり香澄は可愛いなあ。ここは僕がちゃんと出すよ。遠慮しないで好きなもの選んでよ。香澄の嬉しそうな顔を見たいから」

まもちゃんったら。自分がどれくらい恥ずかしいこと言ってるかわかってるの？

面と向かって「可愛い」と言われるのは、恥ずかしいけどやっぱり嬉しい。さらりと自然に言ってしまうまもちゃんは、きつと何も計算なんかしていないだろう。だからこそ、その言葉を真っ直ぐ受け入れられるのだ。

自然にこんな台詞が言えちゃうなんて、まもちゃんったら天然すぎる。

年上だけど可愛い。可愛いしいけれど、頼りになる。そんな彼氏のまもちゃん。

私は幸せ者だ。思わず顔がほころんだ瞬間だった。

ルームサービスが運ばれてきて、テーブルにぎっしりと料理が並べられる。シャnpanを頼もうと言ったけれど、実は私もまもちゃんもビールの方が好き。だから私達は肩を張らずに、ビールで乾杯することにした。

琥珀色のビールが部屋のライトの光を浴びて、きらきらと輝いている。しゅわしゅわと泡がはじける音が耳に心地良い。

ああ、早く喉に流し込みたい。

最早、飲兵衛のような台詞だが、実は喉がカラカラだったので一刻も早くビールを流し込みたかった。美味しく飲むためには、喉を極限までカラカラにする！これがビールを美味しく飲むための鉄則だ。

「じゃあ、乾杯！」

「かんぱーい！」

グラスを控えめに鳴らし、私達は同時にビールを流し込む。喉がゴクゴクと鳴り、一気にビールが全身に巡っていくような感覚を覚えた。目の前に座っているまもちゃんも、ぐびぐびと美味しそうに喉を鳴らしている。喉仏が上下して、ゴクゴク音を立てている。

「んー、美味しい！」

私達のグラスは、乾杯から僅か数秒でスツカリ空っぽになっていった。

「いっきに飲んじやったね」

「いいよね。だって私達しかないもんね」

くすくすと一緒に笑いながら、温かい料理を口に運ぶ。どの料理も驚くほど美味しく、空腹だった胃をだんだん満たしていった。

料理もほとんど平らげ、ビールが程よく回った頃、まもちゃんが突然懐かしい話をしてきた。

「……香澄と初めて話した時のこと、覚えてる？」

「勿論」

そう。あれは部署内での定期的な飲み会の時のことだ。

ぼさぼさの髪の毛で、スーツはよれよれの目立たない先輩。おまけに今時見ない瓶底眼鏡で顔を隠していた、謎の人物。それがまもちゃんだった。

「あの時、まもちゃんって私の名前覚えてくれてなかったんだよー」
「そうだったけ？ あの時はもう、あまり人と言葉を必要以上に交わすことなんてないと思ってたからなあ」

でも、それがきっかけでまもちゃんのことを沢山知る事ができたんだよ。

外見がイマイチでも、とても面倒見が良くて優しいってことを知る事が出来た。あの瓶底眼鏡をかけている理由も知った。何度も冷たく突き放されたけれど、最終的には私を好きになってくれたことも嬉しかった。

地下の資料室で、初めてのキス。それもまた、良い思い出だ。

私達はこの夜、出逢った時の懐かしい話に夢中になり、楽しい一夜を過ごしたのだった。

42・マリッジ・ブルー

お酒も回り、私もまもちゃんもふわふわとした気分になり、呂律もあまり回らなくなってしまうていた。

時計を見ると、すでに夜中の一時を指しており、私はゆらゆらと頭を揺らしているまもちゃんの肩を、とんとん、と叩いた。すでに船を漕ぎ始めているまもちゃんは、少し肩を叩いたくらいでは起きてくれないので、少し肩を揺らしてみることにした。

「まもちゃん、起きて。こんなところで寝たら風邪引いちゃう」

「むー……」

「まもちゃんったら！」

「むう」

起きない。握手会を終らせ、両親に自分の職業を打ち明け、精神的にも体力的にも疲れきっていたのだろう。そんな中、私の為にこんなに素敵なホテルの部屋を予約してくれたり、誠吾さんに連絡してくれたりと、自分が疲れているにも関わらず動いてくれる。それはとても嬉しいけれど、同時に心配でもあった。

もしかして私、まもちゃんに無理させてはいないだろうか。

無意識のうちにまもちゃんに無理をさせてしまっているのではないかと、とても不安になってしまう。そう訊いても、きっとまもちゃんなら笑顔で「大丈夫」と言うに違いない。だからこそ余計に心配になってしまう。

まもちゃんと一緒に過ごすこの時間は、私にとってとても大切なものだ。でも、まもちゃんの足手まといになってないか。そして、彼に無理をさせていないだろうか。幸せな結婚を迎える前にどうしてこんなに不安になるのか、自分でもよくわからない。あまりにも

幸せすぎて、突然ネガティブになってしまうつて、私、何か変だ。
左手にきらりと光る、まもちゃんから貰った指輪を見つめながら、
これからのことを考える。すると、どんどんネガティブな自分が顔
を出し、このまままもちゃんと一緒にいてはいけないような気すら
してしまう。さっきまであんなに楽しく笑い合っていたのに、私、
一体どうしたのだろう。

「本当に、まもちゃんと結婚してもいいのかなあ……」

ぼそつと独り言を呟き、はあっと大きな溜息を吐く。窓から見え
るネオンの煌きを目にしても、どこか心が満たされない。素敵な眺
めに美味しい料理、そして愛しい彼が傍にいる。それに不安がある
わけじゃないのに、うまく言えないけれど必ず不安が見え隠れする。
窓辺の椅子に膝を抱えて座っていると、背後からまもちゃんが私
に話しかけてきた。

「結婚、嫌？」

振り返ると、とても寂しそうなまもちゃんの表情が見えた。

そうじゃない。結婚するのが嫌なわけじゃない。でも、うまく言
えないけど、なぜかとても不安なの。

そう言いたかったのに、言葉が喉まで出掛かつては飲み込んでし
まう。このままでは、まもちゃんとの結婚はおろか、まもちゃんに
嫌われてしまうのではないか。それだけは絶対に嫌だ！

私の言葉がまもちゃんに届く前に、まもちゃんはふっとはにかみ
ながら私を見る。そして少し肩を竦めながら、照れくさそうに私に
告げた。

「もしかしてだけど、マリッジブルーってやつかな？」

「これが、そうなの、かな」

「だとしたら、僕は少し安心かな。香澄が本心から僕との結婚を嫌がっているわけではないってことだから」

「嫌じゃないよ！　むしろ、一緒にいたいもん。でも、なんだか不安が広がって、收拾つかないの」

「香澄。僕の言うこと、ちゃんと聞いてね？」

まもちゃんは照れくさそうに頭を掻きながら私の耳元に近づいてきて、静かに囁いた。

「僕を幸せにできるのは、世界中で香澄、唯一人だよ。僕にとって、誰よりも大切なのは香澄だけだ」

宝石のような言葉が耳から体全身へと巡ってくる。囁かれた耳が熱を帯び、その熱はやがて全身を覆いつくしていった。

なんという幸せを、私は手に入れたのだろうか。

まもちゃんの言葉一つで、私の中から不安の二文字が綺麗さっぱり消えていった。

そう。目の前の彼を信じて、一緒に歩いていくと誓ったのだ。疲れたら肩を貸して、借りて、お互い助け合って歩んでいくと決めたのに。なぜあんなに不安だったのだろうか。

「ありがとう、まもちゃん」

「僕の気持ち、伝わった？」

「うん。沁みてきた」

「それは良かった。でも、ああ、恥ずかしかった……」

よっぽど恥ずかしかったのだろう。まもちゃんが顔を両手で覆っている。手のひらで隠しきれなかった耳朶は、愛らしいくらい真っ赤に染まっていた。

大好きな人と、幸せな結婚をする。それって、本当に奇跡みたい

だ。奇跡なのか、運命だと言わなければならないのか。何が正しいかなんてわからないけれど、確かに言えることは唯一つ。

私は、世界一の幸せものだ。

それは、他の人から見たらそうは見えないかもしれない。でも、私にとっては世界一幸せな出来事。

「まもちゃん。一緒に幸せになろうね」

ぎゅっと抱き合いながら、蕩けるほどのキスを交わし、熱く熱を帯びた夜に私達は何度も肌を重ね合ったのだった。

43・いじけ虫

「はあゝ」

溜息を何度も吐いてしまう、月曜日の午後。仕事場のデスクに向かいキーボードを打ちながら、隙をみては溜息を吐く。

月曜日は嫌い。週末のお休みまで一番遠い日だから。働いている人なら、きつとわかってくれるはずだ。

眠たい目を擦りながらもPCと睨めっこをしている私の肩を、ぽん、と軽く叩くのは、部長だった。

「ちょっといいか？」

「あ、はい」

部長に促されるまま部長室へと入り、静かに扉を閉めた。部長がデスクに座ると、デスクに両肘をついたまま私を見上げる。

何か、しでかしてしまっただろうか？

もやもやと様々な思考が巡るものの、ここのところ目立ったミスはしていないはずだ。この前の契約の件も、黒川社長がまとめてくれたと部長も社長も満面の笑みを浮かべていたのを知っている。一体何の話だろうか。

「前園」

「は、はい！」

突然名前を呼ばれて、背筋がしゃん、と伸びる。なぜか身構えている私を見て、部長が派手に笑い始めた。

「そんなに固くなるな。別に説教をするわけじゃないんだから」

「そ、そうなんですか？」

「なんだ、説教されるようなことでもしたのか？」

「いえいえ。滅相もございません！」

首を横に大きく振って、自分は何もしていないと訴えていると、

部長の笑い声はさらに高くなった。

ようやく笑い終えた部長が、目尻にたまった涙を指で拭い取ると、ようやく本題に入ってくれた。

「前園、これは本気か？」

デスクの上に出されたのは、私が書いた『退職願』だった。

そう。実は私、仕事を辞めるつもりなのだ。理由は簡単。まもちさんのお手伝いをしたいから。ただ、その理由を正直に話すのは恥ずかしいので、部長には『結婚するから』と伝えている。所謂、寿退社ってやつだ。

「守は、お前が退社することを知っているのか？」

部長は時々、痛いところをついてくる。

実はまもちゃんには、退社するなんてひと言も話していない。ただ、結婚したら不規則な仕事のまもちゃんを支えたいと思うのは当然だろう。私は仕事をしながら、漫画家の妻としての責を果たす事ができるのか、それがとても心配だったのだ。元来、私は器用ではなく、どちらかといえば不器用なほうだ。だから結婚したら仕事を辞めよう、と、まもちゃんが両親に自分の仕事のことを打ち明けた時、こっそり思っていた。

「……渋沢には、話していません。私の独断で決めたことです」

そう告げると、部長は大きく息を吐き、やっぱりな、という表情を見せた。

「ちゃんと話したほうがいいと思うぞ。これから夫婦になるのなら、なおさらだ」

「……はい」

部長の言うことは尤もだと思う。でも、ここ最近、まもちゃんと
は全く会話をする時間がないのだ。

あれは、まもちゃんとホテルで一緒に甘い時間を過ごした時の事だ。

「香澄。実はこれからしばらく、忙しくなると思うんだ」

「え？　だって握手会終わったら少し仕事が楽になるって……」

「うん。その時はそう言ったんだけど、二ヶ月後、香澄と一緒に旅行したいなあって思ってたね。仕事を増やされちゃったんだ」

「旅行って、私何も聞いてないよ？」

「本当は内緒で進めたかったんだけど、香澄は仕事もあるし相談したほうがいいかと思って。婚前旅行になるけど、一緒に行こう？」

「……うん」

ホテルで突然旅行の話がされた時、どうして勝手に決めちゃうんだらうって思っていた。もっと、一緒にプランを練ったり、あれしたい、これしたいって相談したいのにつて、本当はそう思っていた。旅行は嬉しいけど、ちょっとだけ寂しいなあって感じずにはいられなかったのだ。

その次の日から、まもちゃんの仕事量は今までの倍以上に増えてしまったのだ。仕事部屋からは殆ど出ることもなく、食事も廊下に

置いておくだけ。いつのまにか空になったお皿を提げても、まもちゃんとは私と顔を合わせる事がなかった。

毎日同じ屋根の下にいるというのに、ちっとも顔を合わせる機会はなく、ただ日にちだけが過ぎていく。その時、仕事があればまもちゃんともっと一緒に話したりお手伝いしたりできるかも、と強く思い、それからすぐに退職願を書いたのだ。勿論、顔を合わせることもなかったので、まもちゃんに相談なんて出来ずにいた。

まもちゃんが、遠いなあ……

夜、寝る前にまもちゃんの部屋から漏れる明かりを見ながら、毎日寂しさを感じては、一人でベッドに潜る寂しさを痛感していたのだ。

「そんなわけで、ちっとも会話できないんです」

部長に正直に話すと、部長は「やれやれ」と頭を掻きながら立ち上がり、私の顔を見た。そして真っ直ぐ私を見つめると、静かに口を開きだす。

「これから夫婦になるのに、お前らはどれだけお互いに遠慮してるんだ」

「遠慮、ですか？」

「そうだ。前園はもっと守の邪魔をしてるなんて思わずに、もう少し自分に我が儘になってもいいと思う。守は、ちょっとお前の為に何かしよう、として頑張るすぎている気がするな」

「私の為に、頑張るすぎてる……」

「旅行する時間を作るために、仕事を詰め込まれたんだろう？ お前の為、というか二人の為というか……。まあ、良い言い方をすれば、お互い思い合ってるってことだけだな」

ははっ、と笑いながら、部長が私の肩をぽんぽん、と励ますように叩くと、私は自分がとても恥ずかしくなってしまった。

仕事を続けるも続けないも、どうして一人で決めてしまったのだろう。とても大事なことに、相談一つなく、勝手に退職願を書いて先走ってしまった。そして、まもちゃんが旅行の為に仕事を増やしたことは私だって分かっていたはずなのに、ほんの少しの間会えないだけで、勝手に寂しがっていいじじしていたのだ。

いつだってまもちゃんは私に嫌な顔一つしないのに、旅行のプランを練っていてくれて嬉しい筈なのに、私は勝手に一人で捻くれて……。

「……部長。その退職願、やっぱり返してもらってもよろしいでしょうか」

「そういう素直な前園、可愛いと思うよ」

部長の冷やかに、私は自分の顔が熱くなるのを感じながら、ほぼヤケになって書いた退職願を両手で受け取ったのだった。

44・心のモヤを晴らしましょう

部長室から出た私は真っ直ぐ自分のデスクに行き、手にしていた退職願を引き出しにしまった。

我ながら、先走ったことをしてしまったなあとと思う。でも、まもちゃんのお手伝いがしたいと思って退職願を書いたのは事実だ。勿論、さみしくてちょっとはヤケになって書いたという部分もあるけれど……会社のこと、これからの二人のこと、まもちゃんと相談しなくてはならないことは山のようにある。一つずつ、ゆっくり話合っっていく。そう思った、午後のひと時だった。

会社の終業時間になり、今日は残業もなく真っ直ぐ家に帰る事にした。帰るとき、忘れずに退職願をバッグにしまい、会社を出る。すると、後ろから嬉しそうに、何処か陽気な声が聞こえてきた。

「かつすみちゃん」

こんな呼び方をする人は、会社では唯一人だ。

「……浮かれていますね、内海先輩」

「あれ？ わかつちやった？」

らんらん、とスキップをしている内海先輩は、ニコニコと嬉しそうな笑顔を浮かべながら私の前にやってきた。その姿を見て、内海先輩がいつものように明るくなったことに、私はホッと胸を撫で下ろした。

内海先輩は、ついこの前まで女装したまもちゃんに本気で惚れてしまっていた。実はまもちゃんだ、と言い出せないまま先日の握手

会を迎え、内海先輩の恋は破れてしまったのだ。随分煽てて機嫌良く帰ってくれはしたものの、会社ではあまり元気がなく、取り巻きの女性社員に毎日のように心配されていた。だからこんなに元気な内海先輩を見るのは、久しぶりだった。

「何か良いことでもあったんですか？」

「まあ……ね。今度話すよ。それより、渋谷との結婚の話は進んでるの？」

「ま、まあ、そうですね」

「……微妙なのか」

内海先輩に鋭い質問を浴びせられ、私は少々戸惑ってしまった。結婚の話は進んでいないわけじゃないけど、身動きできない状態だ。どこで、どのように、どういうスタイルで、という話はしたりするものの、準備そのものは全くしていない。式場に足を運んだこともないのだ。

まもちゃんとの結婚は、まだおあずけなのかなあ。

毎日同じ家で過ごしているのだから、婚姻届なんて出さなくても生活は変わらないだろう。でも、何か気持ち違ってくると思う。結婚を急かしているわけではないけど、一度結婚の文字を出したからには、ゴールに向かって準備を始めたい。

まもちゃんは本当に私と結婚したいと思ってるの？

この前のホテルでも結婚への不安が溢れたけれど、実は毎日のように不安はついて離れない。まだ踏み入れた事がない未知の領域『結婚』。結婚したら何かが変わってしまうのだろうか。変化を恐れているわけではないけれど、やっぱり不安なことには変わらない。

モヤモヤと嫌な考えばかり浮かぶ私の隣では、内海先輩が楽しそうに何かを話している。でも、その声が私には届かないくらい、自分のことで精一杯だった。そんな時、突然私の携帯が鳴り出した。

「わっ！ ……と、内海先輩すみません。ちょっと電話に出るのでここで失礼します」

「わかった。お疲れ様」

ひらひらと手を振って駅に向かって歩いていく内海先輩を見送りながら、携帯の通話ボタンを押した。

「もしもし」

『もしもし、俺』

「俺？」

『俺だよ、俺！』

「オレオレ詐欺なら間に合ってます」

なんだ。今時オレオレ詐欺か。

そう思って通話ボタンを躊躇うことなく、ぴつ、と切った。すると、再び同じ番号から電話が掛かってきた。

何度も何度もしつこいなあ！

人が悩んでいる時に、何度も電話を鳴らされて怒っていた私は、怒りに任せて大声で電話口で怒鳴り散らした。

「しつこいなあ、あんた何なのよ！ この暇人！」

怒鳴り散らした後、しばしの沈黙が続き……この後、とんでもない恥をかいてしまった。

『あの、一柳ですが』

一柳さんの声を聞いて、私は失神しそうになってしまった。

そうだ。一柳さんの携帯の番号は、名刺を頂いてから携帯の電話帳に登録をしないままだった。かける機会はないだろうと思い、名

刺だけ手帳に保管してアドレスはいじらず仕舞いで終ったのを、今頃思い出した。

「すすすみませんでした！ 私ったら何て口を……」

『いえいえ、お気になさらず。先程の失礼な電話をしたのは、黒川です。どうもお見苦しいものをお聞かせしてしまい、こちらこそ申し訳ございませんでした』

「いえ。そんな」

一柳さんの涼しい声の後ろで、黒川社長の怒鳴り声が私の耳に届き、それがなんだかとても可笑しかった。途中、一柳さんが電話の向こうにいる黒川社長に「はいはい、少し静かにしましょうねー」なんて言い聞かせているのが可笑しくて、堪らず吹き出してしまった。

「一柳さんと黒川社長は、仲がとってもよろしいんですね」

『仲が良いのかはわかりませんが、これでも一応幼馴染ですので。小さな頃から知っている仲ですよ』

「そうなんですか？ だから二人の会話は楽しそうなんですね」

くすくす、と笑ってしまう。なんか、この二人の会話はいつもどこか微笑ましいから、思わず一緒に笑ってしまうのだ。

一柳さんと黒川社長と一緒に話をしていたら、なんだか結婚の準備が進まないだの、会社を辞めるだの、色々一人で悩んでいた事が馬鹿らしく思えてしまう。

考え込んだって仕方ない。やっぱりちゃんと話すことが大事なんだ！

いつもの前向きな私が、ようやく戻ってきた気がする。一柳さんと黒川社長には感謝しないとね。

それにしても何の用事で電話をしてきたのだろうか。いつまで経

っても、電話の向こうで二人の口論は続いている。どこで口を挟んで良いのか悩んでいると、突然、電話の相手が一柳さんから黒川社長に代わっていた。

『妻が、家に帰ってきたんだ。で、良かったら娘を見に来て欲しいのだが……』

「え！？ そんな、退院して間もないじゃないですか」

『でも、これは妻の強い希望なんだ。ダメか？』

「う……じゃあ、今度の土曜日でよろしければ伺います」

『決まりだな！ 日菜子にも伝えておくから。楽しみにしてる』

そう言った黒川社長は、ブツリと突然電話を切ってしまった。

嵐のような人だなあ……。

喜怒哀楽がすっかり出る社長なんて、なんだか可愛いなあと思う一方で、これは秘書の一柳さんが苦勞する筈だわ、なんて思ってしまった、可笑しくて一人で笑いを堪えていた。

突然の申し出に驚きはしたけれど、このモヤモヤしている気持ちを払拭するには良いきっかけかもしれない。

私は、バッグから手帳を取り出して、土曜日の欄に花丸をつけたのだった。

44・心のモヤを晴らしましょう（後書き）

遅くなりましたが、web拍手のお礼を書かせていただきました。よろしければ、活動報告をご覧ください。

いつもたくさんの方の拍手をありがとうございます。
コメントも、とても嬉しいです！

あと少しですが、どうぞお付き合いくださいませ。

45・まもちゃんパワー充電！

携帯をバッグにしまい駅へと向かう道の途中、一軒の本屋が目にとまった。店頭に並べられている雑誌の数々の中で、私は一冊の本を手にとった。分厚い雑誌をぺらぺらと捲っていくと、やがてその雑誌に虜になっている自分がいた。

「うわ……素敵」

思わず感嘆の息を漏らしてしまうほど素敵な、純白のドレスに身を包むモデルさんが、素敵なブーケを持って様々なポーズをとっている。ウェディングドレスを着ることは、昔からとても憧れていた。いつかは純白のドレスを着て、素敵な花嫁さんに……と、我ながら乙女だなあと気恥ずかしくなりながらも、その憧れだけは決して諦めることはなかったのだ。

「私に似合うのかな……」

それが問題。

自分がドレスを着ている姿なんて、ちっとも想像できない。想像できるのは、自分が友人の結婚式に着て行くフォーマルなドレス姿くらいだ。

私にウェディングドレスを着こなす事ができるの？

雑誌と睨めっこしながら、ぐるぐると考えていた私。だから私の隣に、本屋の店長さんが不審な目で私を見ていることに、全く気付かなかったのだ。

結局、店長さんに不審な目で見られ、その雑誌を買ったはいいいけれど、分厚すぎて重い。でも、早く読みたくて雑誌は重いはずなの

に、足取りは軽かった。

まもちゃんと一緒に、見れたらいいけど……。

仕事に追われているまもちゃんと一緒に、結婚式の話し合いをしたいなあとは思ってはいるものの、頑張って仕事を片付けてくれようとしているまもちゃんの、邪魔にはならないだろうかと心配になる。いつもこうして余計なことを考えてはまもちゃんに怒られているのに、私も懲りないなあ。

前向きに、前向きに。

自分に言い聞かせるように、家路についたのであった。

「ただいま」

まもちゃんの家に帰ると、家の中にはまもちゃんの担当さんが来ていて、どうやら打ち合わせをしているようだ。邪魔しないように、そっとリビングの扉を開き、中を窺う。すると、扉を開けた私にまもちゃんが気付き、パッと明るい笑顔になる。

「お帰り、香澄」

明るいまもちゃんの声に、思わず私も笑顔になった。きっと、仕事が順調なんだろう。まもちゃんの明るい笑顔がそう言っているような気がする。担当さんも私に気付き、同じように笑顔になる。

なんだか、こんなに明るい笑顔のまもちゃんを、久しぶりに見た気がするなあ。

まもちゃんがにこにこ笑っていると、私まで嬉しくなる。そして私はそのまま、まもちゃんの近くに腰をおろした。

「ん？ 香澄、何か買ってきたの？」

「え？ あ、これは……な、なんでもない！」

手に持っていた結婚情報誌を後ろに隠すと、まもちちゃんの笑顔がみるみるしぼんでいく。

「……僕には内緒の物なの？」

「そ、そうじゃなくて」

まもちちゃんと一緒に見たいなあと買って買ってきた結婚情報誌を、担当さんの前で見せるのはなんとなく恥ずかしかった。だから隠したんだけど、何か変な誤解を与えてしまっただろうか。しょんぼりするまもちちゃんに、おずおずと後ろに隠した情報誌を見せた。

「恥ずかしいから後で見せようと思ったんだけど……これ」

「あ、結婚情報誌」

「うう。一人で突っ走ってごめんね」

そう言うと、まもちちゃんは明るく笑う。ははっ、と笑うと嬉しそうに、ふにやりと顔を緩ませた。

「嬉しいんだよ？ 香澄が結婚のことをちゃんと考えてくれてるんだなあってわかって。僕は今、仕事が忙しくてちっとも香澄と今後の話が出来ないままだったから、香澄が怒っちゃうんじゃないかなあって心配してたくらい」

なでなでと、彼の手は私の頭を優しく撫でる。まもちちゃんに頭を撫でられて、そしてそんなことを言ってもらえるなんて嬉しくて、思わず胸がきゅん、としたくらいだ。

そんな私達のバカップルぶりを見せ付けられた担当さんは、「ごちそうさまー」と冷やかして肩を竦めてしまった。

「それじゃあ俺はこれで帰ります。先生、今週はみっちり頑張って

くださいね」

「わかりました。必ず締め切りは守りますから」

「その点は心配してませんよ。先生は仕事が丁寧な上に約束はしっかり守りますから。では、失礼しますね」

担当さんはそのまま会社に戻り、リビングには私とまもちゃんの二人きりになった。

久しぶりの二人きり。ソファーに並んで腰をおろし、まもちゃんが結婚情報誌をぺらぺらとめくっていく。紙が擦れる音だけが室内に響き、私は一緒に情報誌に目を落としていた。すると、まもちゃんの手が、あるページで止まった。

「あ、これ。香澄にすごく似合いそう」

「ホント？ 似合うかなあ」

「うん。きつとすごく可愛い」

ああ、幸せだ。こういうひと時を、まもちゃんと過ごしたかったんだ。

お仕事が忙しくて中々ゆっくりする暇はないけれど、たまにこういう時間を過ごさないと私の中にまもちゃんが足りなくなってしまう。私はこの時間、充分過ぎるほどのまもちゃんパワーを充電する事ができて、とても満足だった。

いつか、まもちゃんが選んでくれたドレスに身を包み、幸せな式が送れることを想像しながら、私はまもちゃんと優しい時間の中で柔らかなキスをした。

46・ご褒美は苺ミルクの味

結婚情報誌を二人で眺めて楽しいひと時を送った後、数日間、私達はすれ違い生活を送っていた。と、いうのも、私自身も今週は仕事がいっぱいいっぱいで、毎日残業していたのだ。夕飯を作る暇も無く、毎日へとへとになって帰宅していた。そして今日はやっと金曜日。今週の仕事は今日でおしまいだ。

今日も残業をし、ようやく仕事が終わったのは夜の九時。もう肩がパンパンだ。とんとん、と肩を叩きながら立ち上がり帰り支度を始めると、同じく残業していた内海先輩に声を掛けられた。

「香澄ちゃん。どう？ 一杯呑んで行かない？」

せっかくのお誘いだったけれど、私はもうへとへとで呑みに行く体力なんて残っていなかった。

「内海先輩、ごめんなさい。もう、へとへとすぎて……」

「そっか。まあ、とりあえず遅いから、駅まで送ってくよ」

「大丈夫ですよ？ 大した距離じゃないし」

「でも、嫁入り前に変な男に襲われたら大変だし」

内海先輩は真面目な顔でこう言うけど、覚えているだろうか？

まだまもなくとお付き合いする前、私が内海先輩に憧れていた頃のこと。家まで送ってくれた内海先輩が私に無理矢理キスをした。あれは正直、衝撃的すぎて、忘れたくても中々忘れられない出来事だった。ドラマのような展開が、まさか自分の身にふりかかるとは誰が思うだろうか。ただ、一生封印したい出来事であるには間違いない。

内海先輩は、きつともう、忘れてしまっているだろう。いや、忘れていて欲しい。忘れていてくれてこそ、今の関係が心地良い。

「先輩。それじゃあお願いします」

「うん」

内海先輩が、こくんと頷きながら「うん」とか言うのと、顔はカッコイイのに言動とのギャップがあって、なんだか可愛く見える。このところ内海先輩は、ちょっとお馬鹿っぷりが目立っていたから、つい、カッコイイということを忘れがちだった。

先輩と並んで駅までの道を歩きながら談笑していると、駅の改札があつという間に見えてくる。話しながら歩くと、駅までの距離がいつもより近く感じるから不思議だ。そして改札に目をやると、私は驚きの声をあげてしまった。

「え！？　なんで」

「あれ？　おーい、渋沢！」

改札から出てきたのは、まもちゃんだった。

仕事をしている時とは違う、スーツ姿で寝癖もない。そして、あの瓶底眼鏡ではなく、ちょっとお洒落な黒縁の眼鏡をかけている。どこかに出かけていたのだろうか。

すると、まもちゃんが私の方を見て、にこりと笑いながら「お疲れさま」と声を掛けてくれた。

「ちょっと出かけてたから、時間も時間だったし、香澄を迎えに行けるかなあと思って。すれ違いにならなくてよかったよ」

「迎えについて、どこか行ってたの？」

「うん。まあ、取材ってどこかな」

肩を竦めながらおどけてみせるまもちゃんは、少し窮屈な首もとのネクタイを緩めながら、えへへ、と小さく笑った。そんな彼の笑顔を見て、うっかり可愛いと胸をきゅん、とさせたことは、彼には内緒にしておこう。可愛いって言葉は、男性にとって褒め言葉にはならないらしい。女性からすれば、褒めてるんだけど……やっぱりカッコイイと言われたいものなのだろうか？ 男心とは難しいものだ。

勝手に一人で色々思い巡らせているうちに、内海先輩がまもちゃんの首元に腕をまわし、軽いヘッドロックをかけていた。一体、どういう流れでこうなった！？ と眉を寄せながら二人を見ていたが、ただ単にじゃれあっているようにしかみえない。どうやら内海先輩は、もうすっかりまもちゃんの女装のことを許してくれているようだ。と、思ったが、ほんの少し苛めっ子の内海先輩が顔を出した。

「あーあ。せっかく香澄ちゃんと二人きりで呑みに行くところだったのに。渋沢がこんなところまで来るから二人きりになれないじゃん」

「香澄と、二人きり？」

「そうだよ。せっかくこれから口説こうと思ったのに」

ふふん、と鼻で笑う内海先輩は、女性社員に騒がれている時の、ちよつとイイ顔をしながらまもちゃんを挑発する。そもそも呑みに行くこと事態、早々にお断りした筈だ。しかし、まもちゃんは内海先輩の言葉を真に受けて、真っ青になっている。

「いやいやまもちゃん。これは冗談だから」

「ほ、本当？」

「もう！ 内海先輩、意地悪しないでください。まもちゃんは信じやすいんですから」

「渋沢ばかり幸せそうだから、ついね」

そう言いながら、内海先輩は私達の先に行く。そして大きく手を振って、「お疲れ」と言いながら微笑み、改札口へ吸い込まれていったのだった。

まもちゃんと二人になり、ちらりとまもちゃんを見上げる。すると、少し元気がないように見えた。

「どうしたの？ まもちゃん」

「……いつのまに僕はこんな人信じやすくなってしまったのかなあ」

確かに。付き合う前のまもちゃんは、今みたいに人を信じる信じない以前に、人を寄せ付けないところがあった。どこか人と壁を作り、それがどんどん剥がれていき、今のように信じやすいまもちゃんになっていったような気がする。

「まもちゃん。人を信じるって良いことだよ？ 私は、そう思う」

「香澄がそう言うなら、それでいいや。それじゃ、帰ろうか。……」

あ、香澄。手、出して」

「はい？」

まもちゃんに言われるがままに手を差し出すと、手のひらにポンと乗せられた小さなお菓子。

「毎日残業頑張っている香澄に、ご褒美」

手のひらに乗せられたのは、小さな苺の包み紙に包まれたキャンディだ。包み紙をくるくると剥がし、淡いピンク色のキャンディを口に頬張る。それは苺ミルク味の、優しくて懐かしい味だった。

「じゃ、行こう」

そう言って、さっ、と目の前に差し出される手のひらに、そっと自分の手を重ねる。じんわりとまもちゃんのぬくもりが伝わって、ゆっくり体温が上がっていくのを感じる。

前もこうやって、手を繋いで駅までの道を歩いたっけ……。

さりげなく車道側を歩いたり、少し前を歩いて人にぶつからないように盾になってくれたり、歩調を緩めて私に合わせてくれたり、紳士的なまもちゃんの態度に、私は嬉しさを噛み締めていたなあと思いつく。今もその時と変わらず、まもちゃんは私を守るように歩いていく。狭い肩幅に広くない背中だけど、逞しさを感じるその背中を見つめるのが大好き。

まもちゃんの背中を見つめながら、口の中でころろとキャンディを転がす。そしてそのキャンディはまもちゃんに片思いしていた頃のことを思い出させ、私はバッグから手帳を取り出した。

その手帳の一番後ろのクリアポケットに、一枚の紙切れが入っている。可愛い可愛い、苺柄の包み紙。

「懐かしいな」

まもちゃんに聞こえないように、ぼつりと呟いた。

苺柄の紙は、前に残業を手伝ってくれたまもちゃんからの初めてのご褒美。

あの時の甘さを忘れない。甘くて優しい、苺ミルクのキャンディの味。優しい甘さに包まれて、まるでまもちゃんのようなと思った、あの残業の夜。

いつまでも、この気持ちの原点を忘れないように、大事に大事に手帳にしまつて。時々、片思いの頃の甘酸っぱい気持ちを思い出しながら、私は前に進んでいく。

優しい思い出が詰まった手帳をバッグへしまい、まもちゃんの手

を握る手に、少しだけ力を込めた帰り道だった。

47・理想の二人

いよいよ運命の土曜日。

先日道で蹲っていた妊婦さんを助けた事が縁で、その旦那様である黒川社長直々に、ご自宅へと招待されていた。しかし、その厚意は嬉しいけれど、会って間もない人の家に一人で行くには少々勇気が必要だ。そこで黒川さんに電話を掛け、もう一人連れて行ってもいいかと尋ねたところ、すんなりOKしてもらえたので今日、こうしてまもなくと一緒に黒川邸を訪ねたのであった。

「……僕は全く面識ないけど」

「ごめんね、まもちゃん。でも、断れなそうだったし一人じゃ心細いし……」

「いや、いいんだけど。でもこの威圧感ったら」

私達は今、目の前に聳え立つ大きなお屋敷を見つめながら冷や汗をかいている。

あまりにも大きすぎる門構えに、インターホンを押すことさえ躊躇ってしまう。立派過ぎる門構えからは、中の庭や家すらも見えない。改めて黒川商事という会社の大きさを痛感した瞬間だった。

しかし、ここでいつまでも二人で突っ立っているわけにもいらない。私は「えいっ」と掛け声を発しながらインターホンへと指を伸ばしたのだった。

インターホンを押したのだが、応答される前に横から一台の車が近づいてきて、私達の目の前でピタリと止まり窓が開いた。

「どうもどうも」

へらっと笑みを浮かべているのは、黒川さん本人だ。ひらひらと手を振りながら緩んだ笑顔を浮かべる黒川さんを見て、今まで緊張していたのは何だったのか、とガックリ膝をつくくらい、疲れがどつと出てきた。

「ごめんごめん。ちょっと仕事で社の方に行ってたから。どうぞ乗って乗って」

言うが早いか、運転席からサッと素早い身のこなしで降りてきたのは一柳さん。笑顔で後部座席の扉を開き、妖艶な笑みを浮かべながら「どうぞ」と乗るように促した。

やっぱり一柳さんは、素敵だなあ。

隣にまもちゃんがいるというのに、私はほんの少し一柳さんに見惚れてしまった。それに気付いたまもちゃんは、ちょっとだけ拗ねたように唇を尖らせる。

「どうせ僕は、子供っぽいですよ」

ふて腐れながら小さな声で、ぽつりと嫉妬の心を見せる。

いやいや、まもちゃん。そんなまもちゃんが私は好きだって、まだ気付いてないの？

ふふっ、と笑いながらまもちゃんを見つめると、まもちゃんはまだふて腐れている。じいっとまもちゃんを見つめると、ようやく私に視線を向けてくれて、私はにっこりと笑みを浮かべた。にっこにしているうちに、まもちゃんは目を泳がせた後に笑顔になり、私達は周りを見無視してらぶらぶしていた。

「おい。べたべたするなら二人でいる時にしてくれ」

堪りかねた黒川社長が、一つ咳払いをしてから私達に警告をした。

流石に私もまちゃんも恥ずかしくなり、俯いたまま声にならぬ小さい声で「すみません」と二人同時に謝ったのだった。

黒川さんの車に乗り、門を潜っても家の前はまだ見えない。どれだけ広いんだ！と突っ込みたいけれど、突っ込む前にお屋敷の入り口が見えてきた。

門から真っ直ぐお屋敷に向かって伸びる道を、一台の車が通っていく。広大な花畑や噴水、バラのアーチなど、どこか別の国に迷い込んだような気がする、この黒川邸の庭に目を奪われているうちに、車はお屋敷の玄関先でゆっくり停車した。

「どうぞ」

またもや素早い動きで、一柳さんが扉を開いて私達が降りるのを待ちわびていた。出来すぎる秘書一柳さん、やっぱり彼は只者ではない。一柳さんはそのまま車をガレージに、黒川さんはお屋敷の玄関を潜っていった。

「ようこそ。さ、日菜子が首を長くして待ってるぞ」

玄関に入ると、あまりにも広い玄関に思わず溜息が漏れる。ここだけで、私の部屋の何倍か！広い玄関に吹き抜けの天井。絨毯張りの廊下にいくつもの扉が見える。部屋を彩る観葉植物やアンティークの置物など、いかにも「社長ですが何か？」みたいな空気が流れている気がした。

内装に目を奪われてキョロキョロしていると、会談の上から鈴のような声が聞こえてきた。

「おかえりなさい。あ……いらっしやい！お待ちしました！」

ふわりとした淡いブルーのワンピースに身を包み、おくるみに包

まれた赤ちゃんを胸に抱いてゆっくりと階段を下りてくる女性、それは黒川社長の奥様の日菜子さんだった。日菜子さんの姿を見て、私はぺこりと頭を下げ、「こんにちは」と挨拶をしようと近づくと、素早く黒川社長が来て、私達の前に立ちはだかる。

「こら！　しっかり消毒しろ！　日菜子、堇は俺が抱くからゆっくり降りて来い！」

「もう、譲ったら。心配性は治りませんね」

黒川社長が日菜子さんから子供を受け取り、胸に抱きながら、とても愛おしそうに我が子を見つめている。その表情は、すっかり社長の顔から父親の顔へと変わっていた。

日菜子さんに聞いたところ、黒川社長は子供が産まれてからというもの、色々なことに気を遣い、ちょっと厄介な性格になってしまったのだという。赤ちゃんが悪い病気にかからないように、私もまもちゃんもきっちり消毒をして、そっと赤ちゃんの顔を覗き込んだ。

「名前は堇だ。可愛いだろ？」

少し自慢げに黒川社長は、ふふんと鼻を鳴らしながらデレデレに崩れた表情で話しかけてきた。デレデレすぎて締まりはないけれど、とても幸せそうなので、なんだかこちらまで幸せな気持ちになってくる。

「うわ、可愛い。お名前は、すみれちゃんっていうのね」

「香澄、見て。りんごのほっぺだね」

ふわふわで丸々した堇ちゃんは、ほっぺがりんごのように赤く、ぎゅっと手を握ったままスヤスヤと気持ち良さそうに寝息を立てている。

「可愛い、ちっちゃい指にちっちゃい爪！ お人形さんみたい」

黒川社長の隣で、嬉しそうに笑みを浮かべる日菜子さん。黒川社長は「そうだろ？」と得意げな顔をしている。

日菜子さんは産後、少し貧血気味のようで少しフラフラすることになったものの、黒川社長が赤ちゃんを抱きながらも日菜子さんに気遣っている。まさに、彼ら夫婦は私にとって理想の夫婦の姿だった。

素敵だなあ……黒川社長と日菜子さん。私達もいつか、こんな風に赤ちゃんができて……。

彼らの姿を見て、私は未来に思いを馳せる。まもちゃんとの、そう遠くない未来、こうして赤ちゃんを胸に抱き、幸せな気持ちを経験する事ができるのだろうか。母親という役割を、私はちゃんとこなすことができるのだろうか。色々思うことはあるけれど、何はともあれ、彼らの幸せそうな姿に、私とまもちゃんはお互い顔を見合わせて、少しでも照れくさそうに笑い合ったのだった。

48・夕暮れ

黒川家のリビングで、私達はお茶に誘われて談笑している。

幸せそうな黒川夫妻に、リビングにも置かれているベビーベッド。そこには、すやすやと董ちゃんが気持ち良さそうに眠っている。ベツドの脇には、可愛らしい動物のメリーがオルゴールのメロディーを奏でながら、ゆっくりと回っている。その様子を見るたびに、自然と顔がほころんでしまう。

「やっぱり赤ちゃんって、いいですね。なんだか心が穏やかになります」

「そうね。私も産むまではどんな感じなんだろうって不安だったけど、やっぱり我が子は愛しいものよ。産んでよかったって、胸を張って言えるわ」

清々しい笑みを浮かべる日菜子さんは、母の空気を纏い、凜とした表情できっぱりと言い切った。その姿は、今の私には眩しいくらいだ。

温かい紅茶を頂きながら普段食べないような高級な焼き菓子を頬張り、この家の安らかな空気を感じていた。すると、リビングの扉が開き、今まで姿を見せなかった一柳さんが帰ってきた。

「どうした、一柳。遅かったな」

「すみません。ちょっと仕事の電話が立て続けに入ったもので」

「何かトラブルか？」

「いえ。心配には及びません。もう大丈夫ですから」

分厚い手帳を抱えながら、ほんの少しだけネクタイを緩めて息を

吐く一柳さん。今の口調からもわかるように、一柳さんは相当優秀な秘書さんのようだ。

黒川社長の秘書とはいえ、運転手もこなしているなんて大変そうだ。休日だというのに、こうして黒川社長と共に過ごさなくてはいけないなんて。

一柳さんは手馴れたように消毒を済ませ、リビングのソファに腰をおろした。先程までの秘書の表情から、ほんの少し緩んでいるような気がするのは気のせいだろうか？ 確か、黒川社長とは幼馴染と聞いてはいるけれど……。そういえば、一柳さんは結婚していないのだろうか？ ふと、そんな疑問が湧いてきた。それを訊いてみようかな、と口を開こうとした瞬間、日菜子さんが先に口を開いた。

「一柳さん。歩さんはお元気ですか？」

「ええ。元気にやっています。今度は歩も連れてきますから」

「楽しみにしてますね」

にこにこ微笑み合いながら日菜子さんと一柳さんが会話をしている。仲良さげな二人を見て面白くないのか、黒川社長が横やりを入れてきた。

「相変わらず、奥方様に尻を敷かれてるのか」

「……心外ですね。讓様にそう言われるとは」

「俺は尻に敷かれてないからな。お前と違って」

「讓様。今はお客様もいらっしゃるので控えますが……私を侮辱したことをおぼえておいてくださいね……？」

「うっ！ わ、悪かったから、そんな目で睨むな！ お前がそんな言葉を言うと、洒落にならないから」

お互い笑顔なはずなのに、ピリピリした空気が痛い。

何、この二人！ いきなり不穏なムードを漂わせて。しかも一柳さんって結婚してたんだ！

ハラハラしながら二人の様子を窺っていると、くすくす、と日菜子さんは笑う。

「相変わらずの二人ですね。お客様が驚かれますよ」

丁寧な言葉遣いで、不穏な空気を和やかにする日菜子さんは凄い。怒るわけでもなく、呆れるわけでもない。そんな彼らの様子を見ていると、この三人はきつと、過去に三角関係だったのかもしれない！ なんて、恋愛小説めいたことを思ったりしてしまう。妄想ばかりが膨らんで、会話が耳に入らなくなるのは、私の悪い癖だ。私の隣に座っているまもちゃんが、何度も私の名前を呼んだみたいだけれど、私はそれに気付くことないまま妄想の世界にどっぷり浸っていたようだ。

妄想の世界から無理矢理引き戻され、再びリビングに明るい笑い声が響く。堇ちゃんのこと、黒川夫妻の馴れ初め、一柳さんの奥様のお話、色んなことを話してくれ、私達の結婚までも応援してくれた。恥ずかしかったけれど、「お幸せに」と、皆が笑顔で言ってくれたのは、本当に嬉しかった。私もまもちゃんも頬を染めつつ、お互い結婚する、という意識が自分の中で高まったような気がした。

楽しい時間はあっという間。日も暮れかけてきたので、私とまもちゃんはそろそろおいとますることにした。一柳さんは車で送ってくれると言ってくれたけれど、私達は丁重にお断りをした。車で送ってもらうのが嫌なわけではない。早く、奥様のところに帰ってあげて欲しいと思ったからだ。

「今日のご馳走様でした」

「いやいや。嬉しかったよ、会いにきてくれて。日菜子も友達が少ないから、楽しかったみたいだ。よければ、これからもちよこちよ

こ遊びに来て、日菜子の話相手になってやってくれ」

少し疲れてしまった日菜子さんは、途中で席を外して二階の部屋で横になっているようだ。産後で体調がまだ充分に戻っていないことと、初めての育児。そして久しぶりに客の相手をして、どっと疲れが出てしまったようだ。

「日菜子さんに、お大事に、とお伝えください。それと、私でよければいつでもお相手しますから」

「そうか。ありがとう。君達も、素敵な結婚生活を楽しみにしておきなさい。きっと、毎日が樂園だから」

黒川社長の言葉に、私の中で結婚への期待がさらに高まった。きっと、黒川社長は、日菜子さんが大好きで大好きで仕方ないのだろう。こんな素敵な夫婦像を目の当たりにして、私もまもちゃんも、お互いが暖かい気持ちになっていった。

帰り道、まもちゃんと並んで歩いていると、まもちゃんが突然私の手を取り、指を絡ませて繋いできた。何の言葉もなく突然手を取られ、冷たい風に晒されていた手がじんわりと温まる。

「まもちゃん……?」

夕日に照らされた彼の横顔に、声をかける。言葉を発さずに真っ直ぐ前を向いていた彼の、優しい眼差しがゆっくりと向けられ、穏やかに微笑んだ。

「僕らにも、可愛い赤ちゃんが授かるといいね。あったかくて優しい家庭を、僕と一緒に築いていこうね」

ほら。まもちゃんはいつとも突然、私が欲しい言葉をくれる。

これはもう、何度目のプロポーズなんだろう。それでも、何度言われても嬉しくて、思わず涙目になってしまう。

同じ思いを共有している。それがこんなに嬉しいことだと知ったのは、まもちゃんと付き合ってから初めてだった。

まもちゃんの言葉に、私はこくと頷き、ぎゅっと彼の腕にしがみついて「うん」と小さく呟いた。

私達を照らす夕日が、なんだかとても暖かい。そんな夕暮れの帰り道。

49・準備はバタバタ！

夕暮れの帰り道から、私達の結婚への意識が急速に高まり、まもちゃんは忙しい仕事の合間を縫って、色々と準備を手伝ってくれた。結婚式は、交通の便が良い駅の近くのホテルに決め、式はホテルのチャペルで、披露宴はそのホテルのレストランで行うことにした。結婚式の準備は山ほどある。衣装決め、披露宴の料理、会場の装花、ブーケ、引き出物、音響……などなど、他にも沢山決めることはある。招待状は式の二ヶ月前発送だし、ドレスは一度決めたら体型が崩れないように、維持していかなくてはならない。

「結構あるなあ」

渋谷家のリビングで、私は結婚式までの「やることリスト」と「招待客のリスト」を、しげしげと眺めていた。まもちゃんは今日は仕事がいっぱいいっぱい。だから二階でアシスタントさんと、ひいひい言いながら机に向かっていて。一人で出来ることは全部やる、とまもちゃんに宣言した手前、音を上げるわけにはいけない。でも、焦らずゆっくり、丁寧に結婚式というイベントを迎えたい。その思いが私を再びリストに向かわせた。

数週間後、結婚式の準備もほどほどに、両家の顔合わせをするこ
とになり、私の両親にはこちらに出てきてもらった。まもちゃん
のご両親はまだしばらく日本にいますが、国内を飛び回っているの
で今日だけは帰ってきてもらい、こうして無事顔合わせをすること
になったのだ。

都内のちょっと名高い料亭を私の会社の部長に紹介してもらい、
顔合わせをすることに。そこにはお互いの両親の他に、樹くんや翠

ちゃんも顔を出した。

樹くんは今、父親の仕事を継ぐために大学院を辞めて一緒に行動し、翠ちゃんは一人暮らしを始めた。少しでも早く自立したい、という彼女の意思を尊重して、一人暮らしを認めることとなった。勿論、まもちゃんはあまり良い顔をしない。「そんなに早く自立しなかつて……」と、翠ちゃんが一人暮らし宣言をした日に、ぽつりと呟いたのを覚えている。可愛い妹がこんなに早く巣立ってしまうなんて、と、まるで父親のようにがっくりと背中を丸めていた。この家から、樹くんも翠ちゃんもいなくなってしまうた寂しさを、私が埋められるかな？

顔合わせは終始和やかなムードで行われ、両家の父親は見事に酔っ払いへと変貌し、傍らで母親が溜息を吐いている姿は、なんとも言えぬおかしさがあった。でも、私達のことをちゃんと認めてくれた両親にはとても感謝している。これから先、家族ぐるみで仲良くしていけばいいなあと思いながら、顔合わせは終了したのだった。

「そういえば、あなたたちはあの家にそのまま住むのよね？」

帰り際に、まもちゃんの母親が聞いてきた。私とまもちゃんは顔を合わせ、今頃になって気がついた。

新居の相談、してなかった！！

全く何の疑問も持たず、私もまもちゃんもあの家に住むものだとばかり思っていたので、結婚式の相談ばかり盛り上がっていたのだ。新居？ え、何それ？ くらいの勢いで、私とまもちゃんはようやく、お義母さんの言葉で気がついたのだった。

「母さんたちがいいなら、僕達はあるそこに住もうかと思ってるけどね？」

「う、うん」

まもちゃんも私も少し動揺していたが、お義母さんにそう告げると、にっこりと微笑んで「住んでくれると助かるわ」なんて言いながら、けらけらと笑っていた。

人が住まない家は傷みやすい。あの家にはきつと、渋沢家の沢山の思い出が詰まっているだろう。そこに私は新たな家族として加わり、思い出をさらに増やしていきたいと思う。だから、新居なんて考えずに、あのままあの家に住むことは大賛成だった。

いつかは、ご両親が家に帰ってくるかもしれない。翠ちゃんや樹くんも帰ってくるかもしれない。皆が帰ってきて家族が揃ったら、きつと皆喜ぶに決まっている。だったら、皆が帰ってくるまで、私とまもちゃんであの家を守っていこう。

顔合わせが終わり、私の両親はそのまま都内をブラブラするからと言って、この場を去っていった。まもちゃんの両親は、なんと、このあとまだ仕事があるらしい。忙しい両親だとは思っていたけれど、改めて本当に忙しい人たちなんだなあと実感した。

「ね、ね、おねえさん」

いつもならご両親と一緒にいて仕事を教えてもらっている樹くんが、私に擦り寄ってきた。ほんの少しお酒を飲んだせいか、少し甘えた声で私を「おねえさん」と呼ぶ。

「樹くん、酔ってる？」

「こんなの、酔ったうちに入らないって。それよりさあ、本当に兄ちゃんでもいいの？」

「ん？」

「兄ちゃんから俺にするなら、今のうちだよ。こんなにお買い得物件を目の前にしてるんだからさあ。ねえ、どう？」

「あのねえ……」

きやはは、と明らかに酔っ払っているような高い笑い声をあげて、樹くんは冗談を言う。懲りないなあと思い、溜息を吐きながら樹くん、ちよっくら説教でもしてやろうと思った瞬間のことだ。「ごん」と鈍い音が、樹くんの頭上に降り注ぐ。

「いってえ！」

「樹……またそうやって、香澄をからかうのもいい加減にしろよ！」

まもちゃんの拳骨が、樹くんの頭上に思い切り降ってきたようだ。樹くんの方が身長が高かったので、まもちゃんの拳は頭上から真っ直ぐ降りず、横殴りのようになってしまっていたけれど、樹くんには効果覲面だったようだ。

「ほら！　こんな乱暴な兄ちゃんより、絶対俺の方が優しいって」

涙目になりながら、まだ冗談を言い続ける樹くんに、くすつと大人びた笑いを向けるのは翠ちゃんだ。

「樹兄は素直じゃないんだから。守兄に構ってもらいたいからって、香澄ちゃんをダシにしちゃ駄目だよ」

「ち……違う！」

凶星をさされてしまったようで、樹くんの顔がみるみる赤く染まっっていく。兄妹が仲良しで、しかもまもちゃんは樹くんと翠ちゃんにとって、親のような存在でもある。頼りになる兄に甘えたい気持ちにはわからないでもない。でも。

「樹くんは、そろそろ兄離れしないとね！　だってまもちゃんは私の旦那様になるんだから」

びしっと人差し指を向けて、樹くんに釘を刺す。

穏やかな笑いと、兄妹の仲良い光景が、心を暖かくしていく。素敵な家族に恵まれて、私はなんて幸せなんだろう。

これからの明るい未来を願って、私はもうすぐ、渋沢香澄になる。

50・HAPPY WEDDING(前書き)

本編の後に、ちょっとしたお話があります。

内海君の憂鬱、というタイトルです。どうでもいい方は、どうぞスルーしちゃってくださいませ！

50・HAPPY WEDDING

結婚式の準備が着々と進む中、ようやく休みを貰う事ができたまもちゃん、その日、私が会社から帰ってくるなり笑顔で駆け寄って来た。

「おかえり、香澄」

「た、ただいま……どうしたの？ 何か、ご機嫌だね」

「まあね。そうそう、明日、旅行しようね」

「明日！？ また、随分唐突だね」

明日から土日で会社も休みなので、行けることは行けるのだけけど、あまりにも唐突過ぎて、少しだけ怪訝な表情をしてしまった。すると、先程まで輝かんばかりの笑顔を向けていたまもちゃんの表情が、みるみる暗くなり、肩を落としてガックリしてしまった。

「……ごめん。一応、前にも旅行しようって言ったんだけど……やっぱり急過ぎるよね。無理だよな」

「だ、大丈夫！ 行こうよ、旅行。まもちゃんと旅行するなんて嬉しいに決まってるじゃない」

「本当？ ……良かった」

ホッと安堵の息を吐きながら、みるみる明るい表情に戻るまもちゃんを見て、思わず胸がときめいてしまった。いつまで経ってもまもちゃんの不意打ちの笑顔に、きゅんとしてしまう。いつになつたら慣れるのかしら。うっかりときめくたびに、つい首を縦に振ってしまうのは、可愛い彼氏を持った女の弱いところかもしれない。

玄関先で突然旅行の話をされ、私はまだ靴を履いたままだ。まも

ちゃんは私のスリッパを目の前に置いてくれて、そそくさとキッチンへ向かう。

「ごめんね、玄関先でこんな話して。さあ、夕飯作ったから着替え
ておいで」

「うん。久々だなー、まもちゃんのご飯。楽しみ！」

エプロン姿のまもちゃんが、にこにこ笑顔でキッチンに向かい、食器をかちゃかちゃと鳴らしながら用意してくれている。その姿を見るたびに、なぜか嬉しくて頬を緩ませてしまう私。仕事からクタクタになって帰ると、そこには最愛の人が出迎えてくれる。それは、心温まるくらい素敵なことかもしれない。

部屋に戻りスーツから私服に着替え、ダイニングへ降りていくと、テーブルには純和風のおかずが並び、ご飯の美味しそうな匂いとお味噌汁の温かな湯気が食欲をそそる。まもちゃんのご飯はいつ見ても完璧だ。「いただきます」と二人で言いながら箸をすすめる。まもちゃんのご飯で困ることと言えば、美味しすぎて食べ過ぎちゃうことくらいかもしれない。和食だし、ローカロリーだし、と自分に言い聞かせて、ぱくぱくと食べ進めるのであった。

「そういえば、旅行って何処に行くの？」

食事中、思い出したように旅行の話をした私。でも、まもちゃん
は、ちよつとニヒルな笑みを浮かべて「明日のお楽しみ」と言いながら、再び食事を始めてしまった。行き先も知らないまま、私は明日を迎えることになりそうだ。それはそれで、楽しいかもしれない……？

次の日は、雲ひとつない青空。まさに旅行日和といっても過言ではない。朝のお天気コーナーで、お天気お姉さんが「この冬、一番の冷え込みです。暖かくしてお出かけください」と、えらく薄着の

格好で言っていた。なんとなく寒くないのでは？　と思わせるような格好はやめていただきたいものだ。

家を出て、ひとまずタクシーに乗り込み、いつもと違う駅まで向かう。勿論、まだまもちゃんは何も言ってはくれない。タクシーの中でも「内緒」を貫き通すまもちゃんに、ちよつとだけ不安を覚えた。

少しくらい教えてくれたっていいのに。

つん、と窓の外を向き、少しだけ頬を膨らませる。まるで子供のようなことをしているなあと思いつつ、これから何が待っているのか全くわからないことへの不満が募るばかりだ。隣のまもちゃんは、窓に肘をつきながら外を眺め、嬉しそうに小さな声で鼻歌を口ずさんでいる。一人だけ楽しそうで、なんだか寂しく感じてしまっていたけれど、まもちゃんの空いている方の手が私の手を握り、ちよつとだけ力を入れて握り締められた。悔しいけれど、それだけで私の機嫌が直ってしまうから困ったものだ。馬鹿な女だと罵られても、仕方ない。だって、それくらいまもちゃんが大好きだから。

タクシーを降り、改札からホームへと向かう。その駅から出ている特別列車に乗り込み、約一時間ほど揺られると、列車は終点に辿り着く。そこは、温泉街から少し外れた所で、小高い丘の上にある駅だ。周りは少し閑散としているが、観光者向けに色々駅前には出ている。お土産屋さんも、観光案内所もある。

「さあ、もうすぐ着くよ」

まもちゃんは笑顔で私の手を引いて歩き出した。

目的地はもうすぐ。ここは温泉街の少し外れた場所。だけど、なんとなく風情ある旅館や、少しセブ向けのホテルが点在している。静けさの中で過ごしたい人には、もってこいの場所のようだ。

まもちゃんに手を引かれ、辿り着いた場所は、古くからあるのか、趣を感じさせる老舗旅館だ。まもちゃんによると、創業百年以上続

いているということだが、すっかりリフォームされていて、過ごしやすいように改装されている。

「香澄は座って待ってて。僕、フロントで受付してくるから」
「うん」

旅館に入るなり女将さんが出迎えてくれ、スリッパを前に差し出された。荷物も運んでくれて、窓際のソファでまもちゃんを待っている間に飲み物とお茶菓子を用意してくれた。

至れり尽くせりは、すでに始まっている。旅行する時、こんな風におもてなしされるのが実は好きだったりする。

「お待たせいたしました。ではどうぞ、ご案内致します」

そう言いながら近づいてきたのは、この旅館の女将さんだ。入り口でそう挨拶されたので、女将さんの顔だけはしっかり覚えている。でも……

「あの、私の連れは……？」

「渋沢様でしたら、少々御用があるそうですので。先にお部屋にお通ししてほしいと仰っております。ですから、どうぞ」

こんな時に突然用事なんてできるものなのかしら？ それとも、担当さんから緊急の用事が入ったとか。ま、まさか、東京帰って来い！なんて言われないよね？

悪い方へ悪い方へと物事を考えてはいけない、分かってはいるけれど、人間って案外ネガティブな方へ色々考えてしまうことはないだろうか。それって、私だけ？

心配しながらも女将さんに部屋へ案内されると、そこは畳の良い匂いがして、しかも広い庭園が臨める。そして庭園の向こうには湖

が煌いているのが見える。この旅館は、少し小高い場所に建てられているので、部屋からの眺めは絶景だった。そしてその最高のロケーションを楽しみながら、部屋についている露天風呂も楽しめるという、なんとも贅沢な部屋だ。

「では。私はこれで。どうぞ、最高の一日をお過ごしください。私達、従業員一同、お手伝い致します」

温かいお茶を淹れてくれた女将さんが、畳の上で三つ指揃えて頭を下げる。向けられた笑顔は、女性が見ても美しいと、思わず呟いてしまうほど綺麗な人だ。

女将さんが部屋から出て行き、私は庭園を眺めていた。淹れてもらったお茶を啜りながら、湖を眺める。

「最高の贅沢だわ」

日頃の喧騒を忘れ、体の奥にマイナスイオンを吸い込みながら大きく腕を伸ばした。

しかし、それにしてもまもちゃんは一切いつ帰ってくるのだろうか。携帯に電話してみよう、と思い、バッグに手をかけた瞬間、部屋にインターフォンの音が響く。

「おまたせ」

扉の向こうにはまもちゃん。でも、さっきまでのまもちゃんじゃない。

「さ。香澄も準備しよう」

「ちょ、ちょっと待って！　どういうこと？」

「ここで、僕達二人きりの結婚式を、挙げよう」

そう。目の前にいるまもちゃんの服は、いつのまにか白のフロツグコートに身を包み、手にはドレスとメイク道具が沢山詰まった箱がある。

「実はね、香澄を驚かせようと思って色々準備してたんだ。旅館の人にも話はしてあるから」

「でも、ここって教会とかないけど……」

「神様の前で愛を誓うのは、今度の結婚式でいいかなって。今日はドレス姿の香澄を、僕が独り占めにしたいっていう願望だから」

照れくさそうに頬を染めるまもちゃん。でも、凄く嬉しかった。

「香澄が綺麗になる姿を、一番最初に僕が見たいんだ。……我が儘かもしれないけど、どうしても譲れなかった」

そう言われて、恥ずかしそうにまもちゃんの唇が私の唇に重なるのと、私の瞳からは涙が零れ落ちた。

それは、突然のことで驚いたけれど、まもちゃんが私をとて愛してくれているのが伝わったから。そして小さな独占欲が、嬉しい。放置されるのも嫌。がんじがらめにされるのも嫌。適度な束縛や独占欲は、私を幸せにするの。まもちゃんに愛されているという、何よりの証拠だから。

部屋に二人、そして私はまもちゃんに化粧を施されている。筆を駆使して私の顔に色を乗せる。そしてドレスに合うように、器用な手付きで『夜会巻き』の髪型にしてくれた。頭上には、燦然と輝くティアラが乗せられ、ティアラと同デザインのイヤリングをつける。そしてウェディングドレス。

「あ、これ！」

「気付いた？ 前に一緒に結婚情報誌見たときに、香澄が素敵って言ってたドレスだよ。あの後すぐに、電話して予約したんだ」

「嘘……どうしよう。すっごく嬉しい」

憧れのドレス。しかも、自分が一番気に入っていたドレスだ。それをまもちゃんが覚えていてくれた！

ドキドキしながらドレスに袖を通すと、それはまるで、私のために仕立て上げられたようにサイズがピッタリで、まもちゃんも私も自然と笑みが零れた。

「凄く似合ってるよ」

ベールを被せながら、まもちゃんが優しく微笑む。少し上を見上げながらまもちゃんの顔を見るが、なんだか恥ずかしくて思わず顔を伏せてしまう。いつもの自分ではないような気がして、気恥ずかしいのだ。でも、まもちゃんがそっと私の頬に触れ、私の顔を上に向かせると、満足気にニコニコしたまま可愛らしいキスをした。

着替え終わってから、私達は特別教会などへ行くこともなく、この旅館自慢の庭園をドレス姿で散策していた。芝生が庭一面に敷かれており、ウェディングドレスの白がよく映える。まもちゃんの白のフロッグコートもよく似合っていて、私のブーケとまもちゃんの胸元の花は、お揃いのカサブランカが飾られていた。

庭からは湖がよく見える。この、素晴らしい景觀に思わず見入ってしまうほど、緑豊かな庭園。庭園には人が殆どおらず、私達はゆっくりと二人きりの時間を過ごしていた。

「ねえ、お腹空かない？」

まもちゃんが突然言い出した言葉に、私は曖昧な返事をした。

「んー、なんだか胸いっぱい……よくわかんない」

「そっか。でも喜んでもらえたみたいで嬉しいよ」

「うん、勿論。まさかドレス着て庭を散策するなんて、思いもしなかったよ」

「そうだよね」

ドレスを着て過ごすなんて、聞いた事がない。でも、これはとても良い記念になった。

私とまもちゃんの、二人きりの結婚式。それはなんとも贅沢で、幸せで……

「つくしゅん！」

「……やっぱ寒いよね」

季節は冬。ドレスの上にケープを羽織っているとはいえ、寒いものは寒い。折角のドレス姿で、鼻をずるずる鳴らす女なんて、なんてみっともない！

しかし、冬の寒さにはやはり勝てず、私とまもちゃんは旅館に戻ろう、と言って、館内に向かって歩き出した。すると、女将さんがカメラを持って私達にカメラを向け始めたのだ。

「女将さん！？ どうしたんですか、それ」

「せっかくの記念ですから、お写真を残されたほうがよろしいのでは、と思ひまして……。これでも昔、かじる程度ですがカメラを嗜んでおりましてので」

カメラを嗜むって、日本語として成立しているのかしら？ なんて余計なことを思いながらも、今日の日の記念として写真を撮ってくださいという厚意は、とても嬉しかった。

私とまもちゃんは、庭園をバックに写真を何枚か撮り、最後は従

業員の方も一緒に記念として集合写真を撮らせてもらうことにした。皆さんが私達のために、色々してくださったことを忘れないために。いつまでも感謝の気持ちを忘れないために。

私達は暖かい館内に戻り、自分たちの部屋の扉を開けると、そこには、驚くほど沢山のご馳走がテーブルの上に並べられていた。テーブルの位置も庭園がよく見えるように動かされていて、ドレス姿のままでも食べやすいように、色々工夫されていた。

「あの、これは……！」

「当旅館から、心ばかりのお祝いでございます。どうぞ、受け取ってくださいませ」

女将さんはニコリと微笑み、そそくさと部屋を立ち去る。まさか、旅館からのサービスで、こんなに豪華なお料理を堪能できるとは思わなかった。

私達は、二人並んで座り、豪華絢爛な料理に舌鼓を打つ。どれもこれも、見た目も味も素晴らしく、そしてこの景観を楽しみながら二人きりで過ごす。今までの人生で、今が一番、素敵な時間を過ごしているかもしれない。

シャンパングラスを、まもちゃんが突然グビッと飲み干し、私を真っ直ぐ見つめる。少しお酒が入ったからだろうか。まもちゃんの瞳は潤んでいて、頬もほのかに染まっている。

「どうしたの？」

「いや、大丈夫」

こほん、と一つ咳払いをして、改めて私を見つめると、まもちゃんはやさしく話しかけた。

「香澄と出会ってから、色んな事があったね。香澄とはこんな風に

付き合うことになるとは思ひもしなかったし……」

「それは、私もそうだったなあ」

「でも、なんか気になって、いつも傍から見守ってた。僕は暗かったし、人にもあまり好かれてなかったし、香澄の傍に寄れば香澄も僕みたいに嫌われてしまうかもって思ったら、自分から近づけなくて……ちよっとじれったかったな」

「……うん」

まもちゃんと付き合うまでの話を聞きながら、思い出が頭の中に甦ってくる。本当に、こんな風に彼と付き合うとは思ひもなかったけれど、まもちゃんが私を気にしてくれていたように、私もまもちゃんを少しずつ意識していていた。あの時は、突然冷たくなったり、優しくされたり、まもちゃんの気持ち全然わからなくなったり落ちて込んだりもしたけれど、今、こうして私の隣に彼はいる。人生って本当に不思議だなあと思わずにはいられない。

「僕は、世界一の幸せ者だよ。香澄が隣にいてくれるだけで、僕はもう充分すぎるほどの幸せを貰ってるから。香澄、僕と一緒にいると言ってくれて、ありがとう」

両手で私の手を握りながらはにかんだように笑うまもちゃんは、いつも以上に可愛くて、私はここでもまた、彼の可愛さに胸をときめかせたのだった。

世界一の幸せ者。それは私も一緒だよ。

喉まで出かかった言葉は、胸がいっぱいすぎて言えなくなってしまう。代わりに、瞳からは涙が溢れ、首を縦に振ることしか出来なくて。それでもまもちゃんは、私をそっと抱きしめて、瞳に堪った涙を唇で拭ってくれた。

私、幸せよ。本当よ。

だって、まもちゃんと一緒なもの。

お互いの手を取り、額を合わせ、視線を繋ぐ。

微笑んだ顔を見つめながら、自然に唇が重なる。

幸せなキスは何度も何度も続き、それはやがて深く激しいものへと代わり……背中ของファスナーがゆっくりおろされた。

ファスナーが下ろされる音すらも愛おしい。彼とのこの時間が、愛おしくて堪らない。

幸せの波が押し寄せる中、私達は深く愛を確かめ合ったのだった。

ミステリアスな彼は、世界で一番、私を愛してくれる男性でした。

おわり

くちよっぱり切ない 内海君の憂鬱

冬。それは人のぬくもりが恋しい季節。世間はクリスマスだお正月だと浮かれている。そんな中、俺は今日も悲しい残業。

「はぁ……なんか虚しい」

久しぶりに燃えるような恋に出逢ったと思ったら、それは親友の女装姿という悲劇。その場合は慰められて立ち直ったものの、家に帰ってから滝のような涙が俺の枕を濡らした。

部屋に明かりを灯すことなく、酒に溺れていた日々……あいつらは知らないだろう。

くすつと小さく虚しい笑いを浮かべ、テレビをつける。テレビでは可愛い女子アナがクリスマスイルミネーションの紹介や、プレゼントするならコレ！と様々なものを紹介している。

「プレゼントって……なんだっけ？」

小さい頃は両親がくれたっけなあ。クリスマスは……過去には彼女に貰った記憶はあるけれど、このところそれもない。特定の彼女を作りたくないわけではないけれど、近づいてくる女の子はなんとなく、彼女にするのは違うような気がする。でも……

「彼女欲しい！　くそっ！　なーにがメリークリスマスだっ！」

と、ビールの空き缶を握りつぶしながら、男、一人泣き。

男・内海。彼女募集中です。

おわり

50・HAPPY WEDDING(後書き)

以上をもって、「続・ミステリアス眼鏡」完結です。

最後まで読んでくださった方、少しでも読んでくださった方、ありがとうございます。

読者様に励まされて、完結する事が出来ました。深く感謝しております。

どうも、ありがとうございました！

再び、お会いできることを願っております。

2010年12月29日 こたろー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8276m/>

続・ミステリアス眼鏡

2011年9月25日07時50分発行